

畏れよ、我を

hi・mazin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悲運な男は死を迎え、異界の神より力を与えられた。

しかし、神は万能ではなかった。

ダンジョンで出会いを求めたい（世界樹の迷宮）

いいだろう、その願い叶えてやろう（ダンまち）

これはそんな物語である。

目次

第一話	伝えたいことはハッキリ言いましょ	1
第二話	半年たってもレベル1。いや、普通はそうです	6
第三話	誤解しないでいただきたい。私は怖くないです	10
第四話	誤解だと否定しても誤解が解けるのは稀である	15
第五話	私の苦勞は何だったんだらう。え、これからも苦勞するの	23
第六話	ダンジョンで出会いを・・・いや、何でもありません	28
第七話	クリーニング代を請求します。なんて言える空気ではありません	35
第八話	私って、もしかしてヤバい子ですか？	41
第九話	私は誤解されるのには慣れてます。ええ、ホントに。	47
第十話	私のコミュニケーション能力は最強である	54
番外編	【ヘステイア・ファミリア】	60
第十一話	運命は廻り、私は流される。	65
第十二話目	女神ヘステイアと神友たち	71
第十三話	私になぜか死亡フラグが……	78
第十四話目	今日は楽しいお祭りです。	85
第十五話	イベントからは逃れられない。	92
第十六話	お買い物？ いえ私に必要ないです。	99
第十七話	あれ？私何か間違えた気がする。	107
第十八話	サポーター？是非仲間に欲しいです。	115
第十九話	迷宮に潜む罫？ 私は知ってるけどね。	122

第二十話	盗難ですか？ 私は全部把握してます。	129
第二十一話	丸く収まったから問題なし。	135
第二十二話	女神ヘステイア様である！	142
第二十三話	私の失言はシャレにならないです。	149
第二十四話	誤解なき日々を目指して。	156
第二十五話	お話は続くよどこまでも。	162
第二十六話	ピンチに陥っても私は見てるだけ。	169
第二十七話	10階層の脅威とは何ですか？	176
第二十八話	一応の和解、そして。	183

第一話 伝えたいことはハッキリ言いました

突然ですが、あなたは神様は万能の存在だと思えますか？

残念、貴方に答えを考える時間を俺は与えません。

はい。答えは×です。だって??

「すまんの。こちらの手違いでお主は死んでしまったんじや」

だって、その神様が目の前でこんなこと言ってんだもの（泣）

「じゃが、安心せい、死後のバックアップ体制は完璧じや。さあ、好きなチートと転生したい異世界を選ぶがよい」

いや、いやいやいやいや。展開が早いし、イロイロとおかしいだろ。

「ん？　そうかのう、最近の流行りだと聞いておったのだが」

いや、確かに色々な業界で流行っていますけど、さすがに自分がその対象に選ばれた？事に驚愕しているというか、まだ、死が実感できていないというか。

正直、混乱しています

「ふむ。なるほどのう、ならばお主が落ち着くまで待とう、何なら死のショックで忘れてしまっているお主の記憶を呼び起こすことも検討しよう」

え？　いいんですか。普通はパツパツと決めてパツパツと転生するか、問答無用で勝手に決められた特典とともに送られるもんじやないんですか。

「他はそうかもしれんが、ワシは人を急かすことは好まん。ゆっくりするがよい」

・・・なんだ、この神様優しいじゃん。この神様ならば胸糞展開やバッドエンド直行コースなんかにはならない気がする（チヨロい）
「ふおふおふお。気持ちは落ち着いたかのう」

はい、お手数をおかけしました。

「うむ。なら、まずは異世界に行くにあたってどんな能力が欲しいのか思い浮かべるのじや」

能力か：：よし！ うおおおおお！ 俺の想像力よ、今こそ、その力を最大まで解放せよ!!（＜注＞力む必要はありません）
「能力固定完了。肉体受肉完了。容姿固定完了。さて。何か違和感はないかのう」

どれどれ・・・うん、軽く体を動かしてみたけど、特に何も無いと思います。それどころか前よりスムーズに動く気がします

「うむ、それは何よりじゃ。次は行きたい異世界を指定するがよい。もちろんランダム選択でも良いぞ」

いえ、指定させてください。僕を、あのダンジョンの世界に連れて行ってください。その街で色々な人と出会いたいんです。

「ダンジョン？ 出会い？ ああ、あの世界か。その容姿と能力だから勘違いしておったよ、なるほどのう、くろすおーばーというやつか。では、新たな生を精一杯生きるがよい」

はい、ありがとうございます。

神様の言葉が終ると同時に俺の意識は遠のいていく。

俺は?? 『私』は新たな世界とこれから出会うであろう人々を想像しながら気持ちの良い微睡に落ちていった。

その日は朝から酷い雨だった。暖かな気候の季節でありながら、それを忘れるくらい寒い日だった。

女神へステイアが『彼女』を見つけたのは偶然だった。

たまたま雨のせいでバイト先の客足も遠のき、店が暇であったため、早めに帰るように店主に言われ、それに素直に従い教会へと帰路へつく途中、ふと、何の変哲もない路地に目が行った。

そこに『彼女』がいた。

薄紫色の髪を両側で三つ編みにした碧眼の少女。

しかし、彼女の全身を見て息が止まりそうになる。彼女のフード付きのローブの隙間からは鎖や足枷などの拘束具が見え隠れしており、彼女の自由を奪うものであるのは明白であった。

「キ、キミ！ その恰好はどうしたんだい!? 誰かに捕まっていたのか！」

彼女は首を横にふり、『違う』と言葉を漏らす

神であるステイアは人の嘘を見抜くことが出来る、故に、彼女は嘘を言っていない、つまり、彼女は誰かに監禁されていた訳ではないようだ。

雨に濡れ体温が下がっているのか、その身体は震えており、顔色も良くない。

「と、ともかく、このままじゃ風邪を引いてしまう、僕のファミリアが近いからおいでよ」

彼女の返事を聞かず半ば強引に彼女の手を引いて廃教会に向かつて速足で向かう。

手を引く彼女から、違う、違う、とつぶやく声が嫌に耳に残った。

はあく（糞でか溜息）やっぱ神様なんて信用できないわく

私の容姿と能力でダンジョンって言ったたら『世界樹の迷宮』だろ。
なんでダンまちなんだよ。

しかも雨も降ってるし、初日が雨の日で雨具なしで路上スタートなんて、ちよつと厳しいんじゃないの？

「どうだい、少しは落ち着いたかな。あ、お腹が空いてるんならそこにあるじゃが丸君でも食べるといい」

でもまあ、そのお陰で女神様に会えたから結果オーライ？

「しかし、本当に酷いやつもいるものだ！こんな拘束具でキミを縛るなんて何を考えているんだ！」

おう、目の前で女神さまがお怒りじゃ。すみません、それ（拘束具）『カースメーカー』のアイデンティティーなんで後で返してもらえます。

ああ、そんなあゴミ箱にシュートするなんて・・・それがなかったら私ほぼ裸なんですが。

「ところでキミ、行く当てはあるのかい？」

ないです。というかこれからの人生ノープランです。

「そつか。それじゃあ僕の眷属にならないかい」

え？ いいの？ 女神様の最初の眷属は主人公の白ウサギさんのはずだよ。それを覆して身元不明の不審者の私を一番にしているの？ 私にはそんな価値ないよ。

「価値がないなんて、そんな悲しいことを言うなよ！ キミにはキミの価値があるんだ」

・・・ちよつと言葉足らずだったせいで子供をあやすように抱擁されてます。

いや、ホントすいません。なんか人生に絶望している様な発言しちゃって。

ある意味嘘を言ってないから私が本当に自分に価値がないと思っ
ていると誤解させちゃった。

うん、ちよつと誤算ではあるが一応ダンジョンもあるし、恩恵を貰えれば別世界の神様から貰った特典も使えるから・・・もう、流されようかな（諦め）

はい、私を貴方のモノにしてください。

「キミは物じゃない！ これからは僕の家族になるんだ」

うわ、またやらかしちやった（汗） うん、喋れば喋るほどドツボに嵌ってしまいそうだから少し黙ろう。

そう思つて女神様に抱擁し返したらなぜか泣かれてしまった。

私は鈍感系ではないから分かる。これは『自分に価値がないと信じている女の子が少し自分に心を開いてくれた』と勘違いされてるパターンかな？

どうしよう、此処まで薄幸少女っぷりを印象づけてしまつてこれから挽回できるかな??

第二話 半年たつてもレベル1。いや、普通はそうです

私がこの世界に来て半年ほどたった。

最初は望んだ世界ではなかったため、かなり意気消沈していたが女神へステイアに恩恵を貰い、『カースメーカー』としての能力が一部だけ使用できることが分かってからはもう頭の中はボウケンシャーだったね

まあ、最初から魔法とスキルが発現してたから、かなり女神様に突っ込まれたり、なんか不憫に思われたり、ステイタスやスキルは絶対に誰にも言つてはダメだとかめっちゃ心配されたなあ

今はこうしてボウケンシャーをやらせてもらっているが最初の頃は女神様が心配して送り迎えしてくれたりしたなあ

あ、女神様に捨てられた拘束具は回収して着てます。だってこれは『カースメーカー』にとつては大切なものだからね（ご満悦）

この半年で女神様とは結構打ち解けましたよコミュニケーション能力は人並みにありますからね

でも、良かれと思つて色々やるたびなぜかよく泣かれるんだよなあ例えば、女神様に捨てられた拘束具を次の日の朝拾つて着なおしてるとなぜかガチ泣きされたし

教会の隠し部屋つて結構狭いから場所を取らないように部屋の隅で体育館座りしてたらガチ泣きされたし

れたし
冒険者登録に行くとき「私には・・・これしかないから」て、言つたらガチ泣きされたし

料理しようと思つて包丁を持ってたら「命を粗末にするなあ」つて言われて包丁を取り上げられガチ泣きされたし

その後で料理してたと誤解を解いたが「まぎらわしい」と言われた

(解せぬ)

私ってホント女神様にどう思われているんだろう。

確かに私の容姿は色白の薄幸系美少女だけど、そこまで病んでないからね、失言しないように気を張ってるから口数が少ないけど、心を閉ざしている訳でもないからね

ご飯をあんまり食べないのは遠慮してるわけじゃなくて、ジャガ丸君に飽きたからです。外に食べに行ったときはたらふく食べてますよ

ふう、少し愚痴ったが、現在は冒険者になれたし、少ないにしろダンジョンでお金を稼げるようになったので万々歳だ

ついでに私は現在迷宮の地下6階にて冒険者組合公認の採取クエストの真つ最中です

え？ オリ主パワーで無双しながらガンガン攻略しないのかって？ ははっ、私の能力が前衛系だったら行けたかもしれないけどね『カースメーカー』でソロはキツイっすよ

おっと、薬草が袋いっぱいになったな、さて帰るか
グルルル！

ああつと！ 採取に集中してたら犬顔のモンスターに囲まれてしまっていた

数は6体か・・・危ない、危ない。世界樹だったら死んでたぜだが、ちようどいい、女神様へのお土産代の足しにしてやるぜくらえ！ 【畏れよ、我を】

成功。全員テラー状態になったぜ！

ふふふ、犬頭どもめ、生まれたての小鹿みたいにプルプル震えおつて

・・・嘘です、全員SAN値チェック失敗して一時的狂気に陥ったみたいになってます。目は血走って零れ落ちそうなくらい見開いて、口からは涎だらだら、プルプルどころかガクガク震えていますなあ

て、ああ!! また、逃げて行っちゃった(涙)

そらそうだよ、恐慌状態に陥ったら我先に逃げていくよね

もしかして、この能力外れだったのかなあ（責任転嫁）

私の魔法の構成上、まず相手を恐怖状態にしないと残りの二つの魔法が死にスキルになるから、戦闘が始まったら、速攻で「畏れよ、我を」で相手を恐怖状態にして、残りの魔法で自滅させたり、同士討ちを狙うんだが、低階層のモンスターって恐怖まいたらすぐ逃げるんだよなあ

そのお陰で半年たっても自力で討伐したモンスターは両手で数えるくらい、一応魔法の使用で「魔力」が、採取のおかげで「器用」荷物の運搬で「力」のステータスが伸びてるが、「耐久」にいたっては殆ど育っていない

【俊敏】？ 知らない子ですねえ（拘束具で動きが制限されている）

はあ、またギルドに頼んで他所の冒険者を紹介してもらおうかなあ。でも、仲介料や、報酬の配分で私の取り分は雀の涙になるしなあ。しかも格下だからって賃金ピンハネしようとするし、もっとも、そんな奴は「畏れよ、我を」からの「命ず、自ら滅せよ」のコンボで自滅していったがなあ（恍惚）

早く、主人公のウサギ君来ないかなあ、来るのは分かっているんだけど、時期的にいつ来るんだろ？

確か、ガネーシヤ様の怪物祭が開催されるより前にオラリアに来てたはずだから

次の怪物祭は四ヶ月以上先だから、そこから逆算したら・・・意外とすぐじゃない？ 確か主人公がここに来るのって怪物祭の二か月くらい前だったと思うから4―2＝2か月

・・・うん、もうすぐだ。これで人手不足解消できる

よし、主人公のために少しでも貯金をするぞ

でもジャガ丸君はしばらくノーサンキュだぜ。いろんな味があるからと言って半年食べ続けるのは、いや〜キツイっすわ

広大な地下迷宮、通称「ダンジョン」を中心に栄える迷宮都市オウリオ。その中で最も活気があると言われる場所の一つといえれば冒険者ギルドであるが、現在はとても静かになっていた。なぜかと言われたら、皆こう答えるだろう

彼女が帰還したからだ。

冒険者になって半年、しかもまだレベル1の冒険者でしかない彼女だが、その知名度はかなり高い

曰く、如何なるモンスターも彼女の言葉を聞けば恐怖して逃げていく

曰く、彼女の怒りに触れたレベル3の冒険者は彼女の言葉一つでまるで赤子のように震え、所持していたナイフで自傷行為を繰り返し入院したらしい

曰く、曰く、曰く。たった半年で幾つもの噂が立ち、その噂が真実であるように彼女の周りでは諍いが起こる

だが、その当事者となったものは誰もその事に対して語ろうとしな

い
いや、皆一つ言葉をつぶやく

【あの女は恐ろしい】と

第三話 誤解しないでいただきたい。私は怖くないです

原作主人公がもうすぐやって来る。そう確信した私はお金を稼ぐために今日も元気に迷宮に潜っていく。

もつとも、私はモンスターを仕留めるのが苦手なので、協力して潜ってくれるファミリアを募集してもらったが、一週間たっても応募がゼロだった。

解せぬ。

仕方がないから今日も一人寂しく潜ってます。え、ソロで潜るのは危険だと受付のお姉さんに止められなかったのだったのか？

もちろん最初は止められたさ、だが、私はそんじやそこらの無謀系オリ主ではない、ボウケンシャーなのだ。

ダンジョンについての知識講義、低階層の地図作成の依頼、採取依頼、モンスターの討伐テスト、などなど。

大よそスキップされるであろうチュートリアルを真面目にこなし「冒険者は冒険をしてはいけない」が口癖の担当のお姉さんに「素行に問題なし。」とお墨付きを貰っているため、ある程度ソロで動き回っても問題はないのだ。

あ、主人公君はチュートリアルをほぼガン無視して無謀なことばかりしているから、同じファミリアになる予定の私はとぼちちりで怒られるんじゃないだろうか。

「新人の手綱をちゃんと握りなさい」って感じに・・・ああ、なんか、その場面がリアルに想像できる。

今の私に苦労性属性まで追加されたら、キャラ盛りすぎって言われそう。

おっと、前方から狼タイプの敵三体接近中。

気づくのが早かったお陰で余裕で余裕で魔法が撃てる。

もつとも、私の魔法は主要人物みたいに派手さは全くないけどね。

さて、せーの【畏れよ、我を】

その日の迷宮はなんだか少しおかしかった。いや、迷宮はいつもおかしく不思議に満ちているが今日は特別だった。

その日は実地訓練の総仕上げとしてファミリアの先輩の先導のもと新人多数のチームで潜っていた。

新人の俺らはこの実地訓練で合格を貰えれば自由に迷宮に行くことを許されるため皆必死になっていた。

しかし、第三階層に入ってから、急にモンスターの様子が変わった。別に急に強くなったとか、イレギュラーが発生したとかじゃないんだが、なんと言うか・・・出会うモンスターが例外なく何か【恐ろしいもの】から逃げてきたかのように恐怖で顔が歪んでいた。

もちろん、まともな精神状態でないモンスターを屠るのは訓練を積んできた俺らにとっては造作もなかった。

だが、先輩だけはこの異常の原因に心当たりがあるらしく、厳つい

顔を歪めていた。

そして、曲がり角の奥を確認した先輩が急に訓練の中止を宣言した。

もちろん、此処まで順調に来ていた俺らは反対し、まだやれるとアピールしたが先輩は「イカれ女」がいるから駄目だと口にする。

「イカれ女」——それは神々の神会でつけられた渾名ではなく、一部の冒険者がある女性冒険者を貶めるためにつけた渾名だと記憶していた。

真面目な先輩がそんな人を辱しめる渾名を口にしたことに少しショックを受けたが、なぜ、彼女がいると駄目なのかどうしても納得ができない俺は先輩が確認していた曲がり角の向うを覗いてみた。

先輩が「馬鹿！ よせ！」と俺の肩を掴むが俺はその手を振り払い好奇心の赴くまま彼女を視界に入れる。

ああ、先輩の言うことを聞いていればよかった、そうすれば、あんな光景見なくてもすんだのに。

曲がり角の向こうでは、狼型のモンスターが狂ったようにお互いを喰い合い、鮮血をまき散らしていた。

だがオカシイ、互いを喰い合っているモンスターはまったく悲鳴をあげていない、それどころか、どこか喜々としてお互いの肉を喰い破っていた。

そんな狂気の中で歪んだ笑みを浮かべる少女の姿に俺は悲鳴を上げそうになるが後ろから先輩が俺の口を塞ぎ皆の元に引きずって行ってくれた。

その後どうやって帰ったか全く覚えていないが、あの少女の歪んだ笑顔が……

【今でも頭から離れない……】

地上に無事に帰ってきた私は久しぶりに手に入れた魔石と毛皮のドロップアイテムを換金するために、冒険者組合で清算を待っていた。

いや／＼久しぶりに「畏れよ、我を」で逃げ出さないモンスターがいたから「命ず、輩を喰らえ」で同士討ちにしてやったぜ。

魔石にドロップ品美味しいです。

もつとも、ゲームと違い、かなりグロテスクなのは未だに馴れず、同士討ちの様子をひきつった笑顔で見つめていたが、あれじゃダメだ。目の前の光景に目を奪われ、周りをまったく警戒出来ていなかった。あんな棒立ち状態を晒しては後ろから奇襲してくださいと言っているものだ。

あんな無様な姿を晒さない様に自身のグロ耐性を鍛えよう。

しかし、グロ耐性ってどうやって鍛えたらいいんだろう？

また鶏をやるか。

うん、良いかもしれない、メタメタに切り裂くように調理すればグロ耐性を強化出来るし、お肉も手に入る、一石二鳥だな

でも、女神様に見つからないようにしないと、そんな様子を見られたら食べ物で遊ぶなど怒るかもしれない。

あと、私の冒険に協力してくれる人はゼロだったので掲示板に張ってた募集用紙を破いて捨てた。

だが、なぜ私が紙を破ったくらいでみんなびくってなるんだよ。

別に募集が来なかったのでイライラしているわけじゃないよ。

破いて丸めた紙をゴミ箱にシュート！ 超エキサイティング!!

あ、清算終わりました？ 三万ヴァリス。え、いいんですかこんな大金いただいて。

やったぜ、今晩は久しぶりにジャガ丸君以外が食卓に並ぶぜ。

あ、女神様が迎えに来てくれている。みてみて女神様、今日はいっぱい稼げたよ、だから私を褒めてもいいんだよ。

・・・なんでそんな悲しそうな顔をするんですか、私なんか悪い事しました？

第四話 誤解だと否定しても誤解が解けるのは稀である

いきなりですまない、私は今危機的状況に陥っている。

「いい加減本当の事を言いやがれ、このイカれ女!!」

「ベート！　口が過ぎるぞー！」

「黙れフィン！　このイカれ女は最近ずつと俺たちのファミリアを監視してたんだぞ！　何か企んでいるに違いねえ！」

「しかしー！」

お分かりいただけただけでしょうか。私はただ、そろそろ主人公が来る時期だなくって思っただけで軽い感じでベル君が来る事が確実なロキ・ファミリアで出待ちしてただけなんです。

流石に一目で遭遇、という訳にはいかず、一週間ほどじくつと門番のいる出入口を見つめていただけであり、ロキ・ファミリアの皆さんには全く迷惑をかけていません。

なのにそのファミリアの幹部に絡まれるなんて訳が分からないよ。やめて、誤解なの、私の目的は此処に来るであらうベル君であって、貴方じゃないんです。私は貴方にはほんの少しも興味がないんです。

「この俺が眼中にないだど！　言ってくれるじゃねえか、レベル1のクソ女が!!」

うわーメンドクサク。ホントの事を言ったらベートさんガチギレだよ。

ベートさんに胸倉掴まれて宙ぶらりん状態にされちゃってるこの状況はある意味凄いな。

この人、基本格下は見下すか罵詈雑言で中傷するくらいで手を出したりはしないと思っただけ、私今ガッツリ絡まれてる。

というか、結構首がしまって苦しい。何気に本気で締め上げてるな。そのせいで意識が飛びそうになる・・・　ここまでテンプレに

誤解されるなんて、一周まわって可笑しくて笑いそうになる、ふふふうふ。

ここは耐えろ、ちよつとでも笑い声が漏れてしまおうと比喻表現なしに殺されてしまうかもしれない（迫真）。

「こんな状況でニヤついてんじゃねえ!!」

誤解だくく!! 死ぬほど苦しいんで身体と精神が勝手に自己防衛してるだけなんです。ベートさんを馬鹿にしてるつもりはございません。

「どうしても口を割らねえつもりか、なら!!」

うう、その振り上げた右手をどうするんですか、もしかして、処す、処しちゃうの？

「なにやつとんのや、ベート。その手離しや」

ぐうう、意識が薄れそうな私の耳にエセ関西弁が聞こえてきた。あれ、ココドコダツケ。

「チツ！」

ぐえ、乱暴に放り捨てられたけど、助かった。誰だか知らないけど、ありがとうございます。

「ええよ、ええよ。自分、ヘスティアのどこの眷属やろ。どうしてこうなったかの事情も知りたいし、ちよつと中に来てもらえんかな？ベートもフィンもそれでええな」

「チツ！」

「僕もかまわないよ。あ、そのキミ。彼女のためにポーシオンを一つ用意してくれ」

「は、はい」

「すまない、待たせたね。では、行こうか」

はあく、私を置いて話がポンポン進んでいるけど、私、一言も行くつて言つてないよ。

ああ、私を置いてみんなファミリアに入つて行っちゃった。これつて私もついて行かないといけない流れ？

門番さんも凄く引きつった顔で私を見てるし。

はあくこうなつては仕方がない。少し怖いがお邪魔させてもらお

うかな。他の神様のファミリアにお邪魔するのは初めてだから少しワクワクするな、女神へステイア様、お昼ご飯の時間には帰れそうにありません。机の上に捌いた鶏肉があるので先に食べててください、と、心の中で謝罪したので大丈夫だろう。

すいませーん、此処のギルドに入りたいんですけど？ あ、今忙しいんだよ。お前のようなチビはお呼びじゃないんだよさつさと荷物まとめて帰りな。そんな、ひどい。

アイズ・ヴァレンシユタインは先ほど主神ロキが連れてきた少女を訝しげに観察する。

何でも、ロキ・ファミリアに対してのスパイ容疑で事情を訊いてい

たのだという。

尋問した結果は白。ベートは納得していなかったらしいが、主神口キが嘘は言っていないと断言していたのでそうなのだろう。

そんな彼女に疑ったお詫びと謝罪を兼ねてお茶とお菓子を振る舞うらしい、そして私がお茶の間の話し相手を頼まれたのだが、正直言って話が全く続かない。

天気がいいね。と言ったら、うん。と答えられ終了

お菓子美味しい？と聞くと、うん。と答えられ終了

身体は大丈夫？と聞くと、大丈夫。と答えられ終了

一体ロキは私に何を期待してこの子の話し相手に選んだのだろう。幸いなことに彼女もおしゃべりな方ではないらしくただ黙ってお茶とお菓子を食べていた。

しかし、頼まれたからには何かしら話を振ったほうがいと頭の中で考えるが何の妙案も浮かばない。

「・・・(づ)ちそうさまでした」

考え事をしている間に彼女は食べ終わったらしい。

「じゃあ、私、帰る、ね」

そう言うのと彼女は立ち上がった。

「わかった、玄関まで送る」

そう淡々と答え、彼女を連れて玄関まで歩いて行くが、その道中も終始無言であり、会話らしい会話はなかった。

「・・・さようなら」

何事もなかったように彼女は自然体で帰って行く。アイズは疑問に思う、なぜ彼女はあそこまで自然体だったのだろうか。

レベル5のベートの殺気を受け、危うく殺されかけたのに何の感情の変化も起こさない。

事情を訊くためとはいえ、他のファミリアの幹部に囲まれてもただ、「違う」と冷静に答えたそうだ。

そして、自分とのお茶会の時も何の疑いもなくお茶とお菓子を食べていた。

彼女は本当に半年前に冒険者になったばかりなのだろうか？ 本

当にレベル1なのだろうか。

「もし、また話をする機会があるなら、今度はちゃんと話してみよう」
誰に言う訳でもなくアイズはそう呟き、彼女が帰った事を主神に伝えに行くのであった。

はあり、やっと終わったし、帰れる。

くそ、何が少し事情を訊きたいだ。ロキ・ファミリアの幹部で囲んで訊くなんて聞いてないぞ。

しかも、話してる最中もベートさんはこっちを睨みっぱなしだったし、ロキ様が私は嘘を言っていないと言ってるのに、物凄く疑いやがって、ふざけるな！ 嘘ついたら全員でボコるって雰囲気出しとつてそれはないだろ。

まあ、終始ガン無視してやったがな（笑）あの悔しそうな顔っていつたらなかったな。

しかし、あの紅茶とお茶菓子美味かったなあ。絶対あれ高いやつ

だ、私たちじやとても買えない高級品なのがわかる。

うちのはセール品で98ヴァリスの安物だし（涙）

本当はお代わりしたかったんだけど、アイズさんが物凄くこつちを睨んでくるんだよなあ。

あれはきつと「早く帰れ。私はダンジョンに潜りたいんだ」て意志表示だったんだな、彼女ダンジョン大好きっ子だったと思うし。

会話だっておざなりだったし、帰るって言ったら引きとめもせず玄関まで送るってよ。

はあ、ここ最近、ため息ばかりつくな、もう、癖になってしまってるのかな。

しかし、明日からどうしよう。何もしなくても、たぶんヘステイア様が拾ってくると思うけど、私ともう眷属にいるから、そこまで必死ではないかもしれないからなあ。

ああ、私という不安材料もあるし、やっぱり明日からも張り込みしよう、最悪、またお茶しに来たっていつて上がらせてもらおうかな。

ンなこと言ったら今度こそ殺されるな・・・
はあくお家まで遠いなあ。

唯一の家族であった祖父が逝去してから一人になったベルは、冒険者になるべくオラリオを訪れた。

大好きな祖父の話に憧れ、「英雄」となり「ハーレム」を手に入れる事を夢見ていた。

町に着いた当初は「ここから僕の冒険が始まるんだ！」と期待に胸を膨らませていた。

しかしその期待はすぐに失くしてしまうことになった。

見た目小柄で貧弱な体型であり、専門的な知識などまるで無いベルはどこのファミリアでも門前払いであった。

特に最大手のロキ・ファミリアに至っては取り付く島もなかった。

冒険者になるにはまず「ファミリア」に入団しその主神から「恩恵」を授かることが必須条件である。

しかし、ベルはそのスタートラインにすら立てないという現実には、少年の心は無残にもへし折られかけていた。

でも、そんな彼にも救いの手が差し伸べられるのであった。

ベルに手を差し伸べてくれたのは女神ヘステイアと名乗る少女であった。無論、見た目通りの年齢ではないのは分かっているがそこは黙っておく。

ベルにとつては彼女はまさに救いの女神であった、ベルはヘステイアの誘いにホイホイついて行き廃教会の前に着いた。

「さあ、着いたよ。ここが僕のファミリアのホームだ」

「えっと、神様。そのボロボロの教会がですか・・・」

「む、これでもカメ子君が毎日掃除してくれてるんだぞ。見てみる、あの花壇、綺麗な花が咲いているだろう。あれもカメ子君が作ってくれたんだぞ」

確かに神様の指をさす方向には花が咲いている。だが、農村出身のベルはその花が食用であることがわかってしまった。

「えくと、そのカメ子さんって人が道すがら話してくれた先輩ですか？」

「うん、そうだよ。半年前に入った子で・・・すごく頑張り屋で優しい子さ・・・」

なぜか悲しそうな顔をする神様に対しベルは何か気に障る事を言ってしまったと思い、何かフォローするべきか、謝るべきか、おろおろしている。

「いや、暗くなっている場合じゃない。彼女はちよつと悲しい過去があつてね、今は少し口数は少ないけど、とても良い子で可愛いだだの女の子さ」

神様の悲しい過去という言葉に少し思いをはせ……る前に「可愛い女の子」という言葉に心躍るベル君であつた。

「もちろん料理も得意さ」という言葉でさらにたぎつたのは言うまでもない。

第五話 私の苦労は何だったんだろう。え、これからも苦労するの

はあく。私のせいでベル君がヘステイア・ファミリアに入れなかったらどうしようと思ひ、あちらこちら走り回ってたのに・・・

「今日は帰って来るのが遅かったね。ちようどいい、紹介しようベル・クラネル君だ。キミに続いて二人目の僕の眷属、つまりはキミの新たな家族になる子だよ」

あ、はい。女神様だったら、私の苦労も知らずにベル君を捕まえてきたんですね。運命ってハンパないわ

「え、えつと、ベル・クラネルです。その、よろしくお願いします」

あ、うん。知ってる。しかし小柄だと知っていたけど私よりは背が高いな。なんか悔しいからちよつと背伸びしたのは内緒だぞ。

「ちよつとカメ子君。いきなりで驚いたのかもしれないけど、ベル君が挨拶したんだからキミも挨拶するべきだろ」

あ、そうだった。こつちはベル君の事を一方的に知っているから初対面な感じがしなかったけど、現実世界で顔を合わせるのは初めてだったね。

初めまして、カメ子（仮名）です。おつと、私はただの無口系美少女ではないぞ、コミュニケーション能力はしっかりあるのだ。はい握手。

「あ、あの。そ、その腕の鎖は？」

あ、これ、カースメーカーの必需品、拘束具だよ。あ、手、足、だけじゃなく全身見てる。実は女神様が泣くから、ほぼファツションで付けてるだけだから昔みたいに身体に痣はついてないんだよ。

はい、握手、握手。ちよつと、そんなに引きつった顔をしなくてもいいじゃないか。私は怖くないよ、優しい先輩だよ、はい、ニコつと笑顔で対応、お、照れてやがるなこの純情少年、ま、カースメーカー♀の容姿は可愛いから仕方ないよね。

さ、帰ってきたからちやんとローブを脱いで指定の場所にハンガーで掛けましようつと、私は片づけられる女なのだ。

「えっ？ええええええ!! 見てない。ぼ、僕は何も見えていません!!」

ん、ベル君、何言ってるの？ 確かにローブの下は拘束具だけで露出は激しいかも知れないけど大事なところは一切見えてないんだよ。

「ちよつと、カメ子君！ キミは女の子なんだからもう少し恥じらいを持たないか。ほら、キミ専用の室内着を買ってきているから向うで着替えてきなさい」

ええ！ 女神様、そんなお金どこから捻出したの？ うちにはそんな余裕はありませんよ。

あと、恥じらいつて。確かにローブの下は肌の露出が多いかも知れませんがちゃんと全年齢審査通った格好ですから、決してエロくはないはずです。

「そんなわけあるか！ 今にもポロリがありそうじゃないか」

失敬な、私はそんな軽い女じゃないぞ。なんせ前世で童貞を拗らせて今世では処女を拗らせているハイブリッド仕様だぞ。もう鉄壁すぎて、今世も良縁は難しいっぽいけど・・・私は頑張って生きているんだ。

まあ、今まで女所帯で生活だったからな、面倒だがそこんところはしっかりしますか。

ちよつとベル君、今から着替えてくるから覗くなよ。もし、ラツキースケベつたら・・・【おそれよく、われをく】からの【めいず、みずからめつせよく】で切腹させてやるからな。

「のぞっ！のののの覗きなんてしませんよ！」

おい、動揺しすぎだろ。そこまで挙動不審だと逆にこっちが怖いわ。ま、私は照れ隠しで拳が出る系ヒロインではないから、よっぽどワザとじゃない限りは笑って許してやるからな。

だけど他所の子にはやるなよ、覗きは犯罪だからね。

神様の案内で廃教会に入ったベルは驚いた。外観は教会なのに、その内装はまるで違っていた。

まず教会にあるはずの沢山の長椅子がない。代わりに教会の中心には大きなテーブルが鎮座していた。

神様曰く、カメ子さんが椅子があっても邪魔と言い、すべて薪にして空いたスペースにテーブルと椅子のセットを置いたらしい。

確かに、隅っこの方に薪が大量に積まれていた。その近くには炊事場らしき施設もあり、よく整理されていた。

神様曰く、カメ子さんがほとんど毎日料理を作っており、神様がアルバイトに出かける際はお弁当も用意してくれるそうだ。

「でも、お肉を捌くのは苦手みたいなんだよねえ」と、神様はつけたした。確かに、炊事場にある鶏は辛うじて原型が留められているくらいグチャグチャである。しかし、血抜き等はしっかりと出来ており、肉の臭みはほとんどなかった。

炊事場の反対側にカーテンで仕切りがされている一角があり、何の仕切りか聞くとカメ子さんが冒険に必要な道具を置いている場所だという。

冒険に必要な道具と聞いて凄く興味を引かれ中を覗かせてもらったが、大きめのリュックサックにツルハシ、鎌、スコップ、クワ、ジョウロ、ハンマーなどなど。冒険道具と言うより農作業道具にしか見えなかった。

ちよつとガツカリしたのは神様には内緒にしよう。

一通り教会の内部を見て回ると、次に隠し部屋に案内された。

「よし、一通り見てもらったけど、どうだい、思ったよりしつかりしているだろう」

「はいー」

「うんうん、元気があつて良いね。じゃ、さつそく僕の眷属になるための【恩恵】を与えよう」

「はい、よろしくお願いします」

ついに来た、とベルは歓喜に打ち震える。ついに自分の冒険が始まるのだ。そして夢である【英雄】となり、「ハーレム」を手に入れる事を心に誓う。

「じゃ、そのベッドに服を脱いで横になつて・・・」

神様の言葉を遮るようにコツン、コツンとこちらに足音が近づいてくる、一体だれだと思ふが、神様が警戒してないから、多分カメ子つて人だと思つた。

その予想は当たり、薄紫色の髪を両側で三つ編みにした碧眼の少女が現れた。

神様が可愛いと言つていた通り本当に可愛かつた、色白で儂げな姿がぐつと来た。

「今日は帰つて来るのが遅かつたね。ちようどいい、紹介しようベル・クラネル君だ。キミに続いて二人目の僕の眷属、つまりはキミの新たな家族になる子だよ」

「え、えつと、ベル・クラネルです。その、よろしくお願いします」

神様に急に話を振られたのと彼女の容姿に少し見とれていたせいで多少言い淀んだがきちんと挨拶できたとおもう。

しかし、彼女はこちらを見たまま固まっているように見えたがすぐに神様が声をかける。

「ちよつとカメ子君。いきなりで驚いたのかもしれないけど、ベル君が挨拶したんだからキミも挨拶するべきだよ」

「初めまして、カメ子、です」

可愛らしい声だが、少し無機質な喋り方だった。口数が少ないと事

前に聞いていなかったら嫌われているんじゃないかと思うくらい簡素な挨拶だった。

だが向こうからハンドシェイクを求めてきたのでこちらも手を出そうとした・・・しかし——

「あ、あの。そ、その腕の鎖は？」

差し出された彼女の腕には、鉄で出来た手枷と鎖が垂れ下がっていた、よく見ると腕だけではない、差し出された腕とは逆の腕にも、両足首にも同様のモノが付けられている。

その異常さに身体が硬直していたら彼女の方からベルの手を握ってきた。

冒険者とは思えないほど手は柔らかく、そして小さかった。

「よろしく、ね」

そう言っただけ彼女は微笑む、さっきまでの無表情とは違いとても異性としての魅力があふれるものだった。

そう、自覚すると顔が急に熱くなる。

挨拶もそこそこに彼女は壁に掛けてあるハンガーを取りローブを脱ぎ始める。

先輩冒険者がどの様な装備を身に付けているか気になったベルは彼女に注視した・・・しかしローブの下がきわどいなんて聞いていない。

「えっ？ええええええ!! 見てない。ぼ、僕は何も見っていません!!」

急いで目を背け、全力で見ないように気を使っていると神様から着替えを貰ったカメ子さんがこっちに来た。

「私、着替える、覗き、ダメ」

「のぞっ!、のののの覗きなんてしませんよ!」

「そ。でも覗いたら・・・呪う」

あの目はマジだ。

その後無事【恩恵】を与えられ、カメ子さんが「明日から、ダンジョン行くから」と言ってくれた。

そうだ、僕の冒険はまだ始まったばかりである。

第六話 ダンジョンで出合いを・・・いや、何でもないです。

ふわああ。皆さま、おはようございます。私ことカメ子です。昨日ついにヘステイア・ファミリアに期待の新人が加入いたしました。その名も「ベル・クラネル」君です。

ワーパチパチパチ・・・と、一人で脳内拍手喝采しても寂しいだけです。さっさと起きて着替えますか。女神様が買ってきた服は無駄にフリフリな装飾がされてるから、汚さない様に気を使うんだよね。

さて、サクツと身支度を終えましたし、女神様とベル君が起きてこない内に朝ごはんの用意でもしますか。

ふん、ふん、ふん。と鼻歌を歌いながら台所に備えてる保存瓶の蓋をオープン。食料品が私をお出迎・・・え？

空っぽ？ なぜ？ 3日分くらいは買いだめしてたはずなのに・・・あ、そうか。ベル君来たから食料の消費が増えたんだ、それに昨日は歓迎会もしたから鶏肉もジャガ丸君の残りも全部使ったんだった。しょうがない、虎の子の花壇の花を食べましょうか。

「ふあああ。おはよくカメ子君・・・」

寝惚け眼で女神様が現れた。今日は何時もあり遅かったですね。まあ、昨夜はお楽しみだったし、しょうがないんですね。

おはようございます女神様。もうすぐ朝ごはんの用意が出来ますからベル君を起こしてきてください。

「ん、ベル君。そういうえば彼はどこで寝ているんだい？」

彼ならあそこのほぼ何も入ってない倉庫に寝具を持ち込んで寝ていると思いますよ。

「そっか。彼には少し悪い事をしたかな。僕は別にみんな一緒に寝ても良いと思うんだがなあ」

さすがに恥ずかしいからダメです。それにあの倉庫はいつも綺麗にしていますし、考えようによつてはベル君はヘステイア・ファミリアの入団初日から個室を与えられたんですよ。

「うーん、皆で寝られないのは残念だけど、そういう考えもありだね。そういうえば、今日の朝ごはんは何だい」

今日はお花の花びらサラダに、茎のスープに、根つこの素焼きです。

「わくお。久しぶりに出たね、その非常食セット・・・」

ダンジョンから帰って来る時に食料は買っておきますから今日はそれで我慢してください。さあて、腕によりをかけますか。

味付けは塩味オンリーだけど、素材の味を活かす系だと思って下さい。

トントン、ジュージュー、ザックザック。おはようベル君、外に水場があるから顔を洗っておいでよ、すぐ朝ごはんできるからね。

ん、エプロン姿の女性がそんなに珍しいのかな。別にじつと見つめられても照れんが、何でベル君の方が顔を赤くするのさ？

さっさと顔を洗いに行く。

うん、いい返事だ。女神様もニヤニヤしないで席に座ってください。

ベル君が行ったのを確認、さて、お皿に料理を盛りつけますか。ダ

ンジョン初日のご飯がこんなに貧相なのもいい思い出になるぞ。

・・・なるよね——

ついに念願のアイスソード・・・ではなく、ついに念願の前衛職のベル君が仲間に加わり後衛職の私が前線に立つ機会がなくなってしまう。

いや〜残念だなく。私の華麗な回避テクを披露する事がなくなつて、本当に残念だなく

「うわあああ！ カメ子さん助けて〜！」

言ってるそばからこれだよ、ベル君ちよつと主人公度が高すぎひん。ここまでモンスターからヘイト集める人殆どいないよ、お〜い、一体なにやらかしたの〜

「ちよつと、トイレしてたら急に壁から現れて・・・って、うわあああ！」
私に隠れてやりたいことって・・・と言うか、トイレの時ほど無防備になるから、仲間が周辺を警戒する必要があるんだよ。

何恥ずかしがってんだ、ちゃんと私の目の届くところでやりなさい。

「女の子の前でなんて無理だ〜!!」

まあ、分からんでもないが、後でボウケンシャー式トイレ術を伝授せねば、それさえ覚えればトイレの頻度はガクツと下がるし、なぜか【耐久】もupするから覚えて損はないはずだ。

て、私に向かつて走って来るんじゃない、前衛らしく私の肉かB E・・・コホン、盾になれよ。

なにゴブリンの団体さんをお招きしてるんだよ。貴方それでもボウケンシャーですか？

ほら、受付のお姉さんが冒険者心得を熱心に教えてくれたでしょう。思い出して、そういう場合は身を隠すんだよ。

「もう見つかってるんですから意味がありませんよ！」

それもそうか。しかし、初めてのダンジョンなのになかなか動きが良いな、4〜5体に追いかけられながらも囲まれることもなく無傷か。

さすが原作でソロでダンジョン攻略してた男だ。

さて、一応ベル君がモンスターを引き付けていることだし、私もやるべき事をしますか。

・・・よし、いい感じにモンスターが一塊になったな。

では、パーティー戦初めての・・・【畏れよ、我を】

やつとダンジョンに挑める・・・朝食後にカメ子さんに連れられてファミリアを出発し、組合で冒険者登録をしてもらい、自分のダンジョンにおける担当アドバイザーの『エイナ・チュール』さんにカメ子さんと共に挨拶をした

・・・そこまでは順調だった。

「ダンジョンの基本知識を教えましょうか」とエイナさんに笑顔で提案され、カメ子さんも「時間ある、受けるべき」と賛同し、本当はすぐにでもダンジョンに向かいたかった。しかし知識は大事だと思い直し、ダンジョンへの未練を引きずりながら教えを乞うことにした。

・・・勉強会はハッキリ言って良かった。だが、スパルタ式とは聞いていなかった、ダンジョンに潜る前からかなり疲弊してしまった。

後でカメ子さんから聞いた話では今日は経験者のカメ子さんがいたから優しくて短かったらしい。

これより厳しい勉強会を数日続け、さらにはエイナさんの課題をクリアしているカメ子さんはきつと凄い人なんだなあと思いました、まるで

帰り際にエイナさんが「カメ子ちゃんの事、怖がらないであげてね、彼女ホントに優しい子だから」と言ったがよく分からなかった。

確かにカメ子さんは無表情で無口だけど、決して悪い人には思えない・・・そう、その時までには思っていた。

ダンジョンでちよつとした油断からゴブリンに追い回され、全力でカメ子さんのところまで逃げてきたら

「これからは私の見てるところでヤレ」と言われてしまった。これに関しては全力で拒否したらため息を吐かれてしまった。

カメ子との会話で気が緩んだのか、さつきまで後ろにいたゴブリンに囲まれてしまっていた。初ダンジョンでの絶体絶命のピンチに陥ってしまったその時、彼女の無機質な声が耳に響いた。「畏れよ、我を」という声を――

その瞬間、自分を囲んでいたゴブリン達から殺気が消え、みるみる内にその顔に恐怖が現れ、何匹かはこちらに目もくれず一目散に逃げだしていった。

何が何だか分からずにいると「いま！」とカメ子さんの声が聞こえてきた。何が？と一瞬思ったが、目の前には逃げずに立往生しているゴブリンがいた。

その姿を見て理解した。今なら倒せると、手に持ったナイフをゴブリンの額に勢いよく振り下ろした。

恐怖により身動きが取れない状態だったので行動を阻害されることなくナイフはゴブリンの眉間に突き刺さり、すぐに灰のようにボロボロと崩れ去り、小さな宝石のようなモノが地面に落ちる。

「おめでとう・・・」

彼女の簡潔な言葉に、ベルは初めてモンスターを討伐したことを実感した。

「やった〜！やりましたよ神様。エイナさ〜ん!!」

初めてのモンスターの討伐に興奮し叫んでいると、後ろから誰かが服を引っ張られた。

「・・・私は？」

ジトーとした目でカメ子さんに睨まれ慌てて先ほどの発言を訂正する。

「あ、すいませんでした。カメ子さんもありがとうございます！」

そう言っ頭を下げると彼女は満足したのか「ん」と短く返事を返し落ちている魔石を拾い上げこちらに投げてきた。

「うわっ！ あ、ありがとうございます」

「ん、それ、ベル君の」

「え？」

「これでアナタもボウケンシャーの仲間」

「は、はい！」

「前は任せる、私は後ろから支援する」

「はい！」

先輩冒険者の彼女から認められたと感じたベルは受け取った魔石を握りしめながら言い表せない歓喜に震えていた。

自分については【英雄】へのスタートラインに立ち、一步前進したのだと。

しかし、ふと、疑問に思うことがある、先ほどモンスターが急に怯え始めたことだ、原因はおそらく彼女だと思うので聞いてみることにした。

「あの、さっきのつて【魔法】ですか？」

「そう、敵を怖がらせる【呪い】を私は使える」

呪い？ 魔法とは違うのだろうかと思考していると彼女が話を続ける。

「敵とは、モンスターだけを指すのではない・・・人間も対象になる」

「人間にも・・・」

「そう、ベル君・・・私が・・・怖い？」

「いいえ！むしろ凄いですよ！僕と同じレベルなのにもう魔法が使えるなんて、ほんと、凄いですよ」

そう褒めちぎると彼女の顔が若干朱色に染まったような気がしたがすぐにフードを目深くかぶり直し「出発する」と短く言って彼女は歩きだした。

置いて行かれないように慌てて後に続いて歩き始め、そこでダンジョンでエイナさんから言われたことを思い出した。

「怖がらないで、か・・・」

まだ少しの間しか彼女に関わっていないがこれだけは断言できる。彼女は怖くない、むしろ、優しい女の子で頼りになる先輩冒険者であると。

第七話 クリーニング代を請求します。なんて言える空気ではありません。

ベル君加入から半月が経ちました。最初のころは私の魔法で怯えて発狂したモンスターにビビってたベル君でしたが。

「ふう、今日はあまり逃がさず倒せましたね。」

今ではすっかり怯えたモンスターの処理に慣れ、ほぼ逃がすことなく殲滅してくれています。

いや、それでいいのか主人公。やっていることは【英雄】ってより【暗殺者】とか【始末屋】っぽいぞ。

おい、なに普通に魔石を拾ってるんだ。少しは違和感を持てよ。お前が目指しているモノとは180度違う道を走ってんだぞ。

ちよつと、これ、やばいよ、やばいよ。これってもしかしくなくても私のせいだよ。どうにかして、軌道修正しないと彼の人生が壊れちゃう(滝汗)

ついでに原作の流れもおじやんになっちゃう、そのせいで助かる人が助からなくなつて悲惨なことになっちゃう。

「ん？ カメ子さん、考え事ですか？ダンジョンの中でぼくつとしてちや危ないですよ」

んなことわかってるよ。ああ、うまいこと軌道修正できるいいアイディアないかなあ。いつそのことももの凄いピンチに陥つて、ベル君超絶覚醒つて美味しい話、ないかなあ。

ん？、なんかそんな感じのイベントが序盤にあつたような……なかつたような……あつたとしても私のせいでもう潰れてしまつてる可能性も無きにあらずかも……

「うわあああああ!!」

うっさい！ 私は世界の事を考えているんだ。そんな驚愕と恐怖の混じつた悲鳴を上げたつて私は構つてあげない……う

わああああ!!いきなり手を掴むな! 引つ張るな!! 走るな!
ころんじやうだろ!

何時もより必死になって私の手を引きながら逃げるなんて、何が
あったの!?! 状況を説明して!?

ブモオオオオツ!!

って!ミノタウロス!? ミノタウロスなんで!? ここ地下5階層
だよ、階層間違ってる?アナタはもっと下層で出現するモンスター
でしょう? 何でここに居るの!?

ん、でもコイツ、もう恐慌状態になってんじゃない。これは美味し
い相手だ。最初から状態異常になってるなんて私に潰してほしいつ
言ってるものじゃないか。

ちよつとベル君ストップ。私、コイツ、潰す。おくけく?

「ウワアアアアツ!! だ、だれかつ!!」

あ、駄目だ、こつちも恐慌状態で話せる状態じゃないです。コンタ
クト不可状態ですわ。

もう、ベル君こんな偶発的遭遇戦ぐらいで取り乱すなんて情けな
い。格上のF O Eと不意に遭遇する事はボウケンシャーでは当たり
前なんだ。だから冷静に行動する事がだいじなんだ。慌てず相手の
行動パターンを把握し、戦力差を分析し、回避経路を頭に描きながら
行動:って行き止まりかよ!!

もう!私の話を聞いてなかったの? 逃げ道を確認するのもボウ
ケンシャーの必須項目なんだぞ。

まあ、今回は私が対処可能だったから良かったもの次からは気を付
けるように。

では……【命ず、自ら滅せ……】っキヤ、私に抱き着くな! 腰に手
を回すな! 胸に顔を埋めるな!紙耐久の私に力いっばいくっ付く
な!

……と言うか:苦しい。ちよつとベル君、今身体からメキって音がし
ただけどアナタ怖がりすぎじゃないですか?

それによく見てみなさい、あのミノタウロス、私たちなんか眼中に
ないって感じだから横に避けたら意外と大丈夫かもよ。

あ、さらに力を込められて、もはや抱き着くと言うレベルではなく、サバ折りに近いかもしれないなあ。

このままではミノタウロスに殺されるより先にベル君にしめ殺されるのが先かもしれない。

女神様、先立つ不孝をお許してください。キッチンに鶏を捌いて置いていますので晩御飯にどうぞ……

・
・
・

ブモオオオオツ!!

……ブエツ!! クサ! 生臭! なにこれ血? ベル君にしがみ付かれて一瞬気を失っていたら、いきなり生絞り生血をぶっかけられた!

ペツ、ペツ。口に入っちゃった、生臭くて気持ち悪い。……誰だ、この私に血のシャワーをプレゼントしてくれた奴は、これは訴訟も辞さない。

「…あの、大丈夫ですか?」

ん、どこかで聞いたことのある声だな? ベル君この声はだれだったけ?

「うわああああ」

…ワウオ、私を置き去りにして走っていつちやったよ、一体どうしたんだ、今日のキミはちよっと情緒不安定すぎひん。

「…カメ子…さん?」

ん、私を知ってるのか、どこのどなたさんです? って、お前は!

「…あの、大丈夫ですか？」

「うわああああ」

遠征帰りに上層へと逃がしてしまつたミノタウロスを倒したアイズ・ヴァレンシユタインは被害者と思しき少年に声を掛けたが…逃げられてしまつた。

急に奇声を上げながら走り去つた少年？に多少驚いたがこれ以上層に逃げて行つたモンスターの討伐は終わり。ふう、とため息が漏れたところで、まだだれか残っている事に気が付いた。

残っていた人も、先ほどの少年と同じく血まみれになっていたが、さほど動揺している様には見えなかつた。

と、どうか。その人物には見覚えがあつた。

「…カメ子…さん？」

「ん…」

「あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫、問題ない」

その言葉通り、見た感じ彼女は負傷しているようには見えなかつた。しかし、彼女はレベル1だつたはずだ、格上のモンスターであるミノタウロスに襲われていたのに、なぜ彼女はそんなに平静を保つていられるのだろうか。

ちやうどいい機会だ、ロキ・ファミリアで別れてからもう一度話したいと思つていたところである。もう少ししたら仲間が追いついてくるはずなので、安全を確保出来たら話をしてみよう。そう考えていると後ろからモンスターの気配が近づいてくる。

「追い込んだ！ アイズそいつで最後だ！」

聞こえてきた団長の言葉通り半狂乱のミノタウロスが視界に入った、この距離ならばそばにいる彼女に近づく前に倒すことが可能だろう。

「…下がっていて」

そう彼女に促すが、彼女はどこ吹く風とばかりにアイズの言葉に従わず、

「私が、やる」

アイズはレベル1には無茶だ、と思う反面、いろいろと噂の絶えな
い彼女の実力が見れるかもしれない、という期待も抱いていた。

もしかすると、彼女の戦いの方が自分のレベルupに活かせるかもしれないという気持ちもあり彼女の行動を黙認した。

そして彼女は呟く……【命ず、自ら滅せよ】と……

そして、とても恐ろしいことが起こった。

半狂乱のミノタウロスが急に動きを止め、その両腕を自らの腹に突き刺した。

ぐちゃぐちゃとナニかをかき回す音がダンジョンに木霊する。

自らの腹の中を掻きまわしているミノタウロスは痛みを感じていない。いや、それどころか口角を釣り上げ笑っているように見える。

腹から臓物を掻きだした…奴は笑っている。

出血量がさらに増え足元の血だまりがさらに広がる…奴は嗤っている。

ついには身体から魔石を抉りだす…灰になる瞬間まで…ヤツハワ
ラツテイタ。

いつの間にか合流していたロキ・ファミリアの仲間たちは呆然とそ
の光景を眺めているだけだった。

「ふいふい」

誰もが絶句する中、その笑い声はアイズの後ろから聞こえてくる。

嗤っていたのは彼女だった、今までの無表情ではなく酷く歪んだ笑
顔で佇んでいた。

彼女が歩き出し、ミノタウロスの魔石とドロップ品を拾い上げる。

「私が…倒した…だからもらう」

そう言い残し、彼女は立ち去って行く、誰も彼女を止めようとしなかった、しかし…

「おい！ 待てよイカレ女！」

ベートの怒声に彼女は歩みを止め振り返る。

「お前はなんの目的でダンジョンに潜ってんだよ！」

ベートの言葉に足を止め此方に振り向いた彼女は一瞬何かを考える素振りを見せたが、すぐに答えた。

「愉しむため」

そう答え、笑顔を見せる。しかし、その顔は先ほどのように歪んではいなく、普通の笑顔だった。

一体、どちらの笑顔が本当の彼女だろう…

話は終わりとばかりに去っていく彼女の背中を見送りながらアイズはまた話せなかったと少しガツカリした。

第八話 私って、もしかしてヤバい子ですか？

ふうく、さつぱりした。やっぱダンジョンから帰りのシャワーは最高ですね。なんせ今回は頭からミノタウロスの生血シャワーを浴びたからね、地上に帰るまで生臭いし血で服はベトベトだったし、おまけに地上に帰れば職員の人に悲鳴を上げられるし、他の冒険者も私の姿を見てドン引で散々だわ。私は大丈夫だよと笑顔で人畜無害ぶりをアピールしたから変な誤解はされてないと思う。

おかげで着替えの服を自費で買うはめになってしまった。くう、普通の服なんか着たら私のアイデンティティーが…私の個性が…失われてしまうのに…無念。

ま、それを差し引いてもお釣りがくる儲けがあつたから懐はそんなに痛まないけどね。

なんせミノタウロスの魔石とドロップアイテムだよ、アイテムがドロップしたのが見えた瞬間声に出して笑ってしまったよ。

そのせいでちようど周りにいたロキ・ファミリアの皆様にドン引きされてたがな。ちやうねん、私たちの様な弱小ファミリアはあれだけで数週間生活できる収入なの、ちよつと声に出して笑ったくらいでそんなに引かないですよ。

帰り際にまたベートさんに絡まれて、『なにが目的だ』って絡まれたからちよつとカッコつけて「愉しむため」って答えてしまった。

正直、厨二すぎる発言をしてしまって恥ずかしい。今後どういう顔してロキ・ファミリアの面々に会えばいいか分からない、会うたびに『よ、愉しんでるか』（笑）などと煽られると、私は…私は…恥ずかしくて死ぬかもしれない。

おっと、そういえばこの後担当職員のエイナさんから呼び出しを受けていたんだ、まあ、十中八九、ベル君の事だと思う。なんせダンジョンで別れたつきり一度も会ってないもん、先に帰ってるんなら待ってほしかったよ。

「ダメじゃないの！ 新人連れて五階層まで潜るなんて。貴女だってまだレベル1なんだから。いつも言ってるでしょ？ 冒険者は冒険しちやダメだつて」

はい…返す言葉もございません。私も前衛がいるからと調子にのってました。

「貴女は凄い幸運なんだよ？ まだレベル1の冒険者がミノタウロスに襲われて生きて帰れたんだから」

確かに、いくら私の魔法が強くても私自身は紙装甲な貧弱ボディ。一撃でも攻撃を食らったらアウトだろうなあ。

やっぱりダンジョンを攻略するためにもステータスの強化は必須だな。

とは言っても、我がボディは異界の神から与えられたモノとは言え、身体能力は冒険者としては平均的であり、一年近くダンジョンに潜ってもレベルは上がりず、ステータスも【魔力】の上昇値は高いがそれ以外は低ステータスである。しかし、最近ステータスの更新をしていない、もしかしたらレベルアップ条件を満たしているかもしれないから帰ったら女神様に更新をお願いしよう。

「ベル君も先に帰っちゃったし、貴女も今日は帰りなさい。」

はい、お世話になりました…って、エイナさん、血で汚れた『カーズメーカー』装備を抱えてどこに行くのですか？

「どこって？ 前から言っていますけど、いい加減にこの拘束具を身

に着けるのはやめなさい。」

えええええええええ!! 何言ってますの、その服は私の全てなんですよ! お願いですから返してください!

おお、縫りついて懇願したら返してくれたぞ。やっぱり誠意って大事だな…ちよつとみつともなかつたが仕方がない。こればかりは捨てるわけにはいかないからね。

おお、我がアイデンティティーお帰り、帰ったら綺麗に洗濯してあげるからね、手錠は錆びないようにしっかりと水気を取って錆び止めスプレーを掛けてあげるからね。

ん。エイナさん、そんな悲しそうな顔で私を見てどうしたんですか? 私何かしましたか? え、これを捨てる気はないのかつて? ありませんよ。この拘束具はとても大事なものです、替えのきかないものなんです。

分かってくれましたか?

あれ? 自分で言っというてなんですが…これってもしかしてなくて、私、危ない子みたいじゃない?

拘束具を後生大事にし決して捨てようともせず毎日着てダンジョンに向かう子、捨てられそうになったら必死なうって抵抗をする。

…ああ、これは『カースメーカー』を知らない人に誤解されますね。

ま、まずい! 誤解を…誤解を解かねば。

違うんですエイナさん、誤解なんです! これを捨てないのは悲しい過去に縛られているからではありません…そう、神様から貰ったものなので捨てるに捨てられないだけです!

え? な、なんでここでヘステイア様の名前が出てくるんです?

いや違います! 神様違います、ヘステイア様は悪くないです。拘束具は私を私にしてくれた神様がくれたもので…え? ヘステイア様に出会う前に神様がどうしたんですか? 改宗? いえ、したことはありませんよ。

…アカン、説明すればするほど誤解が生まれていく感じた。

こうなったら…:それでは、今日はこれで失礼します。また明日からサポートのほどよろしくお願いします。

そう言って逃げるように帰っていく私を誰が責められようか、
はあ、明日からダンジョンどうしようかな？

はあ、最近はめつきりため息をする回数が減ったと思っていたけど、やっぱり、今回の件でもうしばらくはため息を吐き続ける事になるだろうなあ。

「カメ子君を置いてきたって、何をやってんだいベル君！」

「ご、ごごごごごめんさい。ちよつとダンジョンで死にかけちゃつて。：て、いったたた。すみません神様」

はあ、帰ってくるなり、このありさまだよ。ここで回れ右してほとぼりが冷めるまでぶらぶらしたいけど、この様子じゃ私が帰らないともっと酷い事になりそうだね。

じゃ、ただいまあゝつと何事もなかったように扉を開けたら、女神様に組み付かれているベル君の姿が目に入った

「か、カメ子さん。無事だったんですね」

「まったく、帰ってくるのが遅かったじゃないか。ベル君がキミを置いてきたなんて言ったから心配してたんだよ」

すみません。ミノタウロスの換金してからちよつとお説教を受けてましたので遅くなっちゃいました

「ミ、ミノタウロスの換金ってどういう意味ですか？」

ん、何を言ってるのベル君。そのままの意味だよ、キミがアイズさんから逃げた行つたあとでもう一匹現れたから始末したただけだよ。ん、どうしたんだい、そんな驚いたような顔して。あの程度私にとつては造作もない事なんだよ（一撃でも貫えばアウトなのは敢えて黙っている）

だからベル君、これからも強敵は私に任せて、キミは私の後ろをおっかなびつくりついて来なさい、キミは何もしなくていいんだよ。

あ、いや、待って、壁役がいるからやつぱり前を歩いてもらいたいなあ。

って、聞いている？ そんな難しい顔して何考えてるの？ まあ、どくせアイズ・ヴァレンシュタインの事でしよう？

それなら私に聞くといいよ。なんせ私は彼女とお茶を飲んでお喋りしたことがあるからね（あれで？）

お、すんごく食いついてきたね。はははは、そんなに迫ってこなくてもステイタスを更新した後でゆっくり話して上げるよ。

と、言う訳で女神様ステイタスの更新をお願いします。

ベル君は何もしなくていい、ただ私の後ろをついてくればいい。そ

う彼女に言われたベルは悔しくて堪らなかった。

思い返せばこれまでのダンジョン攻略は彼女に頼りきりで自分からは何もしてこなかった。

ただ、彼女の後について回り、モンスターが現れれば彼女の呪詛により動けなくなったものから切り捨てていくだけだった。

情けない、何が【英雄】になるだ。こんなんじや…こんなんじや！到底【英雄】なんて無理じゃないか！ カメ子さんには悪いけどこれからは彼女には頼らず…『私はアイズとお茶する仲間なんだよ』え？ 本当ですかカメ子さん！ じゃ、じゃあ、彼女の趣味とか…好きな食べ物とか…特定の相手がいるのかとか全部知ってるんですか!?

え？ステイタス更新の後で？ 神様！ よろしく願います!! カメ子さん今日のお茶は僕が用意しますね。

更新結果はステイタスの若干の向上、しかし魔力はゼロのまま。スキルの項目も…神様が言うにはいつも通り空欄だそうだ。

第九話 私は誤解されるのには慣れてます。ええ、ホントに。

朝も早くから私は走っている。

理由？ ベル君がお弁当を忘れたままダンジョンに向かったから追いかけているんだよ。

まったくベル君たら、おつちよこちよいなんだからさあ。

まあ、一人でダンジョンに向かったことは、一先ずいい。昨日の話から察するに惚れた女の子に追いつくために強くなりたいたんだろう、それで私が一緒に行くと自分が強くなれないとでも思ったのだろう。

うん、物凄くお説教したいが、まずはいい所からほめよう。

さすがベル君。主人公だけあって見事な向上心だ。目的がちよつと俗物すぎるのが難点だけど、そこは評価できる。

しかし、お弁当(食料と水)を忘れていくのは許されざる事だ。黙っていくから女神様もカンカンでいらつしやる。

なんだ、ダンジョンを舐めてんのか！ エンジョイ勢なの？ ガチ勢の私に謝りなさい。

一人で行くは強くなる、とでも思っているのか。経験値が分配式ならソロプレイもしくは仲間を間引くことによって、経験値を集中出来るかもしれないけど。

それはゲームの話、今私たちが生きているのは現実の世界なんだ。私は転生者で部外者扱い立ち位置だけど、現実を見れないほど倒錯はしてないぞ。

ダンジョン攻略のカギはチームプレイなのだ、私と組むとモンスターがちよつと・・・あれっぽくなるけど立派なチームプレイだったではないか。

あれっぽくなったモンスターを背後から襲撃するキミは最高に輝いていたぞ。だから一人でダンジョンに挑むなんて止めるべきなんだ。キミは私と一緒にいないといけないのだ、そう、これからもずつ

と・・・ね。

しかし、私の足で追いつけるかな？ 走ることにより、手首や足首から延びる鎖がジャラジャラとうるさいせいで多少人目を引いてしまう。

私の姿を見た町の人がギョツとした表情だったけど……この際無視だ。

お、やっと、追いついた。おろろい！ ベル君、おべんと……美少女から貰ってますやん。

え？ ということ。ベル君ってこの時点で誰かとフラグ立ててたっけ？ えくと、あの子誰だっけ？ 書籍版の二次絵と現実の三次元とじゃ、若干見た目つというか、雰囲気というか。そんなものがちよつと違うから判別つきにくいなあ。

ああ！ そうだ！ 酒場「豊饒の女主人」の店員さんの シル・フロアヴァだ。え、もうフラグ立ってんの？ 昨日まで私と一緒にいたのに、一体いつの間に仲良くなったの？

て、ああ、ベル君が行っちゃう。ぼくとして早くこのお弁当渡さないと……て、シル・フロアヴァさん、こつちをじつと見てどうしたんです？

え、このお弁当？ いやいや、確かにベル君に渡そうと思って追いかけていましたけど、私は全く邪魔されたとか余計なことをととしてくれたな、とは思っていませんよ？

え、いや、『そういうことにしますね』って。待つてください、誤解です。確かにベル君のためにお弁当を作りましたが、そう言った愛情表現的なものではないのです。

ラブではなくライクなんです。お願いします、信じてください。こういう恋愛っぽい勘違いは勘弁してください。

え？ 分かってほしければ「豊饒の女主人」に食べに来い？ あくそう言う感じで客引きするんですね、分かりました、今晚にでもお邪魔させていただきます。

はあく今回は完璧に私の負けだな。でも、今思えばこの街に来てから外食なんてほとんどしなかったし、いい機会だから今夜は奮発して

「豊饒の女主人」にお世話になりますか。

あ、でも、女神様の許可を貰わないといけないよね。ダンジョンから帰ったら、少し、お話をしてみよ。

今日も元気にダンジョン三昧。受付のおねーさんにはちよつと睨まれたが、私は元気です。

しかし、もう地下五階まで来たのにベル君の姿が全く見えない。うん、やっぱり地下一階から採取、採掘、採伐を繰り返して小金を稼いでいたのが原因でベル君より遅れちゃったのかなあ。

やっぱり荷物がかさ張るから『サポーター』を雇った方がいいのかなあ。でも、いくら組合で募集しても誰も参加してくれなかったんだよね。

確かに私はいろんな人に誤解されて避けられているよ、でも、私は組んだ人に危害を加えたことは一度もない。

……解散した後で「怖れよ、我を」をしたけど、あれは相手が私を騙したから悪いのだ、組合の裁決でも私は無罪だったから、私は悪くない。

あ、でも、一度だけ小人族の男の子がサポーターに名乗りを上げて

くれたことがあったなあ。

ちなみに初日にゴブリンの群れ相手に「怖れよ、我を」からの「命ず、輩を喰らえ」止めに「命ず、自ら滅せよ」のフルコースを小人族の子に見せドヤ顔してやったら、即日音信不通になった。

可笑しい、まったくもって、可笑しい。ここまでハブられるオリ主がいるだろうか？

私は料理も出来るし、貯蓄も節約も出来、一般常識だつて持っているから無謀なことや変な正義感から問題も起こさない、おまけに神様転生でチートも持っている。

なのに、なぜ一人きりでダンジョンに潜っているのだろう、うくん、あんまり気は進まないけどやっぱ一人は寂しいから、いくら嫌がられても主人公様にピタツとくっついてダンジョンに挑もう。そうすれば私も主人公の作り出す仲間の輪に入れるし寂しくもなくなり、私がいいつも一人なのを気にしている女神様も安心するだろう。

よし、そうと決まれば景気づけにたくさんモンスターを狩ってお金を稼いでいこう。

お、早速、コボルトの群れを発見。ほかの冒険者がいるが劣勢の様、しよくがない、私の悪評けしのため助けてあげますか。

それでは「怖れよ、我を」くふふふ、あくははははははは！

悲報。モンスターから助けてあげたのにお礼も言われずに悲鳴を上げて逃げられた件について。

……ま、まあ、今日の稼ぎはかなり良かったし、10階層目まで踏破出来たし、トータルで見たらかなりの快挙を成し遂げたわけだし、一応人助けもしたから私の評価も向上したはずだ。

「ダンジョンで人助けをするなんて、キミはえらいよカメ子君！」
女神様もそう仰って喜んでくださっているので私も大満足だ。最近あんまり褒められていなかったから思わず笑みがこぼれる。

私が笑えば女神様も喜ぶ。本当に今日は良いことづくめだ。

「はい、今回のステイタス更新はこんな感じだよ」

ふむふむ、相変わらずランクアップの兆しはなし、ステイタスは軒並み上昇、今回も魔力の上昇が一番高く、耐久の上昇値が微々たるもの

うん、普通だな。さっさと服を着替えてベル君と代わってあげよう。なんか今日はたくさんモンスターを倒せてウハウハで帰ってきたし、さぞかし有意義なダンジョン探索だったのであろう。

そのことをネチネチ言ってしまった私は心が狭いのだろうか？

ベル君と交代して外で待っていると彼の大声が部屋の外まで聞こえてきた。

何事かと思い部屋に入ると彼が興奮しながらステイタスの紙を私に差し出してきた。ステイタスの紙は他人にむやみやたらに見せるモノではないんだけどなあと言いつつ気にはなっていないので確認してみる

え!?! トータル160オーバー? 一回、ダンジョンに潜っただけで? 私、一年近く一人で潜っているのにこんなに上昇したことないよ?

私の言葉でベル君はさらに喜び、すっかり舞い上がっている、しかし、女神へステイア様はふくれっ面というか、おもしろくないって顔でベル君を見ている、舞い上がったベル君も困惑して、なんでこんなに熟練度が上昇したんだって言ってますよ。

『知るもんか』って、なんでちよつと涙目なんですか。

あ、女神様、コートを持ってどこに行かれるんですか、ベル君だつていきなりのことで心配してますよ？バイト先の打ち上げ？私の稼ぎが安定してきたから最近、行く日が減ってきてますけど、それでも打ち上げに呼ばれるんですね。

『キミは一人で羽を伸ばして寂しく豪華な食事でもしてくるといいさ！』って女神様

……あくあ、行っちゃった。ベル君情報が頭の中で整理できなくてポカーンってなってるけど、フォローするのは私の仕事ですか？

えっと、ベル君。晩御飯何食べたい、今日のお祝いでなんでも作ってあげるよ。え、先約があるの？ ああ、キミも「豊饒の女主人」に誘われていたのか？

うん、私もベル君が忘れていったお弁当を届けるときに偶然「豊饒の女主人」の店員さんに出会ってね誘われていたんだ。

うん、忘れたおかげで新たな縁が出来たのは喜ばしいけど、ダンジョンに挑むときは食料、水、薬、糸。これらは決して忘れないこと。

え、糸って？ ダンジョンに挑むときは糸持った？ が合言葉ではないの？ ……そっか、違うのか。ううん、何でもない、私は今日の収入を家計簿つけてから行くからベル君は先に行つて場所取りをお願いね。

うん、じゃあ、またあとでね。

先に「豊饒の女主人」についたベルは朝に知り合ったシル・フローヴァに案内されるまま店のカウンター席に腰を下ろした。

そこで女将に冒険者のくせに可愛い顔していると言われても『ほうつておいてください』と小さい声でしか反論出来なかった。

注文もしないうちに料理と飲み物がいきなり運ばれ圧倒されたが、何とか平静を保ちながら値段を計算する。

「カメ子さんから渡された食事代は2000ヴァリス、運ばれてきたのは、麺料理が300ヴァリス、飲み物が200ヴァリス、……これならまだ足りるな」

と、ほっとしているとドデンと魚料理が運ばれてきた

「足りないだろう？ 今日のおすすめだよ」

「いや、頼んでないですって！」

「若いのに遠慮しなさんな」

そう言つて笑いながら厨房に戻っていく女将から視線を外し、壁に掲げてあるメニュー表から今日のおすすめ料理の値段を確認する

「850ヴァリス!?!」

二人分だと渡された食事代を早くも半分以上も使つてしまい開いた口が塞がらなくなってしまう。

楽しんでますかとシル・フローヴァに声を掛けられるも、

「……圧倒されています」

と答えるしかなかったベル君であった。

第十話 私のコミュニケーション能力は最強である

ふう、家計簿つけてたら遅くなっちゃった。

ベル君怒ってるかな？ 一応、食事代も追加で2000ヴァリス用意して来たからベル君がぼったくらられていても大丈夫だろう。

まあ、いくら彼が押しに弱いからと言って、漫画の一コマみたいに頼んでもいないのに大量の料理を出されるという展開は流石にないだろう。

……ホントにそんなことないよね、お金足りるよね？ あの店は良心的なお店だね。ぼったくらないよね。

おっと、考え事をしてるうちに豊穰の女主人が見えてきた。

うーん、まだ少し距離があるのにお店の喧騒に何かしらの料理の良いにおいが私の鼻をくすぐり、お腹がグーグー鳴りはじめたぞ。今日はせっかくの夕食なんだしちよつとくらい奮発してもばちはあたらないうね。

ん？ お店から白髪の少年が勢いよく飛び出して行ったが・・・あれ、ベル君じゃない？

いやいや、多分私の勘違いさ。

だって私と待ち合わせをしているのに先に帰るなんて常識はずれなことをあの純朴少年がするはずないさ。

ん、次出てきたのはアイズ・ヴァレンシユタインさんじゃない？

鎧は装着してないけど、あの顔は忘れたくても忘れられないからね。やば、目が会っちゃった。どうする？ 挨拶しといたほうがいいかな、でも、挨拶したら多少なりとも会話が発生して時間をとられるな。

しょうがない、ベル君も待ってるし、お腹もペコちゃんだし、軽く会釈だけして中に入ろう。そして脳内孤独のグルメごっこしながらご飯をたべよう。あれ一回でもやるとクセになっちゃうんだよね。

くうく考えてたら益々お腹がすいて来ちゃった。

あ、アイズ・ヴァレンシユタインさん、こんちわくす。ぺこつとお辞儀をしまして、こら何か会話したそうに私を見るな、私はお腹がすいているんだ、ご飯の後ならいくらでも相手してあげるからまたあとでね。

よし、いくぞ!!

悲報、私が入店したらお客のテンションがダダ下がりした……

なぜだ！ たった一年でなぜ、こうまで怖れられる。可笑しいだろ、私を転生させてくれた神様、貴方私に変な呪いでも掛けました？ い、いや。あの人の好きそうな神様がそんな意地悪をするとは思えない。これはおそらく私のコミュニケーション能力に問題があるのだろう。

いや、思い起こせばこの世界に転生して女神様に拾われてから、ギルドの職員と商店の店員さんとしかちゃんとかとコミュニケーションを取ってこなかったな。

ほかの冒険者とは一度トラブルを起こしてからは、またトラブルに巻き込まれるのが嫌で積極的には関わってこなかったし、相手も私に必要以上に干渉してこなかったから、あえて見て見ぬふりしていたが……これは『カースメーカー』を知らない人には『何か怖くて近寄りたくない人』と思われるも仕方ありませんね。

ああ、これなら店の前にいたアイズ・ヴァレンシユタインさんとかつつり会話しながら入った方がまだ良かったですか。

きっと周りからなんで二人一緒なんだ、と思われるかもしれないけど、この空気よりはるかにマシだっただろう。

私のバカバカ、目先の事に捕らわれて大事なことを見落としているではないか。しかし悔やんでも仕方がない、一年たってようやく気が

付いた事実、ベル君も加入したことだし心機一転、他人にバンバン関わっていいこう。そして私こと、カメ子は噂通りの人ではないと認知してもらおうのだ。

うん、あそこのテーブルで宴会しているのってロキ・ファミリアの皆さんではないか。

これはちようどいい、あのファミリアの皆さんにも私が危ない奴だと誤解されてるし、ちよつと挨拶しておこう。

「い、いらつしやいませだニヤ〜」

猫耳店員さん、引きつった笑顔で対応してくれていますが、席に着く前にロキ・ファミリアとお話があるんでまたあとでね。

……さて、がんばれ私、この対応を間違えると私の誤解はさらに強固なものになる怖れがある、慎重かつ、フレンジーに挨拶するのがベストだ。だがしつこく話しかけるのも？Gだ、相手の気分を害してしまう恐れがある

では、行くぞー！

ロキ・ファミリアのテーブルからは笑い声が聞こえて楽しそうだ。お酒も入ってるし、これなら多分挨拶したら普通に返してくれるかもしれないな。

<予想>ホワンホワン

カメ子「こんばんわ、楽しそうなお話をしていますね。私にも聞かせてもらえないでしょうか」

ベート「おお、いいぜー！(酔ってる) 席も空いてるし少し話そうぜ」
ロキ「あんたへステイアのこの眷属やろ、だったら断る理由はないわ、みんなもええな？」

エルフ「もちろんよ、一緒に飲みましょう」

アマゾネス「よろし、じゃあ、飲み比べとしゃれこもうじやない」

カメ子「わ、私、お酒って飲んだことなくて(この世界では)」
ベート「なんだ、初めてかよ。なら俺が飲み方を教えてやるよ」

みんな「はははははははは」

うん、なんだかいけそうな気がする。あとでアイス・ヴァレンシユ

タインさんも帰ってくるはずだから、その時改めてお話をして私の誤解を解こう。では、さっそく声をかけるぞく、こんばんは、何話してるの、私にも教えてよく

その日、『豊穰の女主人』の空気は死んだ。

酔っぱらった冒険者たちの喧騒でうるさく、活気のある店内の空気は彼女の入店と共に下がり始める。

『イカレ女』 蔑称でありながら、まるで二つ名のように扱われオラリオでその名を知らない者の方が少ないといわれる冒険者。

そんな彼女が店の中央付近で宴会しているロキファミアリアに向かって足を進めているのだ。

「い、いらっしやいませだ…ニヤ〜」

豊穰の女主人亭の猫人のウェイトレス、アーニヤ・フロームルがこ

の空気に負けず話しかけるも、彼女はそれを無視し、さらに足を進める。

そして、周りの冒険者たちはさらに緊張に身をこわばってしまふ。「ねえ。楽しそうな話だね。私にも聞かせて?」

その瞬間、さらに空気が重くなるのを店の客たちは感じ取った。

なぜなら、先ほどまであのテーブルでは彼女と同じファミリアの間を笑いものにしていたからだ。

イカレ女の腰巾着、ビビれば御主人様ほつといて逃げる赤糞野郎、糞に告白されるアイズ可哀想…などなど

「…おい、イカレ女。それ、どういう意味だかわかってんのか?」

レベル5であるベートから尋常ではない殺気が漏れ出し、何人かの冒険者はその殺気から逃げるように目線を外したり、お代をテーブルに置き巻き添えを食わないよう静かに立ち去っていく。

しかし、『イカレ女』はそんな殺気など微塵も感じていないよういつもの能面顔で言葉を吐く。

「なんで怒っているの? 単純に楽しそうに話しているから気になっただけ」

「白々しいセリフ吐きやがって! 喧嘩売ってんのか!!」

「よさないかベート! 元々は我々がモンスターを逃がしたことが原因だ。それなのに彼女の仲間を侮辱したのだ、彼女の怒りはもつともだ、なのに責めるのは筋違いだ」

「ああ!!」

怒りに任せて席を立ち、小女に掴みかからんとするベートを同じ席のリヴェリア・リヨス・アールヴが咎める。

それで怒りが収まるベートではない、しかし、今まで黙っていた主神ロキがリヴェリアの言葉を認める。

「もうそのへんにしときやベート。同じファミリアの家族を馬鹿にされて黙ってるほうが可笑しいやろ」

納得はしてなくとも主神の言葉に舌打ちをしながら席に座り、イライラを抑えるために酒を飲み始めるベート。

先ほどの空気がだいぶ緩和され、店の客もそれぞれ飲みなおしはじ

め、臨戦態勢のウエイトレス達も配膳に戻り、女店主は『やれやれ』とばかりに仕事に戻る

「うちの子が失礼してほんまかんんな。しかし、仲間のために格上のベートに絡んでいくなんて、前会った時より人間らしくなったんちやうか」

「私は元から人間。女神様だってそう言ってくれてる……あと、ベル君は仲間じゃない」

ロキは彼女の言葉に少しショックを受ける、何せ彼女は嘘を言っていないのだ。

「……そうか。でも悪くは思っていないんやろ？」

「うん」

「そうか、今回の事はほんまに悪かったな。今度会うときはもう少し仲良うしようや」

「うん」

短い返事だったが一連の言葉に嘘はなかった。もう少し彼女と話したかったが、周りの目もあつたため早々に話を切り上げた。

彼女も納得したようで、ウエイトレスのシル・フローヴァの案内に従って店のカウンター席に腰かけたようだ。

「あのドチビも難儀な子を眷属にしたもんやな。まあ中々可愛らしい子やし、今度会ったら改宗でも薦めてみようか」

そう漏らしたロキの目線の先では女将より大盛りの料理を出されたカメ子がキョートンとしている姿があった。

女神ヘステイアにとって彼女は放つてはおけない存在である。

最初の出会いは雨にうたれ、ずぶ濡れになった彼女を保護したところからである。

そのころの彼女は全てに絶望し、生きることを半ば諦めていた状態であった。

彼女は言う、『私がこの世界にいること自体間違いである』『別の世界で生きたかった』

ヘステイアはそんな彼女の境遇を憐れみ、自身の眷属に誘った。彼女は戸惑っていたようだが、最終的には眷属になる事を了承した。

しかし、彼女に恩恵を与え、発現しているスキルを見た瞬間、ヘステイアは悲しみで胸を締め付けられる。

彼女に発現したのは【呪詛】その効果は【恐怖】を植え付け意のままに操る術である。

発現されるスキルは今までの経験や出来事が深く関わるといわれている。ならばこの子は、今までどのような恐怖に晒されてきたのだろう。

そんなこと目の前の少女の無機質な目を見れば想像するまでもない。

そんなこと目の前の少女を縛る拘束具を見れば想像するまでもない。

その苦しみを想像するだけで悲しみで涙が止まらなくなる。

彼女は絶対にヤバイ所から逃げてきた可哀想な子だと、半ば確信していたヘステイアは彼女を連れ去りに来るであろう悪漢共の襲撃に備えて鉄パイプを握りしめ、頭に鍋を被るといふ完全武装で夜を明かした。

怖くない……と言えば嘘になるが彼女を守ると一人誓った彼女はまさに女神の鑑である。

：しかし、そんなヘステイアをよそに一週間経つてもなんの音沙汰なかった。

どういう事だと保護した彼女：カメ子に事情を聞きたかったが、特大の地雷を踏むことに躊躇し、結局聞けぬままとなってしまうた。

こうして始まった彼女との生活は順風満帆とは行かなかつた。ぶつちやけ、生活費がなかった。

そのころのヘステイアは友人であるヘファイストスの下に身を寄せていたが、来る日も来る日も怠惰に過ごす生活を改めなかつたために、ついには追い出されてしまったのだ。

そのため、手元にあるのは追い出される前にヘファイストスから貰った僅かなお金のみ。

そんな折、カメ子が冒険者になりお金を稼ぐと言い始めた。

彼女の境遇、発現した【呪詛】の存在もありヘステイアは反対したが、カメ子の意志は固かつたため、押し切られる形で承してしまった。

だが、それは杞憂だつたようだ。彼女はダンジョンから帰るといつも楽しそうにヘステイアに自身の冒険談を話してくれる。

今日は薬草を鞆一杯になるまで採取できた。

今日はモンスターを三体も倒すことが出来た。

今日はほかのファミリアと組んでダンジョンに挑んだ。

表情こそはあまり変わらないが、とても楽しそうに話す彼女をみるとても心が温かくなるのを感じていた。

彼女がダンジョンに挑み、ヘステイアはアルバイトに精をだす。そんな生活が半年も続いていくと、街のうわさに不穏なものが混じり始める。

『イカレ女』

ダンジョンにてモンスターを残忍に殺し、同じ冒険者相手でも敵対すれば容赦なく屠るといふ、恐怖の存在が頭角を現してきたそうだ。

その噂を聞いた瞬間、ヘステイアはすぐさまカメ子に冒険者を止めるように説得を開始する。

理由？ 単純明快にカメ子がこの噂の『イカレ女』に襲われてはた

まらないと感じたからである。

しかし、当のカメ子はそのような恐ろしい人とは会ったこともないし、見たこともないと言う。

神の特権として人の嘘が分かるヘステイアは一先ず大事な眷属が噂の存在に被害を受けていないことにホッとした。

しかし、だからと言って安心はできない。今はまだ被害に遭っていないとも未来は分からない、だから止めよう、ボクがバイトを増やして養ってあげるから、もう危険なことは止めよう、と言ったが彼女は本当に危ない人ならギルドが対処するだろうと言い、それらしい人がいたら接触せずにすぐ逃げるからと約束してくれた。

まだ少し納得はできないけど、ダンジョンに挑むことで彼女は少しずつ明るくなっているため、約束を厳守することでとりあえず納得することにした。

後日、彼女から『イカレ女』の事を聞いてみたら、目が物凄く泳ぎまくった挙句、『え？ あ…うん。ソナナヒトハイナカッターヨー』などと普段のカメ子からはありえないほど動揺していた。

絶対何かを隠していると確信したがカメ子はまったく口を割らなかった。あのように白々しい嘘をつくカメ子に対し、ヘステイアは呆れると同時に、彼女の感情が少しずつだが成長しているのだと嬉しくなった。

そんな彼女だからこそ、女神ヘステイアにとって彼女は放っておけない存在である。

ベル・クラネルにとって彼女は頼りになりすぎる先輩冒険者である。

彼女は朝は誰よりも早く起き、皆のために朝食の支度を始め、ベル達が朝食を食べている間に洗濯物とダンジョンに向かう準備を終わらせ、自分はギルドの受付に行くまでの道すがらに携帯食で食事をすませている。

ダンジョン攻略においては、チームリーダーとして攻略の道順、周囲の警戒、安全確認に体調確認などを行い。

モンスターとの戦闘では戦闘指揮に動き回るベルのために補助に牽制、時には呪詛でモンスターを震え上がらせる。

戦闘が終われば魔石やドロップ品を回収しバックパックに詰めていく。

ベルは何度も自分も荷物を持つと提案するが彼女は決まって『ベル君は動き回ってもらわなければならないから、重荷はなるべく避けたほうがいい』と頑なに荷物を手放そうとはしなかった。

ダンジョンから帰還すればギルドに帰還の報告と戦利品の売却、その帰り道に商店で夕食の買い出しをしながら帰宅。

帰宅後は洗濯物の取り込み、入浴の準備に夕食の支度を同時進行し、夕食後は皿洗いに洗濯物をたたみタンスに片付けていく。

ベル達が寝床に入るころ、服や装備品のほつれの裁縫作業をしながら家計簿をつけている姿をよく見かける。

ベルやヘスティアも何もしない訳ではないが、家事能力がカメラ子より大きく下回っているため、皿を洗えば泡で滑って地面に落として割ってしまい、カメラ子に『怪我、なかつた?』と心配され。

料理を作れば塩と砂糖を入れ間違ひ微妙なマズ飯を作ってしまう

カメ子に『……うん、おいしい。御代わりしてもいい？』と気を使われ。

お使いに行けばお財布を忘れて、カメ子に届けてもらい、『ついだから私も買い物に付き合う』と言われ、お使いの意味が全然なかったりしたりする。

そんなダメダメっぷりに二人して落ち込むも、彼女は決まって『私は、毎日が楽しい、だから気にしないで』と控え目な笑顔を見せてくれる。

その度にベルは彼女に頼られる男に絶対なつてやると想いを滾らせる。

その感情は想い人に向けるモノとは少し違う。

具体的には言葉にできないが、想い人の事を考えると、顔が赤くなり、胸がドキドキする。彼女の事を考えると……なんだかホツとするような気がする。

そんな頼りになりすぎる先輩は今日も忙しく働いている。

第十一話 運命は廻り、私は流される。

ああ、青い空、白い雲。今日も大変素晴らしい朝ですね。とはいっても、起きているのは私だけですけどね。

いや、話せば長くなりますが、昨日『豊饒の女主人』にお食事をしに行ったのですよ、そしたら私が来た瞬間、店の空気が最悪なモノになりましたね、さすがにこのまま誤解されつづけるのはまずいと思って、ちようどお店にいたロキ・ファミリアの皆さんから、私への誤解を解こうと思つて、フレンドリーに挨拶しに行ったら……なぜかさらに誤解が根深くなりました。

解せぬ。

誤解解きが失敗に終わった私を待ち受けていたのは、ベル君が無銭飲食まがいの事をやらかしたという事実だった。

解せぬ。

まあ、ベル君が後から私ができることを伝えていたから、ベル君の食い逃げ行為はギリ許された。

一応頭は下げたが『悪いと思うならしつかり飲み食いしておくれよ』といい笑顔で言われたため、胃袋と財布が限界値以上のお料理をいただくはめになったわけですよ

あ、店を飛び出してどこかに行つてしまったベル君は明け方に無事に帰ってきました。どうやら『豊饒の女主人』で自分の現状や弱さを痛感し、強くなる事の意味を理解したらしく、一晩中ダンジョンに潜つて熟練度稼ぎを行なっていたそうです。

しかし、ベル君はなんで無銭飲食まがいの事をしたのだろうか？
なんか原作でそんなことがあったような、なかったような……こつちの世界に来てから、前世の記憶の摩耗が激しいせいで良く分からなくなってきたな。

言つとくが、悲観的な理由で記憶が摩耗しているのではないぞ、新たな人生の記憶が増えてきたから昔の記憶が思い出しにくくなつて

きているだけである。

こつちに来てから毎日が必死で、掃除、洗濯、料理、拠点のリフォーム、ダンジョン攻略、装備品の管理、資産管理に家族の健康管理etc。昔を思い出すより今を記憶する方が忙しい。

だから次のイベントは怪物祭辺りまでないと記憶にはあるが……よくわかんない。

まあ、女神さまは優しくベル君の帰りを受け入れたが、先輩冒険者の私はベル君の無謀な挑戦を看過できなかったので、傷の手当てをしながらグチグチと苦言を呈してあげましたよ。

ベル君は笑って誤魔化そうとしていたけど、その度に傷口に消毒液をぶっかけましたよ。漫画みたいに『し、滲みるく！』と叫んでいたけど、『男なら我慢』と、こちらも漫画みたいな返しをしましたよ。

女神さまは『力、カメ子くん、もっと優しくは出来ないのか？』なんて心配そうにしていたけど、残念、今日は優しくできそうにありません。『豊饒の女主人』で一人にされた恨みをくらうがいい。

そんな感じで治療と清拭を済ませるとベル君も体力の限界と眠気には勝てなかったらしく、そのままベッドでダウン、女神さまも待ってる間ずっと起きていたので、そのままウトウトとベル君の隣にダウン、私はしつかりと仮眠をとってたから眠くなかったので二人に布団を掛けて部屋を後にしたのですよ。

まあ、思い出しにくい記憶を思い出す暇があったら、今度あるはずのガネーシャ様の宴会に参加するはずの女神様の衣装にアイロンをかけておく方が有意義つてもんだ。

しばらくはベル君も神様も起きてこないだろうし、今日はダンジョンはお休みして家事に専念しますか。

ふふふ、前世の独身生活の経験と今世の女子力が融合したパーフェクト家事技能がうなりますねえ!!

私の目の前では、ベル君のステイタスの更新がされています。普段は更新中は外で待機しているんですけど、今日はなんとなく同席しています。

女神さまからもベル君からも文句が出なかったので、今まで気を使っていたのは何なんだろう、と思いながら見ていたら女神さまの顔色が急に悪くなりました。

おそらく、ベル君のステイタスがまた急上昇したんだと思われる。ん、女神様、私のほうを見てどうしたんです？ベル君のステイタスを書き写さないんですか？

「いや、ベル君。今日は口頭でステイタスの内容を伝えていいかい？」
「あ、はい。僕は構いませんけど……」

ん、私？ 邪魔になるなら、ちよつと外出してくるけど……あ、私にも聞いてほしいんですか？ じゃ、ベル君隣に腰かけさせてもらうね。

「はつきり言うよ。今君は熟練度がすごい勢いで伸びている」
「え？」

「それこそ、そこいらの冒険者……いや、君より先に冒険者になった力

メ子君を上回るくらいさ」

「この世界に転生チート貰ったクセに原作チートに負けるオリ主がいるらしいですよ。もちろん私だよ。」

「え、いや。私ベル君より一年も早くダンジョンに潜っているんですよ、確かに一人の時は安全性と安定を重視したため、『畏れよ我を』で逃げ出したモンスターは積極的には狩ってきていないけど、最近はそのモンスターの討伐数も増えてきたし、この前なんてミノタウロスを単独で撃破したんですよ。」

「なのに…なのに…：負けてるんですか？」

「…まあ、そんなわけなんだけど。何か心当たりはある？」

「じ、実は一昨日六階層まで行っただけですけど…」

「ふー、良かった。ステイタスでは後れは取ったみたいだけど、到達階層はまだ私の方が上みたいだ。まあ、彼はまだステイタスの高さによるごり押しで攻略しているみたいだから、私抜きではまだそれくらいが限度だろう。」

「はあ、本題に入ろう。今の君は理由ははっきりしないけど、恐ろしく成長する速度が速い。言っちゃえば成長期だ」

「は、はい」

「君には才能があると思う。先輩冒険者のカメ子君の教えのおかげで冒険者としての器量も資質も十分身につけている」

「まあ、ベル君は基本真面目な子だから、私の『世界樹式攻略術』を真面目にこなしているから、原作よりかはサバイバル術は上がっているものだと思うわね。」

「だが、今だにトイレは一人で行きたがるがな。何度も、何度も、ヤツてる最中は無防備になるから一人ではするなと言っても、顔を赤くしながら勘弁してくださいって謝るのやめろ。」

「私？ 私は一回潜ったら帰るまで一回もおトイレには行きませんかよ？ これもまた『世界樹式攻略術』の妙技なり。」

「約束してほしい、無理はしないって。この間のような真似はもうしないって誓ってくれ。君の強くなりたいう意志を僕もカメ子君も反対はしない」

そう言つて女神さまもベル君も私のほうを見たから、私も分かつて
ますよつて感じで微笑んで頷きました。ここで変な茶々を入れるほ
ど空気が読めない訳ではありませんからね。

「だから…お願いだからボクを一人にしないでおくれ」

……女神様。すつつつつつごくベル君の事を心配している気持
ちは分かりますけど、ナチュラルに私がいることを忘れないでくれま
す？

「……はい、無茶しません。頑張つて必死に強くなりますけど……絶
対に神様を一人にはしません」

おい！ だからナチュラルに私をハブるな。二人で見つめ合いな
がら二人の世界に入るなよ。……お、いいところに本が置いてある
な。

この本で二人の頭をパーンと叩く！

「痛つたい!!」

まったく、何二人の世界に入っているんですか？ なんです。二人
は恋人なんですか？ 私はお邪魔虫ですか？

「こ、こここここ恋人!! ボクとベル君が……ウへへへへ」「ち、ち
ちちち違いますよ!! ぼ、僕にはアイズサンガ」

まったく、女神様も言つてたけど、強くなりたいたいんなら私も協力す
るから、これからは一人でダンジョンに挑むなんて無茶は程々にね。
ベル君はまだまだダンジョンの知識やサバイバル術の知識に偏りがある
んだから、意地はらないで、明日からまた一緒に頑張ろうね。

「あ、はい！ よろしくお願いしますー！」

うん、よろしい。女神様も、そろそろ妄想の世界から帰つてきてく
ださい。

「はっ。いけない、いけない。ボクとしたことが。オホン、二人と
も、ボクは今日…いや、何日か留守にするよ」

「え？ バイトですか？」

「いや、友人の開くパーティーに顔出そうと思つてね。行く気はな
かつただけど、久しぶりにみんなの顔を見たくなつたんだ」

おお、やつぱり。用意しておいて正解だった。はい女神様、衣装の

用意は完璧ですよ。

「なんでキミはボクがパーティーに行くことを知っていたんだい？」
え、どうして女神様がパーティーに参加することを知っているの
かって？ やっぱ、原作で知ってますなんて口が裂けても言えないし
……いや、普通に招待状を机の上に出しっぱなしだったし、御迷惑で
したか？

「い、いや。嬉しいんだけど、このドレス家に無かったよね？」

うん、ありませんでした。だから買っておきました。最高級品は無
理だったのでそこそこのものですけどね。

「カメ子君、キミってやつは……」

はははは、喜んでくれて嬉しいです。じゃ、ベル君、女神様が着替
えるからお外に出ていようね。

え、私の服です？ 買ってませんよ？ 私には『カースメーカー』
セットがありますから。

なんでまた泣くんですか？ サイズが合いませんでしたか？

第十二話目 女神ヘステイアと神友たち

真新しいドレスに身を包んだヘステイアは神の宴の会場であるガネーシャ・ファミリアの本拠地に無事たどり着いた。

「よく集まってくれた皆の衆！ 俺が神の宴の主催者であるガネーシャである！ 毎度、毎度、多数の出席者にガネーシャ、超感激である！」

会場ではすでに主催者であるガネーシャが自らの自己主張を交えた挨拶ともうすぐ開催される「怪物祭」への協力を出席者のファミリアに要請しつつ、なにかと大声で主張しまくっていた。

しかし、ヘステイアはそんなガネーシャの言葉など半分以上聞き流し、会場の料理を食べまくっていた。本当はタツパーに詰めてお持ち帰りしたかったが、眷属であるカメ子が『さすがに、ダメ』とタツパーの所持を許してくれなかったので、とりあえず用事のある人物(神)を探す前にお腹を膨らませることにしたのである。

『あれ、ロリ巨乳来てたんだ』『なんだ、生きていたんか』『露店でバイトしながら客に頭撫でられてるらしいぞ』

参加者である神連中に陰口が耳に入り、さすがのヘステイアも、食事のスピードが落ちた。

『そーいやあのロリ神、闇派閥の子を拾ったらしいな』『ああ、例のあの子か…』『呪い子か…』『いくら何でも眷属くらいは選べよ』『ロリ神×闇少女(´Д｀)』『うちの眷属とは関わってほしくはないよね』『関わって呪われるのは勘弁してほしいしな』

何も知らないクセにボクの眷属を悪く言うな、彼女がどれほど心に傷を負っているかも知らないくせに、やっとならうようになったんだぞ、このドレスだって彼女が選んでくれたんだぞ。

せせら笑うやつらに、今思ったことを力いっぱい叫びたかった。しかし、今騒げば確実に会場から追い出されてしまう。そうなたら何のためにここに来たのかわからなくなる。

言いたいことも言えず『ぐぬぬぬ』と、うなりながら、怒りの溜飲

を下げるために手に持っているお皿の料理を口いっぱい頬ばる。

「何やってんのよ、あんた…」

「むぐつ？ むっ！」

急に話しかけられのどに詰まりそうになるも、何とか飲み込んだヘステイアの前にはお目当ての神がいた。

「久しぶりヘステイア。元気そうで何よりよ」

てか、食べ過ぎよ。と呆れる彼女をよそにヘステイアは探す手間が省けたとばかりに内心喜んでいた。

「ヘファイストス！ やっぱり来ていたんだね。ここにきて正解だったよ」

持っていたお皿を近くのテーブルに置き彼女のそばに歩いていく。
…が

「この…大ばか者!!」

「キャウン!!」

いきなり大声で怒鳴られ、拳句に拳骨をお見舞いされたヘステイアは情けない声を上げながら沈んでいく。

「眷属の子から聞いたよ…私に追い出されてから闇派閥の真似ごとを始めたらしいわね」

「ヘファイストス。な、何のことだい？ まったく身に覚えが…」

「自分の眷属の子にあんな格好させといて言い訳をするんじゃないわよ！」

訳の分からないことで怒鳴られたヘステイアは奇跡的に正解にたどり着いた。

：おそらくカメ子のあの格好をヘステイアが強要させているとヘファイストスは思っているようだ。

それはとんでもない誤解だ。ヘステイアはカメ子の恰好をどうかしようとして今まで最大限の努力をしてきたのだ。

ある時は拘束具を隠したり。

ある時は普通の服を買ってきたり。

ある時は泣き落としをしたり。

そんな努力のかいあって、カメ子は『家の中』では普通の恰好で過

ごすようになっているし、ダンジョンに行かない日は普通の恰好で買
い物にも出かけている。

「ご、誤解だよ！ ボクだってカメ子君にあんな格好はしてほしくな
いけど、本人がダンジョンの日はこれと決めていると言って聞かない
んだよ」

今だにこちらを睨んでいるヘファイストスに涙ながらに身振り手
振りを加えながら今までの自分の頑張りを訴えると、ヘファイストス
の顔から険しいものが取れ、代わりに呆れの表情に変わっていく。

「…はあく、分かった、信じてあげるわよ」

「ほ、本当かい、ヘファイストス」

「ええ、アナタがそんな奴だったら、私は友達になんかならなかったわ
よ」

だったら最初から信じてくれてもいいじゃないか、とちよつと思っ
たが口からは出なかった。

「で、今日はどうしたの？ タダ飯でも食いに来たの？ 言つとくけ
ど、お金はもう一ヴァリスも貸さないからね」

「し、失敬な。ボクがそんなことをする神に見えるかい！」

「え…あんたこつちに来てから散々私を頼ってきてたじゃないの」

「それは昔の話！ 今のボクはファミリアの主神だぞ！」

ヘステイアが顔を真っ赤にして反論していると、二人に近づく影が
あった。

「ふふふ、相変わらず仲が良いのね」

その影の正体は言わずと知れた美の女神フレイヤである。ヘス
ティアとヘファイストスのやり取りを何となしに見ていたほかの
神々は一斉にかの女神に視線を送る。

女神ヘステイアはフレイヤの事が苦手である。そう公言するも当
のフレイヤは涼しい顔でヘステイアの事を好きだという。

もつとも、ヘステイアにはもつと大嫌いな神がいるのだがこの場に
は居なかつ……

「おーい！ ファーイたん、フレイヤー、ドチビー!!」

……たのだが現れてしまった。

「ロキ：何しに来たんだよ君は…」

不機嫌さを隠そうともせずヘステイアはロキに尋ねるも。

「なんや、理由がなきゃ来ちゃあかんのか？ そっちの方が無粋っちゆうもんやろ」

はは、マジで空気が読めぬドチビが、とロキは嗤いヘステイアの顔は女神がしちやいけない顔になり始めた。

そんなヘステイアをよそにほかの二人はロキと会話を始める。

「本当に久しぶりね、ロキ。ヘステイアやフレイヤにも会えたし、今日は珍しいこと続きだわ」

「ふーん。あ、ロキ貴方の『ファミリア』の名声よく聞くわよ？ 上手くやってるみたいじゃない」

「いやあー、大成功してるファイタンにそんなこと言われるなんて、うちも出世したなあー。…でもま、確かに今の子達は、ちよつとうちの自慢なんや」

ロキは照れ臭そうに頭に手をやった。ウゼエと思いつつもヘステイアは確認したいことをロキに質問した。

「ねえ、ロキ。君の『ファミリア』に所属しているヴァレン某について聞きたいんだけど」

「あつ、『剣姫』ね。私もちよつと話を聞きたいわ」

ヘステイアの質問はヘアフィストスも聞きたいらしい。

「ううん？ ドチビがうちに願い事なんて、明日は溶岩の雨でも降るんとちやうか？」

「その噂の『剣姫』は、付き合っている男はいるのかい？」

「あほう、アイズはうちのお気に入りや。嫁には絶対出さんし、誰にもくれてやらん。あの子にちよつかい出す奴は…八つ裂きや」

「チッ！」

「何でそのタイミングで舌打ちすんのよ…」

いつそ意中の相手がいてくれたほうがヘステイアにとっては都合が良かったが。うまくいかなかったため、つい、舌打ちしてしまったのだ。

「今更だけど、ロキがドレスなんていうのも珍しいわね？」

「フヒヒ、それはアレや、ファイたん。どっかのドチビが慌ただしく、パーティーに行く準備をしてるって小耳に挟んでなあ…」

わざわざヘスティアに視線を合わせるためにロキは腰を折り、顔を近づける。

「安もんのドレスしか着れない貧乏神をお、笑おうと思っただんやあ」

眼前でニマアと口を吊り上げるロキに、ヘスティアの怒りは有頂天を突破し、ヘスティアはロキのその物言いに言い返した。

「ふんっつ!!こいつは滑稽だ!わざわざ高っつかいドレス着てまでその貧相な胸…いや、無乳を周りに見せつけるなんてね!」

怒りで顔を赤くしていたヘスティアに代わって、今度はロキがカァーツと赤面する番だった。

「大体その母性ゼロの胸でどれだけ男を失望させてきたんだよツ!絶壁なだけに絶望とか、バカじゃないの!?!あつ、今僕上手いこと言ったねえー!」

「全然上手くないわボケエええええええ!」

「ふみゆぐうううううううううう!」

今ここに互いのプライドを賭けた勝負が始まった。ヘスティアはドレスを買ってくれた眷属のため、ロキは自身の誇り(乳)のために不退転の覚悟で掴みあいが始まった。

だが無情にも、ヘスティアが動くたびにロキの誇りは碎けていく…

「……ふ、ふん。きよ、今日は、こんくらいにしといてやるわ…」

ついには戦意を根こそぎ砕かれ、ヘスティアから離れ、一步、二歩と後ずさりを始める。

「ツウ……!今度現れる時は、そんな貧相なものを僕の視界に入れるんじゃないぞつ、この負け犬めっ!」

「うっさいわアホォーツ!覚えとけよおおお!!」

ヘスティアの止めの一言で、ついには涙をまき散らしてロキは会場を出ていった。

「本当に丸くなったわ、ロキ…」

「丸くなったっていうか…小者臭しかしらないんだけど…」

その戦いを間近で見ていた二人は呆れながらロキを見送るしかな

かった

「ロキは子供達が大好きみたいね。だからあんな風が変わったのかも
しれない」

「ふん、甚だ遺憾だけど、子供達が好ましいっていうのはロキに賛同し
てあげるよ」

「へえ、貴方のファミリアに入ったカメ子とベルっていう子のおかげ
？」

「ふふん、まあね。二人とも僕にはもったいないくらい、すごく良い子
だよ……カメ子君はちよつと周りから誤解されているみたいだけ
ね」

「ああ、確認もせずいきなり怒鳴ったのは悪かったよ。だけど、もう少
し彼女の恰好は気にしてあげた方が良いかもね」

そんな二人の様子を見ていたフレイヤがグラスをテーブルの上に
置き髪を翻す。

「じゃあ、私も失礼させてもらおうわ」

「え、もう？フレイヤ、貴方用事があつたんじゃないの？」

「もういいの。確認したいことは聞けたし……」

え？誰から？ と、ヘファイストスはフレイヤを怪訝な目で見てい
たが、フレイヤはそんな彼女を無視し、ヘステイアの方を見下ろして、
それじゃあと、言い残し彼女はひしめく神達の中に消えていった。取
り残された二人は微妙な顔をして、隣り合うお互いの顔を見交わす。
「で、あんたはどうするの？私はもう少し回ってみようかなと思うけ
ど、もし残るんだったら、どう？久しぶりに飲みにでも行かない？」
「う、うん、えーとっ……ヘファイストスに頼みたい事があるんだけど
……」

ここに来た本命の為に懸命に口を動かすが、目の前のヘファイスト
スは紅い左目を細くする。

「この期に及んで、また頼み事ですって？」

「え、えと、その……」

ヘステイアはそんな彼女を見て、意を決し大きな声で自分の望みを
放った。

「ベル君につ……僕のファミリアの子に、武器を作って欲しいんだ！」

第十三話 私になぜか死亡フラグが……

女神様が神の宴に出かけてから二日が経った。

とは言っても、私とベル君の日常は何ら変わりはなかった。朝起きて、ダンジョン潜って、商店で買い物して、お家でご飯食べて、お風呂入って寝る。

そんな当たり前の日常である。

しかし、しかしベル君、ちよつと待つてほしい、キミは本当にハーレム型主人公なのか!? 私：『カースメーカー♀』という美少女と二人つきりで過ごしているのにキミは何もしないのか、なにも意識しないのか!

私がお風呂に入っているんだぞ! 主人公にのみ許されたラツキースケベはどうした!? 脱いでる最中もお風呂の最中も寝巻に着替えてる最中も、なぜ偶然にも立ち会わない? なに呑気に武器の手入れをしているんだい? 何が『あ、次お風呂良いですか?』だ、絶対なんかされると思つて身構えていた私の気持ちはどうなるんだ!

食事の時だつてそうだ。美少女と二人つきりでの食事だぞ。こう：『なんかこうしていると夫婦みたいですね』みたいな甘酸っぱいセリフとか言えないのか!

まあ、言われても全力で否定するけどね。悪いけどベル君は私の理想とはかけ離れているからね。

私とそういうフラグを立てたかったら、まずはハーレム型主人公から一途系主人公にクラスチェンジして、身長を伸ばして、体をガツチリさせて声優を津田さんに変更してから来てください。

いや、何にも無いに越したことはないんだけど……こう……主人公として何なんだそこそこ。まあ、そんなことがあつたら呪う気満々だったからどうも言えないんだけど……なんか、腑に落ちない。

まあ、日常はこんな感じで過ごしていますよ、あつ、ダンジョンは

また一緒に潜っています。

今日も今日とてダンジョンに来ています。もつともベル君が強くなりすぎたせいで私はサポート要員になっていますけどね。

今まさに目の前で戦闘が始まっていますけど、ベル君一人で大丈夫そうだね。

ゴブリンの攻撃も危なげなく躲せていますし、これは大丈夫そうですね……おっと、新しくデカイトカゲのようなモンスターが天井付近で生まれ、ベル君を真上から強襲したけど、それを察知していたベル君は華麗に躲し、そのまま飛び上がり、今度はベル君が空から強襲し背中への一撃で仕留めてしまいました。

残ったゴブリンはそんなベル君の強さを恐れ、一目散に逃げだそうとしています。

しかし、恐怖を感じたのはまずかったな……

【命ず、自ら滅せよ】

私の呪いを受けたゴブリンは逃げるのをやめダンジョンの壁に頭から突っ込んで行った。

グシャっという音がダンジョンに響き、ゴブリンは壁に血のシミをつけながらゆっくりと倒れていったので、私は動かなくなったゴブリンに近づき手に持つてるナイフを頭に突き刺し、ぐりぐりと脳ミソをかき回す。

オーバーキルだと思われるが、ちゃんと殺さないとあとから後ろから奇襲されたり、仲間を呼ばれたりしたら面倒だからね。ダンジョンでは『モンスター殺すべし、慈悲はない』精神で行動しないと足元をすくわれる恐れがあるからね。

おいベル君、ボーとしてないで魔石を回収したら今日はこの辺にして帰還しよう。

「あ、はい」

うん、良い返事だ。ちよっと見ないうちにベル君つてば相当強くなつたよね。

「え？ 本当ですか」

うん、さっきの戦闘も二対一の状況に一時期なつてたけど随分と余

裕があつたように見えたし、何より息切れを起こしていないしね。

「…僕は…近づけているのでしょいか…」

誰の事を思っているのかは詮索しないけど、ベル君は確実に成長しているよ……先輩である私よりね。

バベルの一階までやつとごさ戻ってきたけど…毎回思うけど、人多すぎじゃない？

「お、人が集まってきましたね。それにしても、今日は混んできますね」
ベル君の言う通り、今日は右を見ても左を見ても冒険者だらけである。もつともそんなに混んでいても私たちの周りは空いてるから歩きやすいんだけどね。

なぜかって？ 私への誤解のせいに決まってるだろ。おい、そこのお前、露骨に距離を開けるのはやめろ。そこのお前は何かヒソヒソするはいいけど、私が見ていることに気づくと一目散に逃げるのをやめろ。そんなオーバーリアクションばかりされてるとまたいらぬ誤解が生まれるだろうが。

「…あれ？」

ん、どうしたのかなベル君？

「あの、物資運搬用のカーゴ何処のファミリア何でしょう？」

ああ、あの時折何かが叩く音が聞こえたり、唸り声みたいのが聞こえるあれかい？ あれはねガネーシャ・ファミリアが『怪物祭』の出

し物に使うモノだよ。

「…モンスターフィリア？」

そう、あそこを見てごらん。

「あ、エイナさん」

そ、ギルド職員のエイナさんが関わっていることから分かるようにギルド公認のお祭りみたいなものだよ。それでその準備を毎年しているのがガネーシャ・ファミリアという訳だよ。さ、今日は彼女は忙しいみたいだから声はかけずに行こうか。

「あ、時間があるんでしたら武器を見に行きたいんですけど…」

武器…か、そう言えばベル君ってばまだ初期装備のままだったね。貯金もあるし幾つか買ってみるかい？

「え!!いいんですか!」

おいおい、驚きすぎだよ。私は貯金ができる女なのだよ、この前女神様のドレスを買ったけど…あと10万ヴァリス位なら余裕があるよ。

「で、でも。カメ子さんはどうするんですか?」

ん? ベル君も女神様みたいに私の装備が気になるの? ははは、大丈夫。私には『カースメーカー』なりきり装備があるから、これ神様に貰ったやつだからかなり頑丈で並の防具以上の硬度があるんだよ。

え? 女神ヘステイア様? いや、違うよ。これをくれたのは私を

私にしてくれた女神様の贈り物で、女神様は関係ないよ?

あれ? なんかこのやり取りデジャヴを感じるんだけど?

げ! ベル君の顔が何か悲惨な目にあつた人を見た人の顔になつてる!?

まずい! ただ転生してきただけでこの世界では特に壮絶な過去があるわけじゃないのに、ベル君の中で私の過去が捏造され始めている!?

大丈夫だよベル君、私は今は…そう今はとても楽しく人生を生きているよ! 私には女神様がいてベル君がいる。こんなにも嬉しい事はない…だからそんな顔しないで、笑って…

神の宴でヘステイアから武器を作ってくれと頼まれ：断つたはずなんだがあれよあれよとヘファイストスの執務室まで押しかけ、書類仕事をしている机の前で丸まった状態になって二日が経過していた。「……あんた、いつまでそうやってるつもりよ？ 私、これでも忙しいの。そこで虫みたいに丸まってもらってる、気が削がれて仕事の効率落ちるのよ。わかる？」

何度目かの注意を受けてもヘステイアは頑として動かなかった。

「……」

「……はあ。あのねえヘステイア。何度も言うけど、うちの眷属の武器は最高品質、性能も値段も一流なのよ。子供たちが心血注いで作り上げる武器を友人のよしみで格安で譲る：なんて出来るわけないで

しよう?……そもそも、なんなのよ、その格好?」

「土下座。これをすれば何をしたって許されて、何を頼んでも領いてもらえる最終奥義……ってタケから聞いた」

ああ……とヘファイストスは親交のある神の顔を思い浮かべ、面倒を吹き込むなど内心怒りが込み上がるが、目の前のヘステイアの必死さがその怒りを霧散させていく。

「……ヘステイア、教えてちょうだい。どうしてあんたがそうまでするの?」

「あの子の力になりたいんだ!今彼は変わろうとし、高く険しい道のりを走り出そうとしている!だから欲しい!あの子を手助けできる力を!あの子の道を切り開ける武器が!」

ヘステイアは視線を床に縫い付けたまま、ヘファイストスの方を見向きもせずに、それにと言葉を続ける。

「……何もしてやれないのは、嫌なんだよ……」

「……わかったわ。作ってあげる、あんたの子にね」

その言葉を聞き、ばつと顔を振り上げたヘステイアにヘファイストスは肩をすくめて見せる。

「私が領かなきや、あんた梃子でも動かないでしょうが」

「うん!ありがとうヘファイストス!」

「でも代価はちゃんと払うのよ。何十年、何百年かかっても、絶対にこのツケは返済しなさい」

立ち上がるようにしたヘステイアだったが、長時間の土下座の反動で足がプルプルして立ち上がれず、四つん這いの恰好だったがとてもうれしそうな顔をしていた

「あんたの子が使う得物は?」

「え……ナ、ナイフだけ?ま、まさかヘファイストス、君が打つのかい?」

「当然よ。これは完璧にあんたとの私情なんだから、ファミリアの団員を巻き込むわけにはいかないわ。何か文句ある?」

「文句なんてあるわけじゃないじゃないか!天界でも神匠と謳われた君が打ってくれるんだよ!」

ヘファイストスはじろりと一睨みするがヘステイアはそんなの構いなし、顔を輝かせ感動に打ち震えていた。

「あんた忘れてない？天界じゃないんだから私は一切『神の力』は使えないんだからね」

「ボクは君に武器を打ってもらうのが一番嬉しいんだよ！」

まじりつけなしの称賛に若干照れるも、ヘステイアにはもう一人眷属が居ることを思い出した。

「そう言えば、あんたのもう一人…カメ子君だっけ？その子には良いの？ それとも、その子はどうでもいいって言わないわよね」

「そんな事無いよ！ ただ…」

「ただ？」

「カメ子君ってさ、ヘファイストスが知ってるように、冒険者の皆に良い印象を抱かれていないんだ。だから、今回カメ子君にも武器を作ってもらったら余計に悪い噂が立つんじゃないかって心配で…」

確かに、ヘファイストスが眷属の子から聞いた話はヘステイアから聞いた人物像からはかけ離れていた。

「だから今回は武器じゃなくてカメ子君には可愛らしくて女の子らしい服をプレゼントするつもりなんだ。カメ子君はちゃんとした格好さえすればすんごく可愛いんだから、きつと今までの悪い噂を払拭出来ると思うんだ」

ヘステイアの脳内ではカメ子が可愛い服を着て笑顔で年頃の女の子のようにはしゃいでいる姿がありありと浮かんでいた。

だからきつとこの選択は彼女の暗い過去を払拭できる良いきっかけになるはずだと考えていたのであった。

第十四話目 今日楽しいお祭りです。

近頃、いや、主人公であるベル・クラネル君が『ヘスティア・ファミリア』に来てから私はやたらと幸運に恵まれて来ていると思う。

私がまだこの『世界』に来たばかりのころは『カースメーカー』の外見のせいで、女神様からは何かしらの悲惨な過去がある子として腫物を扱うように気を使われ、ギルドの職員からも外見のせいでヤベーヤツ扱い、同じ冒険者の人たちはちよつとした事件のせいで誰も私と関わろうとせず、逆に私の魔法の効果を大げさに言いふらし、『イカレ女』なる、ちよつとどうかと思うネーミングセンスの二つ名を付けられてしまった。

まあ、上記の勘違いは私が『カースメーカー』なりきり装備に拘らなかつたら起きなかつたとは言ってくれるな。

私も最近になってやっと自覚したんだから…まあ止めないんだけどね。

話が逸れたけど……主人公が来たことよって、私への周囲の目は若干和らいできた。女神様は私の格好への慣れとベル君への好意で原作並のポンコ……いや恋愛脳……いや、優しい女神様になったし、ギルドの職員は私がベル君と普通の距離感で接しているのを見て私がヤベーやつではないとやつと分かつてくれた（エイナさんも陰ながら助力してくれていたらしい）他の冒険者達は、『私Ⅱヤベーやつ』認識から脱却できていないがそれはいいだろ。

うん？ ベル君のおかげだと思っていたけど、これって、ただ時が解決してくれたってだけじゃね？

……よし今日は【怪物祭】だし派手に遊んでまわるぞ！

いまだに帰ってこない女神様から可愛いお洋服が送られてきたし、今日は目一杯お洒落して遊ぶぞ！

でも、【怪物祭】ってモンスターが街中で暴れるんだつたよね？ こんなにボンがいっぱい装飾されたひらひらお洋服で出かけるのは危

ない気がするなあ。

よし、このお洋服は別の日にしよう。と言う訳でいつものなりきり装備を……

「ちよつと、待ってください！　なんでそつちを着ようとしているんですか!?!」

おおベル君、いきなり大声出してどうしたんだい？　というか、今から着替えるんだから席を外してほしいんだけど。

「ああ、すいません……じゃなくて！　神様が『モンスター・ファイリア』に着ていきなさいって送ってきてくれたのにどうしていつもの格好を選ぶんです!?!」

……それは今日の怪物祭はモンスターが逃げ出して街で暴れだす阿鼻叫喚な日になるからです……と言いたいなあ。

でも、ベル君には言えないし、私の身の安全は確保したいし。

「その服だつてきつとカメ子さんに似合います、絶対に可愛いと思いますよー!」

おお、いきなりかましてくれたねこの主人公は。

なに、キミは女の子にフラグを立てないと気が済まない性分なのかい？　ドキつとは流石にしなかったがちよつと心動かされかけたよ。

「あーいや、そういう意味じゃなくて……その」

はいはい、分かりましたよ。そんなにワタワマしなくても着て行きますよ。

まあ、最悪、女神様と合流したら主人公と別行動すれば危険は無いだろうし、ここで意地になって着なかつたら余計にこじれる気がする。

じゃ、着替えるからベル君も出かける用意をしてきてね。……さて、ベル君も部屋から出て行つたし、着替えますか。　ああ【神様】私が普通の格好をすることを許したまえ。

……ボソツと不穏なことを口走ってしまったが誰にも聞かれなかったよね。

この独り言が重要発言とか後々の伏線。ぼく勘違いされるなんて止めてよね。

【怪物祭】に 賑わう 大通りをよそに あるカフェの一角は 重い空気に覆われていた。

その原因の女神たちは周りの反応なぞ気にせず笑顔で会話を弾ませる。

「で？どんなヤツや、目にとまったのは。そっちのせいでは余計な気を使わせれたんや、聞く権利くらいあるやろ」

空気を重くしている原因の女神ロキがもう一人の原因の女神フレイヤに問いかける。

「……そうね、強くは、ないわ。今はまだ頼りなくて傷つきやすくて、簡単に泣いてしまう……そんな子。でも……」

そこで一旦言葉を区切り、顔を赤らめながら続きを話しはじめる。「綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今までみたことのない色をしていたわ」

フレイヤの赤ら顔を物珍しそうに眺めるロキを半分無視しながら窓の外に目を向ける。

「見つけたのは本当に偶然。あの時もこんな風に……」

その偶然が再びフレイヤの目に止まる。そして、その隣を歩く少女に……

フレイヤが執着する少年、ベル・クラネルと出会ったのが偶然なら、その少女、カメ子と出会ったのも偶然であった。

その少女の魂は常識を逸脱するほど歪められ、本来の輝きや形が判別出来ない程であった。

だが、とても小さいがその醜さに負けないほどの輝きがその魂にはあった。

【希望】という名の光が……

ゆえに女神フレイヤはその魂は欲しないが多少は気にかけている人物であった。

だが、今はそんな事はどうでもいい。今は優先させるべきは無垢な少年の方だ。

女神フレイヤはロキの話を途中で切り上げ、そそくさとその場を後にした。

履き慣れないスカートに戸惑いながら私とベル君は【怪物祭】の会場に向けて歩いている。

隣を歩くベル君はこれから降りかかる女神の試練なぞ知らずにルンルン気分である。

私は楽しみ半分、転生者だから絶対に騒動に巻き込まれるだろうな。っていう憂鬱感が入り交じった複雑な気分だ。

「どんな出店が出ているか楽しみですねカメ子さん」

おお、主人公様は能天気でいらつしやる。私の苦悩を少しは分けてやりたい、しかし、お祭りが楽しみなのはわかる。

私は出店より闘技場でのモンスターバトルが気になります。【調教】はダンジョンでも見たことがないし、見せてくれる知人もいないからちよつぴり楽しみである。

どのくらい楽しみかと言うと前日から闘技場のタイムスケジュールを把握するくらいかな？

「おーい！待つニヤそこの白髪頭ー！」

おっと、やっぱり引き留められたか。私が着替えたりパンフレットを準備してたりして時間が掛かったが運命には抗えないらしい。

「酒場の店員さん？」

うんそうだね。彼女のお陰で君はウエイトレスのシルさんとのフラグが立つんだから大切にしなさいよ。

「おはようございます……あの、僕に何か？」

「おはようニヤ。いきなり呼び止めて悪かったニヤ。はい、これ」

いや、原作通りいきなりですね。ベル君キョトンとしてるじゃないですか？

アーニヤさんもやりきった顔しないでください。

「アーニヤ、それでは説明不足です、クラネルさんも困ってます」

「リユーはアホニヤー、【怪物祭】を見に行ったシルに忘れていった財布を届けて欲しいニヤんて話さずとも分かることニヤー！」

だってさベル君、理解できました？

「あ、なるほど。僕は構いませんけど、カメ子さんはどうします？」

ん？私？ 私も大丈夫だよ。

「ニヤ？ あのおつかない子がどうしたのニヤ」

ん？このネコ、私がおつかないカメ子さんだと気がついていないのか？

ハハハ。おとぼけが過ぎますよ。おい、周りをキョロキョロするな、本気だと思われろぞ。

リユーさんもため息をついてるぞ。

仕方がない、肩をツンツンしてこつちを向いたらニコってしてやろう。

(・・▽・) ツンツン

「ん？ 誰ニヤ？」

よし、こつちを向いたな。フルフルニイー！

「ぎニヤ〜!! 出たニヤ〜!!」

ハハハ、ナイスリアクション！

「脅かしすぎですよカメ子さん」

ハハハそんなことないよ。さあベル君シルさんに財布を届けに行

こうか。さつき出掛けたばかりだから直ぐに追い付けるはずだよ。

「おーい！ ベル君ー！ カメ子君ー!!」

ん？このお人好しポイ声は女神様かな？

あ、やっぱりそうだった。背中に怪しげな荷物を背負ってるけど、あれが噂の「ラブ・ダガー」か。

「神様!? どうしてここに!?!」

原作知らない原作主人公は驚いているけど、流れを知っている私は大して驚いていないがな。

「おいおい、君たちに会いたかったからに決まってるじゃないか!」

「いえ、僕も会いたかったですけど……今日までどちらに……」

そーだそーだ。何処に居たかは知っているけど、心配してたんだぞ。

帰って来ないことを知ってるからご飯も用意してなかったけど心配してたんだぞ。帰って来ないことを知ってるから夜はしっかりと鍵閉めてたけど心配してたんだぞ。

毎日八時間寝てたけど心配してたんだぞ。

「いやあ〜！本当にベル君と出くわしちゃうなんて！やっぱりボク達はただならぬ絆で結ばれているんじゃないかなっ!! カメ子君も、

ものすごくかわいい！やっぱりボクの考えは正しかったんだ！」

夜勤明けのテンション怖いなく、私たちの声がまっつっつたく届いてない（汗）

「あの、すごいご機嫌みたいですけど……何が？」

「へへっ知りたいかい？」

分かってますけど、ここは「はい」一択ですね。

「やっぱり今は教えな〜い！お楽しみは後〜！」

徹夜明けのテンション（笑）ベル君もポカーンだよ。

しかも、いきなりデート発言。これにはベル君もタジタジ。

今回は流石に仲間外れにはされなかったが、今回はお断りした。

「え〜何でさ〜カメラ子君はボクとデートしてくれないのか！」

はい、モンスターに襲われたくないので……とは言えない。

女神様、さつきベル君が言ったとおり、私たちは財布を届けて欲しいと頼まれています。

だからここは二手に別れてシルさんを探しましょう。

それで待ち合わせ場所は闘技場にしましょう。

パンフレットに書いてある、この時間に合流して三人でモンスターバトルを観戦して、夜は何処かで食べて帰りましょう。

だからここは二人でデートしてきてください。私は気が利く女なのです。

第十五話 イベントからは逃れられない。

あれからすぐにシルさんを発見した私は預かっていた財布を渡した。

どうやら彼女はちょうど買い物をして財布がないのに気付いたらしく、店の前で涙目になっていた。

そこに私が颯爽と現れ財布を渡すと言うフアインプレーをしたお陰で大きな問題にはされなかった。

だがシルさん、私たちは初対面ではないのだから「どなたか存じませんがありがとうございます。」って言わないでよ。

私だよ、私。みんな大好きカメ子さんだよ。服が違うだけで印象はそんなに変わらないでしょ。

ああ、謝らないで！何かスゴくモヤモヤするから。

噂と違って話しやすい人なんですけどねだって？

え？全然印象が違う？ かわいらしい！

・・・そっか・・・くふふふ

え、恐ろしい顔しているって？

・・・笑顔なんですけど。

確かに私は見た目は闇ギルドの暗黒魔道士みたいで、目もハイライトがなくて死んだような目とか言われてるし、ダンジョンでは回避不可の呪いを振り撒いているけど根はいい子なの

・・・いや、これアカンやつや。

いや、まてよ！ ここで誤解を解いたらこの世界初のお友達をゲット出来るかもしれない。

慎重に言葉を選ぶんだ私。ここが運命の分かれ道だ、私は誤解されやすいから変に言葉を飾らずストレートに行こうか。

「大丈夫。私は怖くない。ただ、私の平穩を乱すヤツは・・・呪う」
相手の目を見て真剣な顔して言ってやった。

どうだ、正解か！

シルさんは怯えた表情で一步下がった。

あ、これ失敗したパターンや。

バカな！何処に失敗する要素があつたと言うのだ！態度も表情も言葉も適切なはずだ！

く、ここは戦略的一時撤退だ。

それではシルさん、また近いうちにご飯食べにいきますからね。
じゃさらだばー

出店で買い物をしているシル・フローヴァは困った状況に追い込まれていた。

「なあ、姉ちゃんよ。冷やかしなら余所に行きなよ」

「ちよ、ちよつと待つてください！・・・確かに鞆にいれたはずなのに・・・」

鞆の中をガサゴソ探すが財布は見つからない。

出店の親父さんもイライラしてきたのか顔が険しくなり、後ろに並んでるお客様からの視線も痛い。

ああ、どうしよう。と焦っていると隣から財布が現れた。

「忘れ物、届けに来た。」

助かった。そう思った彼女は手早くお会計を済ませて、財布を届けに来た恩人に向かい合う。

「どなたか存じませんがありがとうございます。あ、私シル・フロヴァと言います。」

「・・・知ってる・・・会ったことある」

「え？」

「私、カメ子。お店に誘われた。」

「え？ え〜！」

普段の怪しげな格好とはまるで違う出で立ちだが、よくよく見れば特徴的な髪の色、何の感情も読み取れない目

「ご、ごめんなさい！あまりにも普段の格好と違ってたから、つい」

「い」

あまり表情や態度に変化はないように見えるが、よくよく観察してみれば、多少拗ねてるようにもみえる。

「今日の格好とてもかわいらしいですね。」

話題を変える為とはいえ少し露骨すぎたかな、思ったが

「くふふふふ」

彼女はそんなことには気付かないのかスカートの端をいじりながら小さく笑っていた。しかし。

「顔が怖い」

如何にも悪役がするような笑顔について本音が出てしまった。しかし、彼女は気にしている様子はなかった。

その姿を見て噂は所詮噂に過ぎないのかと考えていたが、次の瞬間に彼女の雰囲気は一変した。

「大丈夫。私は怖くない。ただ、私の平穏を乱すヤツは・・・呪う」

そう言った彼女は先程の穏やかなものではなかった。

感情が全く読み取れない能面の様な顔。

こちらを見つめる瞳は全く熱が感じられない。

あまりの変わり様に自然と一步後ろに下がってしまう。

そんなシル・フロヴァの姿を寂しそうに見つめる彼女は「また、ご飯、食べに行く」

そう言い残して走っていった。

残されたシル・フローヴァはカメ子という人物は噂通りの人か、それとも違うのかが判らなくなっていた。

ふう、思ったより簡単に用事がすんでしまった。

そして、すべてが終わった・・・

やはり私だけではお友達をゲットするのは難しいのかなあ。

ベル君とか女神様をクッションにしないと私の苦惱は解消されないのか。

闘技場に到着したが約束の時間まであと一時間以上はある。

しかし、危険を回避すべく女神様とベル君から離れたけど時間が経てば経つほど・・・罪悪感がヤバイ！

今の私は自身の安全のために主神と家族を売り渡した最低野郎である。

しかし、このイベントはベル君の大切なパワーアップイベントであ

り、女神ヘステイアルートのフラグでもあり、女神フレイヤルートのフラグでもあり、シル・フローヴァルートのフラグでもあり、本命のアイズルートのフラグでもある。

そんな序盤のフラグを私が「畏れよ・我を」して台無しにしたら、ベル君なんてお詫びをしたらいいのだろう。

ここで頑張ってもらわないとベル君に残されているヒロインは……ひい、ふう、みい、よう

……あれ、けっこういっぱい残っている？

ええい！ ハーレム型主人公のヒロインは底無しか!?

しかし、周りがイヤに騒がしいな。どうせ原作通りモンスターが逃げたしたのだろう。

武装した人達が闘技場の周りにいる人たちを避難させ始めていた。流星は民衆の神ガネーシャ様だ。神としてのプライドより人々の安全を考えてる。

「そのキミー……ここは危険だ 私と共に来なさい！」

おお、対応が早い。だが、狙われているのはうちのファミリアの男の子だから私たちには関係無いけど。

特に問題ないので私はいいです。

「何を言っているんだ！ いいから来なさい！」

ちよつと強引に手を掴まれてしまった。どうやらこの青年は私を無理やり避難させる気だろう。

だが私はモンスターに襲われないという確固たる自信がある。

ついでに待ち合わせ場所から動きたくないという気持ちもある。

「くっ!!.. もうここまで来たのか！」

何か私が駄々こねてたらモンスターが現れ、私を避難誘導に来た青年は逃げ切れないと思ったようで私を掴んでた手を離し、背中of剣に手をかけた。

どうやらこの青年はそこまで強くはないようだ。青年の手は震えており、顔は青白くなっていた。

しかしそんなことはどうでもいい！

ついに私にも恋愛イベントの神が舞い降りたのだ！

儂げな少女を助けるために実力以上の敵に立ち向かう！

ベタでありがちな展開だが私は大満足です。

神様ありがとうございます！

背格好から多分年上、顔は渋くも甘くもないがイケメン。

ちやんと私をモンスターから庇うように立つ姿もプラス要因。

いいよね、このままラブコメ時空に突入しても。

ベル君も女神様もラブコメしてるんだから私も便乗してもいいよね、いや、誰が何と言おうと私はこの青年とキャットウフフな関係になつてやる。

「ぐわああ!!」

ああ!? ちよつとトリップしてたらダーリン(仮)がモンスターに殴られて吹き飛んでいった!

おのれモンスターめ!勘違いばかりされて不幸ばかりの私にやつとめぐってきたチャンスを潰すなんて・・・許さんぞ

「キ、キミだけでも、に、逃げるんだ。」

おお、そんなにボロボロになつても私の心配をしてくれるなんて、まるでマンガのヒロインになった気分だよ。

でも大丈夫、私もボウケンシヤーの端くれ、こんなピンチは慣れっこさ。

さて、このモンスターは女神フレイヤ様の魅了をうけた個体だったっけ?

それとも女神様を襲っている個体のみが魅了されていたんだっけ?

まあ、どっちでもいいや・・・【畏れよ、我を】

ガアガアガアガア!!!!!!??

くふふふ。モンスターの恐怖に歪んだ顔はダンジョンでも街でも変わらないなあ(ご満悦)

だが、このままだと逃げられる恐れがあるから、すぐにとどめをさす。

【命ず、自ら滅せよ】

・・・うぶ、グロい、吐きそう、血生臭い。

ああ、血が撒き散らされて周りに汚れが！

だが安心してほしい、この青年が落とした剣を持ちましてまだピクピク動いてるモンスター胸部をグサグサ。

よし、魔石を破壊したお陰でグロ死体からゴミの山になった

さて、この剣をあつ青年に返しますか。

そして始まるベル君にも負けないラブストーリー。

はいどーぞ（精一杯の笑顔）

「ひ、ひい!!た、助け」

なんか知らないうちにフラグが消滅してた。

解せぬ。

あれ？ 何か周りの雰囲気も暗いね。私、勇敢にモンスターと戦ったよね？

あれか、私の魔法が主要メンバーの人達より地味だから私の魔法の凄さが分かりづらかったのかな。

うーん、どうしようこの空気・・・よし、変なこと言つて余計な勘違いされても困るから、私、カメ子はクールに去るぜ。

第十六話

お買い物？

いえ私に必要ないません。

ダンジョンの地下七階層には魔物が潜む。

いや、ダンジョンなのだから魔物が潜むのは当たり前だが、この階層には新米殺しの異名をもつキラーアントがわんさか出てくる。

このモンスターの厄介なところは時間を与えれば与えるほど仲間を呼び、数の暴力をもつて冒険者を襲うのだ。

しかもこのアリ、一体一体が割と固くて強いのだ。

そんな新米殺し十数体にベル・クラネルは追い回されていた。

しかし彼の顔には焦りも恐怖も浮かんでいない、寧ろ新米殺しがちゃんと自分を追いかけて来ているかを確認する余裕すらあった。

そしてある角を曲がると一人の少女、ベル・クラネルの先輩冒険者カメ子の姿があった。

彼女を確認すると足を止め、腰に帯刀しているナイフを手に持ちモンスターを待ち構える。

軽く呼吸を整えている間にモンスターが押し寄せてきた。

「畏れよ、我を」

ガギガギガギガギ!!

その一言で殺気だっていたモンスターの群れは恐慌状態に陥り統率を失い右往左往し始めた。

「今だ！」

ベル・クラネルはその隙を見逃さずモンスターの群れに突っ込んでいき、縦横無尽にモンスターを狩り始める。

キラーアントも殺られてばかりではない、恐怖に駆られながらもベル・クラネルに攻撃を繰り返す個体もいたがそんなやぶれかぶれの攻撃を受けるほど彼は弱くはなかった、逆に大振りの攻撃を回避しながら空きの首を一刀両断する。

ベルがモンスターを刈ると同時に何体かのキラーアントが何故

か同士討ちを始め、最早この集団に明日は来ないだろう。

いやー、キラアアントは強敵でしたね。

しかし、私達「ヘステティア・ファミリア」の敵ではなかった。

と言うか、集団で襲いかかって来るなんて「畏れよ、我を」で一網打尽にしてくださいって、言ってる様なものだからね。

しかも、ベル君も無事にパワーアップイベントを消化したから新人にあるまじき強さを発揮している。

あのアリ、割と固いんだよ。

私の力じゃアリの甲殻を砕いて魔石をほじくりだすのも一苦労なのに、ナイフ一本であんなにスパスパと切り裂いて・・・あれ？もしかして、私ベル君の成長についていけない？

一年以上も先からダンジョン潜って戦っていたのに、もう強さインフレに置いてかれてる？

まあ、私は別に転生特典で俺TUEEEEしたい訳じゃないし、ダンジョンで未知を発見したり心踊る冒険がしたいだけだから強さとかは別にどうでもいいし、まあそんな言い訳じみた妄想はストツプさせて現実を直視しますか。

「私がいったこと全っ然っわかってないじゃない!! 七階層!? 迂闊にもほどがあるよ!」

我らの担当のエイナさんがガチギレなさってる。

まあ、これは新人のくせに下層に降りたがるベル君が全面的に悪いんだからガチギレされてもしょうがないよ。

「カメ子ちゃんも私には関係ないって顔してるけど、私はキミにも

怒っているんだよ!!」

「フア!! なな、なんですと! この一流ボウケンシャーである私が何故?

お言葉ですけど、私はダンジョン攻略に手は抜いていないし、適切なアイテムに適切な装備品を毎回準備してるし、HP管理も欠かしてません。

「一週間ちよつと前、ミノタウロスに殺されかけたのは一体誰だったかな!？」

「ん、ベル君ですけど。私はキチンと狩れましたからもーまんたいですよね?」

「そう、ベル君だよ。普通は新人が危ない目に遭わないため先輩冒険者がキチンとリードしてあげないといけないんだよ。それなのにカメ子ちゃんはベル君に注意するのでもなく、どんどん奥に連れ込んで、五階層からはダンジョンの傾向が様変わりして難易度が増すんだよ...冒険者になって半月程度の未熟なヒヨコじゃ自殺行為なの!」

「おお、そうか。私つてばベル君の事は物語の主人公つて感じて見てたけど、他の人から見たらベル君つてまだ新人なんだよね。」

「そんな新米の無謀な下層潜りを咎めるどころか、嬉々として下層に誘う先輩冒険者の私。」

「うん、これは誉められる行為ではないですね。」

「カメ子ちゃん反省しました、これからはベル君に合ったダンジョン攻略を心がけます。」

「あ、でも、それだったら攻略はもう少しハイペースでも問題ないよね。」

「あ、あの、そのつ、僕、あれから結構成長したんです、だからカメ子さんの指示は間違つてないと言うか!」

「おや、私が内心反省してたらベル君が激おこ状態のエイナさんに反論し始めたぞ。」

「冒険者になって半月、アビリティ評価Hがやつとのくせにどの口が言うのかな?」

「ほ、本当なんです! 僕のステイタスのいくつかはEまで上がった

「なんです!？」

「まあ、この子だったらファミリアの機密を何だと思ってるのかしら？」

「……E」

「おや、そんなに目を丸くしたエイナさんを見たのは初めてかもしれないな。」

「いや、私一人で冒険してた時からこんな顔よくしてたわ。」

「そ、そんなの出任せでしょ」

「本当です本当なんです! 最近成長期みたいで伸びが凄いんです!」

「……本当に?」

「おや、こちらに視線を向けたと言うことは本当かどうかの確認かな、まあ本当だしここは頷いておきますか。」

「ベル君……。キミの背中に刻まれているステイタス、私にも見せてくれない?」

「……えっ?」

「え? 何で?」

「あつ、君たちのことを信じてないわけじゃないよ? ただどうしても気になるから……」

「で、でも、『ステイタス』って、一番バラしちゃいけないんじゃない?」

「誰にも話さないと約束する。魔法やスキルのスロットは見ないから! ね? お願いっ!」

「エイナさんがそこまで言うなら……えっと、じゃあ部屋の隅で……脱ぎますよ?」

頬を赤らめながら言うんじゃない、エイナさんも顔を赤らめながら困っているじゃない。

「まあ、ベル君私は先に帰るからあまり遅くならないようにね。」

「え? 先に帰るんですか!」

「うん、私まだ帰ってやる必要があるからね。」

「詳しく言うと、お洗濯物の取り込みにお風呂の準備に夕食の準備に……ああ、今日の収入も家計簿に書かなくちゃ。」

「……カメ子ちゃん、貴女、そんなことまでしているの」

「何言ってるんですエイナさん。これくらいの事出来なくてはボウ

ケンシヤーとはとてもいえませんよ、じゃ私はこの辺で…お疲れさま
でした。

「ベル君」

「な、なんでしょうっ?」

「あんまりカメ子ちゃんに負担かけちゃだめだよ」

「…はい」

「カメ子さん、明日暇ですか?」

帰って来るなり何ですか、帰ってきたらただいまでしょ、それから
手洗い、うがいに洗濯物を出す。

「あ、はい…じゃなくてー!」

ええ、わかってますよ。たしか原作ではステイタスを見せた翌日は
買い物イベントがありましたね。

で、エイナさんはベル君だけではなくて私にも声をかけたんですね。

はい、本音を言うともんどくさい。誘われたからといってホイホイついていくとベル君の装備を新調するついでに私の装備も新調されそう。

いや、エイナさんは私の「カースメーカーなりきりセット」に否定的だから、ここぞと言わんばかりに装備の変更を勧めて来るだろう。ついでにベル君も女神様も否定派だから私を援護してはくれないだろう。

いや、私も鈍感ではないから、この装備が世間から評判がよくないのは分かっているのだから…せっかく「カースメーカー♀」に転生したのに服を普通にするなんてなんか嫌だし。

これは世間との軋轢を和らげるのか自分を貫くのかの心の問題！

「あ、あの、カメ子さん？」

あ、ベル君に返事するの忘れてた。ええ、暇ですよ何か用があるんですか（棒読）

「付き合って下さい！」

ワオオ、流石は天然タラシのハーレム型主人公。主語が全くないから愛の告白同然になってるよ。

だか残念だな、私くらいの転生者になるとそんな言葉では心は動かないのだ。

主語が抜けてるから何に付き合えばいいのかわからないよ。

そう指摘してあげたらちゃんとエイナさんに明日私をつれて来るように頼まれたらいいので付き合ってあげることにした。

ベル君とエイナさんとの集合場所に行くと思服姿の彼女が待っていた。

うん、ギルドの制服姿も可愛かったが私服姿はもっと可愛かった。

…それに比べて私ときたら、何時もの「カースメーカーなりきりセツト」

いや、特に女の子として負けたとか、おしやれしてきたほうが良かったかなとかは思わないが、なんかエイナさんが私の格好を見た時、一瞬悲しい顔になってたので、またいらん誤解を与えてしまったようだ。

今日の目的地も判っているから特にエイナさんやベル君とも話さず後を付いていくと、やはり目的地は摩天楼バベルのようだ。

「ええっ!?バベルって冒険者用施設や公共施設だけがあるだけじゃ…」

いやいや、最初のころ説明してあげたじゃないか。ベル君のナイフもこのバベルにある「ヘファイストス・ファミリア」で作られたモノなんだよ。

原作では今ごろ女神様がアルバイトにせいを出している最中かな？

一応、お弁当とかお菓子を女神様に渡したから原作よりは元気に働いてるかな？

「さあ行くよベル君」

おっと、女神様のことを考えてたらベル君とエイナさんが仲良くお手々繋いで歩き始めた。

おお、原作通り周りからすごい嫉妬ばわーを感じる。

「エイナさん！ててっ手を離してください…」

「カメ子ちゃんもボーとしてないで行くよ」

はい。しかし、ベル君もハーレム型主人公っていつでも女慣れしてないのに美人さんと手を繋いで歩くのは難儀だろう。

よし！私が一肌脱いでやろう！

まず、目深く被ったフードを脱ぎまして素顔をさらします。

そして、こちらに助けを求めるように手を伸ばすベル君の手をきゅつと繋いであげます。

これでベル君は右手にエイナさん、左手にカメ子ちゃん。と言う状態。

普通なら両手に花の状態だが私の評判は何故か最悪レベル。

これならいくら美人のエイナさんと手を繋いでいたとしても私と言うマイナスが横にいるから差し引きゼロ。

これでベル君に要らぬヘイトは集まらないはずだ。

「チッ!!」

あれ、なんかヘイトがさつきより増したんですけど。どーしてだ？

第十七話

あれ？私何か間違えた気がする。

原作通り「ヘファイストス・ファミリア」の商業施設には女神ヘステイア様がアルバイトに精を出しておりました。

「神様何でこんなところに居るんですか!？」

まあ、ベル君は女神様がアルバイトしている理由を知るのはかなり後の方だしビツクリするのはわかるよ。

だけどね、お店のなかでは静かにしましょうね。

「あ、はい…じゃなくて！神様は恥も外聞も捨てちゃダメです！いいからほら帰りましょう!？」

ナイフの借金返済ですね解ります。あ、神様、今晚のご飯は魚で良いですか？

「あ、それでいいよ。じゃなくて！ええい離せベル君！神にはやらなくちやいけない時があるんだ!!」

『コラアツ!!遊んでんじやないぞ新人が!!』

上司様の大声が響いた瞬間女神様はベル君の手を振り払って声の方に走って行った。

「かみさまく……」

まあまあ、今無理して聞くより今晚の夕食の時にでも聞いてみましょうよ。

女神様は眷族がない間はヘファイストス様のお世話になってたみたいだからその関係かも知れないしね。

「お見苦しいところを見せてすいません…」

ベル君がエイナさんに頭を下げたから私も一応下げといた。

さて、そんな茶番劇を終わりにして上の階に行きますか。

実は一年近くこの街で暮らしてるけど上の階層の新人鍛冶師コーナーって行ったことがないんだよね。

理由？今だに「カースメーカーなりきりセット」を愛用するほどの拘りがあるからかな？

「ベル君手持ちのお金は？」

「えっと、カメ子さん」

ハイハイ、お昼ご飯代のことも考えて持つてきたから20000
ヴアリスあるよ。

「え？カメ子ちゃん、貴女の武具代は？」

え？必要ないけど。だって私は「カースメーカーなりきセット」が
標準装備だし。

「…じゃあベル君、中には掘り出し物もあったりするし、ここは手分け
して探そう！」

オオー、じゃ、私は向こうの方を……

「カメ子ちゃんは私とマントやクロースのコーナーに行きましょう
ね」

両肩を掴まれてとても良い笑顔のエイナさんを振り払うなんて私
にはできないなー。

あれからのくらの時間が経過したのだろう。

「うーん、こっちのマントは少しカメ子ちゃんには大きいかな？」

もう何着目か分からないほど試着を繰り返したが未だに購入する
ほど気に入った物はなかった。

と言うか着せ替え人形にされるのに飽きた。

だが日頃から私のことを心配してくれているエイナさんを少しで
も安心させてあげる為にも何か購入してしばらく着てあげないとい

けないよね。

まあ、今着ているマントと同系統の物を数点購入して終わりにしますか。

エイナさんこれにしましたからベル君と合流しましょう。

うん、エイナさんも私がちゃんとお買い物をしたから少しホっとしてるみたいだし、いい買い物したな私。

……あ、ベル君も意外に近くにいたんだね。

木箱の前で何かニヤニヤしてるけど気に入った物を見つけられただけで何よりですね。

じゃ、お会計にいけますか。

「いつ19000ヴァリスかー… 高い買い物になっちゃいましたね」

うん、まさかマント三着でベル君の鎧とどっこいどっこいだつたなんて……耐久性もデザインも神様から貰った物より数段落ちるのに何で三着も買ったんだ私？

まあ、原作よりかはお金に余裕があるし、普段使いにしますか。

「ん、あれ？ エイナさんは…？」

君のために籠手を購入していますよ。なんて言えないから、「さあ、知らない」って感じに首を傾げて惚けてみますか。

ベル君も私が知らないかと判ると周りをキョロキョロし始めた。

……うん、男のくせに可愛い。これはお姉さまがたから可愛がられるのが判る気がする。

まあ、私の趣味ではありませんがね。

「ごめん二人ともお待ちせつ」

お、そうこうしてる間にエイナさんが小走りでこちらに来た。

もちろんその手には籠手がありました。

良かったねベル君、エイナさんルートのフラグがまた一つ立ったよ。

おーおー、ベル君ったら、驚いたり、落ち込んだり、真剣な顔したり、年上のお姉さんの可愛らしい仕草に顔を真っ赤にして照れたり、端から見てる分にはとても面白いです。

ん、エイナさん？ 鞆から取り出したその箱は何ですか？ こんなの原作ではありませんよ？

「カメ子ちゃん、はい、これ」

あ、はい……じゃなくて！ 何これ私なんかしました？

「いいから、開けてみなさい」

はい。ガサゴソガサゴソと……櫛ですか、しかし、この櫛、何やら良い香りがしますね。

「その櫛はね、今女の子の間で話題の香木で作られた櫛なの」

ホヘー、そんなのこの街にあったんだ。確かに私が今使ってる一山幾らの櫛とは手触りも香りも段違いに良いですね。

「冒険者である前にカメ子ちゃんも女の子なんだから、髪くらい鋤きなさい」

はい。いや〜これは凄く良いものを貰っちゃた！

ベル君みたいな実用品も良いけど、こういううちよつとお高めの生活用品も貰うとテンションが上がりますなあ。

お店の前ですけど、ちよつとフードを脱ぎまして、髪の毛をサツサツと……うわお。今まで使っていたのか如何に安物かがわかるよ。

物凄く髪をとかしやすいし、動かす度に良い香りがする。

本当に、本当にありがとうございます！

ふう、ちよつと遅くなりましたが無事にお買い物イベントが終了しました。

これによりベル君の武具が充実して戦力アップ。

これによりダンジョン攻略の効率がアップ。

つまり、稼ぎも良くなり今後の生活も良くなってくる。

だがここで油断は大敵だ！

世界樹の迷宮なら、ここらで油断しきつたボウケンシャーを理不尽な初見殺しが襲ってくる頃合いだ。

と言うか、そろそろ次のヒロイン加入イベントが始まる頃合いだから、私もしつかり準備しなくちゃ。

と言っても私、準備する必要ないんですけどね。

まあ、次のヒロインはかなり警戒心が強いから、私が無害な薄幸美少女と言うのをしつかりアピールする必要があるかも知れない。

「ちよつと遅くなっちゃいましたね」

うん、確かに。早く帰らないとお夕飯が遅くなっちゃうね。

しかし、けっこう走ったけどまだニューヒロインとエンカウントしないな？

これって私がいるせいでバタフライエフェクトでも起こってしまったのか？

いや、私の心配なんて恐らく杞憂に終わるだろう、ベル君の女運の良さは運命レベルでヒロインを引き寄せるからね。

「えっ?」

「あうっ!」

ほらやっぱり、曲がり角でぶつかるとバタバタな出会いがやって来たな。

「すいません……大丈夫ですか?」

転んだ女の子に手を差し出すベル君。その隙に私は二人から距離を取り、これから起こるであろうイベントのために静観することにした。

少し薄情な気もするが、私は知る人ぞ知る悪名高き女。あの警戒心の強い小人族バルウムの少女が私に警戒してベル君に近付かなくなったら原作の流れが壊れちゃうからね。

まあ、壊れたら壊れたらでベル君にはハーレム系主人公から一途系主人公にジョブチェンジしてもらえばいいしね。

「追いついたぞ teme エツ!!」

おや、マンガやアニメではなかなか来なかったように思ったけど、現実では思ったより早く現れましたね。

「この糞小人族が……もう逃がさねえからな!……そこを動くんじゃないぞッ!!」

お決まりの台詞と共に倒れてる少女に掴み掛かろうとする男……

「……ああ? ナンの真似だ?」

だがしかし我らのベル君は少女を守るように男の前に立ちはだかった。

私? 私は画面からフレームアウトしてこの茶番を見守っていますよ? 個人的にはポップコーンにジュースが欲しいところです。

立ち塞がるベル君に男は苛立ちを隠そうとしてみませんね。しかも助けに入った理由が女の子だから……うわお、冷静に聞いてみると本当に何言ってるのベル君。もつと……こう……あるでしょ。男が暴力

を振るいそうだったとか、女の子が怯えてるとか、それっぽい理由はたくさんあるでしょ。

おおっと！ 男が背中中の剣を抜きました。どうやら意味わかんない理由で女の子を守るベル君をボコボコにしてから女の子を捕まえるつもりでしょうね。

対するベル君も腰のナイフを引き抜き、荷物を放り投げました。てっ!! その鞆のなかには私の櫛が入ってるんだよ！ 投げたショックで壊れたらどうしてくれるの！

あれ？ そういえば……リユーさんてどのタイミングでここにくるんだろう？

お互いに武器を構えてるんだからもう近くにいなければならないのに全然気配を感じない。

試しに周りをキョロキョロ見回したが人影すらない……だと？

えっ？ こんな所でバタフライエフェクトつか？

いや待てまだ慌てる時間じゃない。今までだってなんやかんやで原作の流れは変わらなかつたんだから、今回も大丈夫ですよね（汗）散々キョロキョロ見回したがやっぱり人影はなかった。

アア!! 対人戦経験皆無なベル君の足の震えが男にばれたらしく、男がニヤリと笑っていやがる！

もう時間的に間に合わない！ こうなったら私がリユーさんの代わりをするしかない。頭真っ白だけどハツタリで誤魔化すしかない！

——止める。

出来るだけ動揺してるのが分からないように機械的に無感情に二人に声をかけた。

男が一步踏み込み剣を振りかぶったタイミングで声をかけたお陰で男は剣を止め私の方に向き直った。

「次から次にと…!!? 今度は何だ!?!」

まあ、怖い顔ですこと……すいません、私嘘つきました。男が凄く威嚇してきますけど、まっつったく恐れという感情は湧いてきません。

そんなことはさておき。えくと、次のセリフセリフ……。

その子（ベル君）は私のだ 手出しは許さない…。

「クソツ次から次へと邪魔が入りやがる!! テメエもまとめてブツ殺されてえのか!!」

ハイハイ（笑）、たしか次はあの男を脅してうやむやにするんだつたよね。

うん、私脅すのは得意。これでリユーさんの代わりも終われる、後は原作通りになることを願おう。

……では【**畏れよ、我を**】

「アア!!アアアアアア?!?!」

よし、原作通り男は**怯**えて腰を抜かしたぞ。

ふふふ、相手を怖がらせる演技なんてしたことなかったけど、なんだよけっこうやれるじゃない私。

あの少女もウマく逃げたみたいだし、今回は大成功だな。

……あれ?あの男何時になったら逃げてくんだろう?

頭を押さえながら亀みたいにうずくまっちゃって変な奇声まであげ始めたぞ。

はあ、上手く行っただと思っただのに最後の最後でポカしちゃった。

しょうがない、軽くダメージを与えて正気を取り戻させますか。

そう思った私は腰のナイフを引き抜き男に近付こうとした………が…。

「もう勝負はつきました。これ以上貴女の手を汚す必要はありませんよ」

何処からともなく現れたリユーさんにナイフを持つ手を優しく握られていた。

その顔はどこか悲しそうだった……。

第十八話

サポーター？是非仲間に欲しいです。

いやー、昨日は散々な目に遭いましたね。

まさか来ないと思ってたリユーさんが私の目覚まし攻撃を止めるなんてね。

なんか凄く優しく手を握られて諭されたの。

その後もベル君にも手を握られて僕は大丈夫ですから的なることを言ってたの。

そこまで言われたら、どんな鈍感だつて気づきますって、私の善意の行動がとどめを刺す行為に見えたんですよね。

私って周りからそんなに好戦的な子に思われていたんだろうか？

ここで黙って領けばいいのに私ったら……ナイフがダメなら【命ず、自ら滅せよ】をするよ……なんて口走ってしまった。

お陰で、リユーさんからは「貴女はもう少し人の心を知るべきです」と真面目な顔で諭された。

失礼な、私ほど人の心を尊重してる子はいませんよ。

て、言ったら「なら、常識が足りませんね」と返された。

…散々やらかしてきたから、それについてはぐうの音もでねえ（汗

ベル君からは「もう少し他人に優しくできませんか？」と懇願されてしまった。

違います！ 誤解なんです！ 私はただ親切心で行動しただけなの！

とどめを刺すのが親切心？ うるせー【畏れよ、我を】すんぞ！

リユーさんが心配するようなサイコパスでもなければ、ベル君が思うほど他人に興味がないわけでもないのよ！

ただ、ちよつと間が悪かつただけなの！ ベル君！ 普段の私を見てたら、私がそんな酷いことする子じゃないってわかるでしょ。

そんな風に脳内で言い訳を考えているうちに、リユーさんは「彼女、世間の常識に疎いようなのでよく見ていてくださいね」って言って、ベル君も笑顔で「はい、任せてください！」って言った。

ちよつと待っててください！私を置いてストーリーを進めないでください！

私に対して何やら意味深な伏線を張らないでください！ 色々誤解されてますけど、私はこの世界に神様転生してきたチート持ちの一般人ですからね。

暗くて、重くて、胸糞な過去もなくクリーンな人生を歩んできましたから。

ちよつと趣味（カースメーカー♀のコスプレ）に関して意固地になつてますけど、私の精神はまつつつたく病んでません。

だからそんな慈愛の目で見つめないでください。

帰宅後、ベル君から私の過剰防衛事件を聞いた女神様に無茶苦茶泣かれながら説教されたが、でもベル君を守ったことに関しては褒めてくれて頭をナデナデしてもらった。

追伸、なんとかナイフでの件は釈明できた（誤解が解けたとは言つてない）

さあ、新しい朝がきました。

ベル君は新しい装備を身につけ、鏡に映った自分の姿にニヤニヤしてる。

今日からまた新しいイベントが盛りだくさんに始まるから私も気合を入れて冒険の装備を準備しましたよ。

尤も、私と言う大型地雷のせいで次のヒロインイベントはなかったことになる可能性があるがな。

いや、今回の件は本当にごめんなさい。もしこのままヒロインイベントが起きなかつたら、責任をもって新しいヒロインを探して来ますから。

一瞬、私が代わりにヒロインポジに収まることも考えたが……ごめんねベル君。何回考えてもハーレム型主人公は見てるぶんは楽しいけど、恋人としてはノーサンキューなの。最低でもレントンくらい一途じゃないと嫌なんだ。

「お待たせしました。カメ子さん」

おや、私が世界の未来について考えているうちにベル君の準備が整ったようだ。

「あの、カメ子さん。昨日買った服は着ないんですか？」

ああ、アレ。ぶつちやけ神様から貰った初期装備以下の守備力しかないから、ダンジョンに着ていたら逆に怪我しちゃうよ、だから普段着に使う事にしたんだよ。

「……そうですか」

ん？ベル君のお顔が苦笑いをしてるぞ。

なんかまた辺な誤解が発生した気がする。ま、いいや。散々誤解さ

れてるし、この程度誤差だよ、誤差。

じゃ、女神様、私たちはダンジョンに行つて来ますから、目が覚めたら机の上に置いてあるご飯を食べてくださいね、あとお弁当も用意してますからバイトに行くときに持つて行つてくださいね。それから、出掛けるときは戸締まりすること、私たちはスペアキーを持つてますから気にしないでください。えくと、晩ご飯についてですけど……

「ンベツ……はい、いつてら……」○——*）Z z z

寝惚けながら返事をする女神様に半ば苦笑いを浮かべながらベル君と共にダンジョンに向かう私であった。

「さあ、今日も頑張ろうー！」

そう言いながら元気にダンジョンに向かうベル君。私はなるべく目立たないように後ろをついて行く。

ああ、原作通りなら、そろそろなんだけど、流石に今回は無理か………はあく憂鬱な気分だ。

「お兄さん、お兄さん。白い髪のお兄さん！」
「ん？」

なんてことはなかったぜー！やっぱリベル君は世界に愛されていますね！ご都合主義万歳！なんか知んないけど成し遂げたぜー！

だが、まだ安心は出来ない。せつかくエンカウトしたのに、私の

せいで仲間フラグが立たなかつたら目も当てられない、ここはどびきの笑顔で彼女の警戒心を和らげよう。

女神様曰く「まあ、最初の頃よりは良いと思う…よ?」って言うてくれたし、皆がどん引くマジキチスマイルは無事卒業出来たわ。

よし。おーい、二人で盛り上がってないで私も仲間に入れてよ(スマイル)

「うひゃあああああ!?!」

女神様の嘘つきー。しつかりビビッてらっしやるじゃないですか!

あ、いや、背後からいきなり声を掛けたせいである可能性が……

「きゅ、急に声をかけないでください。びっくりしてしまいます!」

よし!セーフ。さて、ベル君、離れて聞いていたけど、その子はサポーターなんでしょ? 私は是非仲間に加えたいよ(にこやかスマイル)

ベンチに座りながら彼女:リリルカ・アーデとお話するベル君……と少し離れて立ち聞きする私。

これは別に二人にハブられている、とかではなく、私の善意の行動である。

何の善意かって？ 少しでも世界の流れを正常にしようという私の努力だよ。

別に原作は原作、この世界はこの世界で分けて考えても良いが…原作通りに進まないでベル君が不幸な人を救えないから、最低でもあと一、二年は世界の流れを変えないようにしようと思っただからだ。

どうやらベル君はリリルカ・アーデが犬シアンスロープ人と分かり昨日に会った少女とは別人と信じてしまったようだ。

うん、顔も髪型も服も昨日の少女と瓜二つだな。正直、もっと頑張つて変装しろよと言いたいがスルーしよう。

「それで、お兄さんどうでしょう。リリを雇ってもらえませんか？」
おっと、二人の話も佳境にはいったようだし私も傍観者から関係者に戻りますかな。

二人の前にまで移動するとベル君は「もく何処に行つてたんですか」と言い、リリさんはビクツ、と一瞬間を震わせたがすぐに人当たりの良い笑顔に戻った。

まあ、雇うのは決定してるけど、取り敢えず当たり前の事を聞いておきますか。

『サポーターなら…私の事を知らないはずはないよね？ …何で声を掛けたの？』

「…確かにリリの耳にもお姉さんの噂は入ってきてます…」
やっぱりね（涙） どんなに歪曲された噂かは聞きたくないのですルーしよう。

こら、ベル君、私の噂を想像して暗い顔をするのはやめなさい。私まで泣きそうになる。

「…でも、お姉さんはよくギルドの掲示板に仲間募集の張り紙をしてみました…」

お、ここで私のボツチ時代の産物が出てくるとは、ダメ元でもやつててよかったよ（参加者0）

「…だから、噂ほど恐ろしい人ではないと思つてお姉さんのお仲間であるお兄さんに声を掛けました…リリはこんなに小さいですし、腕っぷしもからつきですけど…リリを雇ってもらえませんか？」

うん、可愛い。この後すぐにベル君のナイフ پاکるけど可愛いからいいや。

ベル君、この子雇うから。絶対雇う。リリルカ・アーデさん、私カメ子コンゴトモヨロシク。

第十九話 迷宮に潜む罫？ 私は知ってるけどね。

ダンジョンにやって来ました。いや、サポーターって本当に便利！

ボウケンシャーである私はダンジョンに潜ったら取り敢えず採取、採伐、採掘を可能な限り行い、すぐにリュックサックを一杯にしてしまっただけ、今回からはリルカさんが加わったことでアイテム所持制限が増えたことで、何時もなら捨ててしまう低価値アイテムもバンバンリュックサックに詰め込んでいます。

無論モンスターの魔石やドロップアイテムも根こそぎ積めています。この後のイベント（ナイフ盗難）はベル君に解決してもらおう必要があるから、私はその間にアイテムの換金でもして暇を潰す気にいるから何時もより多めに取らないとね。

そして何時もより実りが良い状態でイベントが起こる地下七階層までやって来ました。

ベル君も七階層に来るのは二回目なので少し緊張してるかな？

あ、いや全く緊張してへんがな、それどころか新装備を試したくてウズウズしていますね。

それもそのはず、ここに来るまでのモンスターは私が全て「畏れよ、我を」からの「命ず、輩を喰らえ」に「命ず、自ら滅せよ」しちやつたせいで全然活躍出来てないもんね。

ごめんねベル君、でもこれは必要なことなんだ。今一緒にいるリルカさんに私の魔法に早くなれてもらう必要があるあったんだ。

何故なら、私の魔法は初見さんにはちよっぴり刺激がキツイみたいで、すぐに私の事を悪者にするのです。

なので一階層からリルカさんにはたっつっつぱり私の魔法の凄さを堪能してもらいました。

ベル君は私の魔法に慣れたもので、「カメ子さん、今日は張り切ってますね。」なんて普通に声をかけてくれたがリリルカさんは表面上は「うわ〜 流石はカメ子さんお強いです!」なんて言ってたが……お前顔中汗まみれだからな。いっさい動揺なんてしてませんよ、って顔してるけど笑顔ひきつつてるぞ。

まあ、我らが主人公ベル君はそんなリリルカさんの変化なんて全く気づいていないようで「よし、次いきましよう」と意気揚々にダンジョンを進んでいく。

「やっぱり止めとけばよかった……」

なんて呟きが聞こえてきたがあえて聞こえないふりをする。

と言うか、私たちに関わった以上、キミのヒロインイベントを完遂するまでは絶対に逃がさないからね。

大丈夫、怖がることはないんだよ。私たち絶対にオトモダチになれると思うんだ……だから逃げようなんて考えないでね。

もしも逃げたりしたら……ゆるさないよ……

「っ！ ベル様っ!」

リリルカさんの声を聞き現実に戻ってきたが……リリルカさんや、ベル君にだけ声を掛けるんじゃないかと私にも一声欲しかったなあ。

まあ、そんなことを考えている余裕がないくらい蟻やら蛾やら兔やらがわらわら出てきましたね。

「いっ いきなり……」

なんて驚いていますけど……これ本当に驚いているんだろうか？

リリルカさんのサポーター歴は詳しくは判らないけど、私やベル君よりも長いはずである、そんな彼女が七階層のモンスターに群がられたくらいで動揺するかな？

「大丈夫。あれくらいだったら、何度も乗り越えている!」

うんその通り、確かに数は多いが、私の魔法的にはわらわら湧いて出る方がありがたいんですけどね（同士討ち）

ではベル君、いつも通りモンスターに突貫して攪乱をお願いね。

「はい、行きます!」

そう言い残しベル君はモンスターに向けて駆け出し、一番手前の蟻

をぶった切り、背後から迫ってくる蟻を振り向きざまに一突きで倒し、そのままモンスターの集団に突撃していく。

その隙に私はモンスターの側面に回り込み、ベル君が先頭の蟻にナイフを突き立てた瞬間に合わせて魔法を放つ！

【畏れよ、我を】

その言葉と同時に、生き残っている蟻や兎やらから信じられないほどの大きさの金切り声が漏れ出していく、我先にこの場から離れようとベル君に対して背を向ける、もつとも、そんな隙だらけの姿をベル君が見逃すはずもなく、一匹ずつ確実に仕留められていく。

しかしベル君、こんな混沌とした戦場なのにしっかりと仲間を呼ぶ蟻から処理していくとは、なかなか現場での判断能力がついてきたんではないか？

原作と比べても、この世界線のベル君の戦闘能力はかなり高いのではないのかな。

あ、リリルカさんのこと忘れてたけど、彼女逃げ出していないよね。そう思つて周りを見回すと、リリルカさんはベル君の邪魔にならないようにモンスターの死骸を画面端まで運んでくれている。

うん、これならベル君も何も気にせずいけるだろう。

「わああっ ベ、ベル様ー！ また生まれましたあー！」

確かに、リリルカさんのすぐ横の石柱にヒビが入り蟻の頭部が出てきている。

私が対処してもいいが、私が武器を構えるよりも早く、ベル君の飛び蹴りが炸裂し、石柱から生まれる前に蟻は絶命してしまつたようだ。

うん分かっていたことだが、ベル君のステイタス高すぎじゃねえ？私の方が先にボウケンシヤーになつたんだよ、ここまで戦闘力に差が出てくると笑えてくる。

さて、モンスター討伐が済んだらお待ちかねの剥ぎ取りタイムとなります。

ここで変な物欲を持つとドロップアイテムの取得に大きな影響が出るから無心で剥ぎ取るべし、どの世界でも物欲センサーはキツチリ仕事してくれます。

「さーてと片付けちゃいましょう」

そう言つてリリルカさんは手際よくモンスターを捌いていく。

「へえー、リリルカさん魔石の取り方上手だねえ…」

「そんなことないですよベル様。リリにはこれくらいしか取り柄がありませんから」

おっと、二人の会話イベントが始まったみたいだから、リリルカさんがベル君のナイフを盗難する隙を作らないといけませんね。

下手に近くに寄らず、尚且つベル君の背後に回らない様にしないと、リリルカさんも安心して盗難出来ないだろう。

うん、仲間の装備が盗難されるのを知っておりながらそれを見逃す先輩ボウケンシャーの私、いくらヒロインイベントのためと言ってもリリルカさんの盗難に手を貸すような真似をすることになるとは、なんか、こう、腑に落ちない。

あと、最初の遭遇でリユーさんが遅れてきたことも何か引つ掛かるんですよね。

もし、ナイフを取り返すイベントにもリユーさんが遅刻したらナイフが返って来ない恐れがある。

それは不味い、リルルカさんのヒロインイベントが終わるだけでなく、ナイフの借金のみが残ってしまう。

うむむむ、しょうがない、盗難イベントにはなるべく関わらない様にしないとと思ったが万一を考えて参加しますか。

でも私、盗品なんかを横流しする違法店の場所なんて知らないんだけど（汗）

まあ、私は何かとトラブルに巻き込まれるから路地裏をウロチョロしてればエンカウントするはず。

リルルカさん。リユースさんにエンカウントしたらリングゴ投擲から腹蹴りですみますけど、私とエンカウントしたら【畏れよ、我を】になりますから………お覚悟をお願いします。

おっと、モンスター剥ぎ取りも会話イベントも終盤に差し掛かってきたようで二人はベル君のナイフと女神様の話題へとシフトしている。

ではここで……二人とも、私は少し向こうの様子を見てくる。

「えっ 今からですか？」

うん、ちよつぱり気になることがあってね。あ、石柱の蟻からも魔石を回収しておいて、勿体無いから……

そう言い残し、ベル君が引き留めるのも聞かずダンジョンの出口に向かって歩き始める。こうすれば、あとで合流するときベル君の背後に回らないで良いから、リルルカさんもその方が都合が良いだろう。

ちよつぱり歩いてから壁に隠れながら二人の様子を覗き見る。

ちよつと高めの位置にいる蟻の腹にナイフを差し込んで悪戦苦闘するベル君。

人の良い笑顔から、誰も信じていないような冷たい目になったリルルカさんは無防備なベル君のお腰のナイフを鞘から抜き取り懐にしまいこむ。

そんな二人を隠れて見ている私は事が終わったと同時に二人のもとに戻っていく。

「カメ子さん、一人離れて何をしてたんですか？」

ナニをしてたんじやなくて、ナニをされるのを見てたんです。

まあ、ベル君に感づかれてもいけないし、なるべく視線を合わせないように立ち回らないとね。

「さて、ベル様、カメ子様。今日はこれくらいにしましょうか」

「えっ、もう？　僕はまだ余裕があるけど…」

おう、同意を求めるような視線を向けんなや、リリルカさんは窃盗がバレる前にトンズラしたいんだよ。

「いえいえ、それは油断です。今日倒したパープルモスは毒鱗粉を撒き散らします、即効性こそありませんが何度も浴びれば『毒』の症状が発生します」

何度も浴びないと『毒』にならないなんて…なんて温いんだ。

世界樹の迷宮の『毒』に慣れ親しんだボウケンシャーにしてみればヌルゲーすぎる。

「うっ　嘘!？」

「本当です。愚鈍なりりは解毒剤をきらしておりました…」

おう、だからこつちみんなや。そんな顔しても私も解毒剤持ってないからね（三本持つてる）

「ど、毒かあ…カメ子さんも解毒剤持ってないから、帰り道は全力で行かないと…」

すんごく深刻な顔してるけど…何度も浴びなければいいだけの話だからね。

「大丈夫ですベル様！　他の冒険者様の通った道を逆戻りすればモンスターはいません。人のいるところを選べばモンスターとの遭遇はゼロになります！」

私にはベル君にお腰のナイフを意識させないようにしようとするのが丸分かりだがベル君はしきりに感心している。

さて、リリルカさんが動きやすいように私が先頭を歩くことを提案しますか。

リリルカさんは「えっ、いいんですかー」なんて言って驚いていた。

私はリリルカさんの肩に手を置きながら耳元で「その方が都合がいいでしょ」と呟くとビクツと一瞬震え、「なんのことでしょうか？」な

んて言ってきた。

不味い、ちよつぱり核心をつきすぎたようだ。

ここで私に不信感を持たれるのも不味いので「んっ？ 私が先頭の方が不慮の事故に対処しやすいと思った」と惚けると目に見えてホツとした表情になった。

さあ二人とも地上に帰りましょう！あ、リリルカさん、報酬は入る前に話した通り全体の三割でよろしいですか？

第二十話 盗難ですか？ 私は全部把握してます。

サポーターのリリルカさんの案内でダンジョンを進むと帰り道はモンスターのモノ字も出なかった。

うーん、ホントにそこんところは優秀ですね。

そのリリルカさんですが、ダンジョンから帰還したらすぐに離脱しました。

あ、あれ？ 私達から離脱するの少し早いんじゃない？

まだ報酬を渡してないんだけど？

え、今回はお試しと言う事で無料なんですか？ そんなセリフ原作で言ってたかなあ？

ベル君はけっこう必死に彼女をひき止めたんですけど、リリルカさんはなんだかんだ理由を述べて足早にその場を立ち去ってしまいました。

ま、フラグは立ってるし多少の事は誤差でしょう。リリルカさんも盗品を持っている状態で私達と長くはいたくないでしょうから。

それで地上に帰ってきた私達はダンジョンから帰還した事を報告するためエイナさんの所に向かいました。

向かう最中、ベル君のナイフを確認したがしつかりと盗難されており、お腰にはナイフの鞘だけが固定されている。

「んっ カメ子さん僕の腰に何かついてますか？」

なんて聞いてきたけど、ナイフがないだけで何がついているわけではないから「何もない」と答えた。

うん、嘘は言っていない、それどころかナイフを盗難されていると遠回しに言っているようなものだ。

もつとも、ベル君はこの言い回しの意図に気付いてないようですよ、「そうですねか？」と早々に話を切り上げギルドの受付に向けて歩き出す。それで到着。

「うーん他所の【ファミリー】のサポーターかあ…」

「やっぱり不味いですかね？エイナさん」

「うーん……ベル君達から見てどうなの、そのリリルカさんって子は？」

「いい子でしたよ、サポーターとしても腕は悪くなさそうでしたし」

そんでいつものベル君とエイナさんのおしやべりタイムとなります。

今回の話題はもちろん【サポーター】【ソーマ・ファミリー】についてです。

エイナさんからこの話を聞いてベル君はサポーターの地位の低さや境遇に驚き、やり切れない思いを抱きます。

うん、正に物語の主人公っぽい思考ですね。ベル君がいかに嘆いてもこの現実を変えられないのに。

原作でも結局はサポーターの地位は向上しないし、専用の組織も立ち上がらないしでホントにいいところがない。

「私としてはカメ子ちゃんのためにも他者との交流を深めてほしいからむしろ勧めたいかな」

「エイナさん……」

おや？ 知らない間にエイナさんがサポーターを勧める理由が変化してるぞ。原作ではベル君にソロをやめてほしいから勧めたのに、この世界線では私の情操教育のために変わってる。

ちよつと待ってエイナさん。なんか勘違いをしてるんじゃないですか？

そんな優しい目で私を見ないで下さい。まるで私がなんか……そんな子……みたいじゃないですか。

ベル君も「ああ（納得）」みたいな視線を送らないで。

ほら、さつさとエイナさんのおしやべりに戻りなさい、他に聞きたいこと……もとい、引っ掛かっていることがあるんでしょ、私は今日の成果を換金してくるので終わったら声をかけてね。

そう言い残して隣のカウンターに移った私は今日の成果を机の上にドバーと放出する。

結構な量だったが名も知らぬ職員のお姉さんは慌てることなく他の職員を呼んで手早く魔石とドロップアイテムを奥に持っていった。換金してくれるのを待ってる間に隣の会話に耳をすませばベル君がサポーターの地位の低さに衝撃を受けているようだ。

あ、換金終わりました？ ほー51000ヴァリスですか。やはりサポーターがいるとアイテムの所持限界数が増えるから売り上げも段違いだな。

今日はリルカさんに契約金を払ってないから丸儲けたな。

ふふふふ、こんだけ稼げるんなら、ちよつと高めのお鍋を購入したり、次の女神様とベル君のデートイベントのために二人ぶんのお洋服を購入してもまだ家計に余裕があるな。

うーん、お金に余裕が出てくると欲しいものが沢山出てくるな。

でも我慢だ。お金があるからと考えなしで使うのはゲームでも現実でも控えるべきだ。

次回からはリルカさんの分を差し引かないといけないし、これ以降イベントだって盛りだくさんあるんだから、その時の事も考えないとね。

ふう、冷静になったことだし、今回のお金は半分は貯金に回して、10000ヴァリスで装備品の修繕と簡易食糧やポーションなどのお薬の補充に回して、予算10000ヴァリスくらいで二人のデート用のお洋服と豪華な夕食の準備をしなくちゃ。

「そうですか…ありがとうございます！ エイナさん、色々参考にします」

「うん、私の方はいつでもいいからこういう話はちゃんと相談に来てね？」

おっと、収支計算している間にベル君とエイナさんの会話イベントが終了したらしく、ペコリと頭を下げたからベル君は私の方に歩いてきた。

「あれ？…えっと…ベル君？」

お、エイナさんがベル君の背中を見て何かに気づいたようですね。

「何ですか？」

対するベル君は呼び止められた事に対してキョトンとした表情でエイナさんの方に顔を向ける。

私は二人が大声を上げるのを知っているから早めに両手で耳を塞ぐ。

「ナイフはどうしたの?」

「へっ? ナイフならここに……………ん?」

「まさか…お…!」

「落としたああああああ!」

ベル君もエイナさんもナイスリアクションです。二人とも顎が外れるくらいで大口開けて叫んでるせいで周りからの視線も釘付けである。

「か、か、か、カメ子さん! 僕のナイフが!!」

うん、何もないね、犯人はリリルカ・アーデさんですよ、別に不注意で落とした訳じゃないから安心しなさい。

「何もないって……………まさかダンジョンから帰ってきたとき何もないって言ったのは」

お、やつと私の言葉遊びに気がついたか、そうだよそのまんまの意味だったんだよ(笑)

「さ、捜してきますー!!」

それだけ言い残してベル君はその場から走り去っていった。

さて、私もリユーさんがリリルカさんと遭遇しない時の保険のために動きますかな。

リリルカさん、先に謝っておきます。逃げる貴女を捕まえる手段がなかったから【畏れよ、我を】してしまい、誠に申し訳ありません。さて、リリルカさんを探しにイクゾー!!

く一方その頃く

「なんじやいこりや、ごみ捨て場で拾ったのか? 何も切れんし…刀身そのものが死んでおるよ。ウチでよければそこら辺に飾るよ30

ヴァリスで…」

「30ヴァリス!? そんな馬鹿な! これは化け物の硬い殻も切り裂く業物だ! 豪邸を造つてもお釣りがくるほどの価値がある一級品の武器の筈だ! だからあんな恐ろしいイカレ女の腰巾着に近づいたのに!なのに、どうして…?あの鞆があれば…あのイカレ女もまだ私の正体は知らないはずもう一度潜り込んで…」

.....

うー、リリルカさん、リリルカさん。ベル君が落とした(仮定)ナイフを捜して路地裏を走る私。

ギルドから出た私はベル君に気づかれないように脇道に逸れまして人気がないところをひたすら走ってます。

と、言うか、盗品を扱う店なんて真っ当に生きてたらず関わらないであろうお店を探すなんてどだい無理な話である。

だから私は【豊饒の女主人】に通ずる路地裏を走ることにしました。なぜかって? 原作でリユースさんがリリルカさんと出会ったのはリユースさんがお店に早く戻るために路地裏を活用して偶々出会ったのである。

つまり、目的の盗品店は豊饒の女主人とギルドの間の路地裏にあるのだ!

範囲広すぎ! 目星なんてつけれるか!でも他に手がかりがないから仕方がないのである。

はあ、なんか疲れてきたな、その角を左に曲がったら確か表に出

れるから少し休憩しますか。

そう思つて角を曲がろうとするとナイフを持った小人族バルウムの男と鉢合わせした。

なくんだ、やつぱり私持つてますねえ。本当に愉快的な気持ちになつた私はその男性に心からの笑顔を向けた。

……がその男性は物凄く顔を引きつらせた。

解せぬ。

だがすぐに何か飛翔物が男性の手にぶち当たり、ナイフがその手からこぼれ落ちる……が私はそのナイフをナイスキャッチした。

言つとくがまぐれである。たまたま手を出したら取れただけである。

「腹に力をこめた方がいい」

そんな声がしたと思つたらリユーさんがいきなり現れて小人族バルウムの男性を表道路の方に蹴り飛ばした。

うん、恐ろしいパワーとスピードですね。買い物袋を抱えて、しかも手加減しているのに私のステイタスを軽く凌駕しているのがよくわかる。

「おやかメ子さん、このような場所で何をなさっているのですか？」

何をつて……私はナイフをリユーさんに見せながら用事はすんだと答える。

「そうですか。私はあの小人族バルウムを追いますが……」

あ、私も追いかけます、ナイフを盗んだはんにはだれなんだろうなー（棒）

第二十一話 丸く収まったから問題なし。

「ナイフが見つからない……どこに落としちゃったのかなあ」

ギルドにて受け付け嬢のエイナさんにナイフがないことを指摘されたベルは来た道を逆走しながらナイフを探していた。

「カメ子さんもいつの間にかいなくなっちゃったし……」

ギルドを出た時は確かに後ろを付いてきてくれたのだが、しばらくすると鎖を引きずる音がしなくなったのを感じ、後ろを振り返ると彼女の姿は何処にもなかった。

ナイフが見つからない焦りと頼りになる先輩がいない不安感のせいで若干早足で歩いていると、路地裏から何かが勢いよく飛び出してきた。

「あうっ！」

「わっ！ な、なにっ!？」

不意打ちのように飛び出してきた物体に驚きながらも視線を向けると、そこには思いがけない人がいた。

「リ、リリっ!？」

「ふあっ……べ、ベル様っ!？」

ゼーゼーと息があがり、倒れこんでいる彼女を心配してベルはすぐに駆け寄った。

「ちよっ どうしたの!？」

「ゼー、ゼー、実は凶暴な女……じゃあなくてっ、イカれ……た野良犬に襲われてしまいました……」

「大丈夫！ カメ子さんが持たせてくれたポーションが余ってるから」

傷ついたリリのため腰のポーチからポーションを取り出そうとしたら、路地裏から新たな人影が現れた。

「……まさか逃げられるとは……カメ子さんに気を取られ過ぎましたか」

「ちよつ、リユー速いよつ…」

「え、リユーさんにシルさん!? 一体何が……」

いきなり路地裏からポンポン知り合いばかり出てきて混乱気味のベルだが、リユーは丁度良いとばかりに話し始める。

「ああ、クラネルさん。ちよつど良かった、実は貴方の……」

何かをベルに伝えようとしたリユーだったが、ベルにしがみつくりの存在に気がつくくと彼女に詰め寄った。

「クラネルさんどいてください!」

「ひゃつ!」

「え、ちよ、ちよつと?!」

またしても怒濤の展開にベルは情報を処理し切れず混乱していると、リユーはリリのフードを剥ぎ取り、リリの犬耳が露になる。

「……犬 人?」
シアンスローフ

「いきなりどうしたんですか! リリ大丈夫!」

「は、はい……」

リユーのいきなりの行動に驚きながらも震えるリリを落ち着かせるため抱き寄せたベルはリユーに抗議した。

「すみません 人違いでした……ところで、いつまでそこで見ているつもりですか?」

頭を下げたリユーはそう言って後ろの路地に目を向けると、またしてもベルの知り合いが姿を現した。

「か、カメ子さん!? いなくなつたと思つたら何でそんなところから!」

「…ナイフ…あつたよ」

どうしてそこにいたか、というベルの質問には答える気がないようで、マントの下から取り出したナイフをベルに向けて投げてきた。

それを難なくキャッチしたベルはそれが本当に自分の落としたナイフであるか確認する。

「僕のナイフです! カメ子さん本ツ当にありがとうございます!」

「…先に見つけたのはリユーさんだから…お礼はそつちに…あ、そうだ…」

何かを思い出したカメ子は今までの空気なぞ知るもんかとリリの下に歩いてきた。

「あ、あの…:…なんでしょう?」

カメ子に対してどこか緊張してるというか、怯えているような声色のリリだったが彼女がフトコロから取り出したものを見た瞬間キョトンとした表情になった。

「は、え、あ、はい?」

「…今日のサポーター代。受け取らずにいらなくなったから…」

ズシツと重い袋を差し出されたりりはひどく混乱していたが、そんなことは気にしないとはばかりにカメ子はリリの手を掴み袋を強制的に持たせた。

「…:…明日も来てくれるよね?」

感情の読み取れない顔でリリにズズツと顔を近付けるカメ子。

青い顔で何度もうなずくりり。

「カメ子さんがそんなこと言うなんて、リリってやっぱり優秀なんだなあ」

そんな今のやり取りを見てそんな感想しかでてこないベルであった。

.....

ナイフを盗んだりリルカ・アーデさんを当てもなく探していたが転生系主人公パワーで見事遭遇したカメ子ちゃん。

そしてリリさんとちゃんと遭遇したリユーさんとシルさんを見て、

世界が原作の流れ通りに動いていることに安堵した。

……しかし、リユーさんが拾うはずのナイフは今現在私の手の内にあります。

……どうしよう、ベル君のリユーさんフラグを折ってしまった……いやまだまだあわてるじかんじゃないこのないふをどうにかしてりゆうさんにわたしてべるくんとおててつないでもらわないとふらがたたないせつかくげんさくのながれが……

あ、脳内会議が終わる前にリユーさんが表通りに逃げたりりさんを追っていった。

……もうダメみたいですね。あ、シルさんお疲れ様です、リユーさんなら泥棒追いかけて表通りに走って行きましたよ。

「え、ちよつ、リユー、置いてかないでよ」

シルさんもリユーさんを追いかけて表通りに走って行きました。

きっと原作通りベル君と鉢合わせすることでしょう。私も急いで向かわないと流れに乗り遅れちゃうなあ。

はあ、行きたくないなあ。フラグ潰しておいてどの面さげてベル君に会えばいいんだろう。

……仕方ない、リリの疑惑イベントはスルーして、リユーさん達が帰ってから、何食わぬ顔でベル君に合流してナイフを渡そう。

これ以上イベントに関わったら要らぬ心労を溜め込みそうだよ……

「……ところで、いつまでそこで見ているつもりですか？」

はいばれたー。物陰から現場の様子を覗いていたら、いきなりリユーさんに私が隠れていることがばれたー。

あーもーメチャクチャだよ、もーこれ私が出ていかないとお話が進まないパターンだよ。

みんなの視線がこつちに向いて私の登場を待ち望んでいますね。

アハハハハハ、もーどーにでもなーれ。

「か、カメ子さん!? いなくなったと思ったたら何でそんなところから!」
やめて、そんな驚愕の表情で私を見ないで、凄まじく空回りしたお馬鹿な私を見ないで(泣)そして何で路地裏から出てきたなんて聞かないで。

まあ、ぶつちやけベル君からしたら、急にいなくなった私がリリさんやりユーさんとおなじ路地裏から出てきたなんて理解できないよね。

でもごめんねベル君、私の事情はこの世界の人には話せないの、メタ的な意味で…

だから君の疑問を無視してナイフを取り出して、あつたわよアピールをしてお茶を濁すぜ!

おお、ベル君のお目目がキラキラと輝いてますねえ。でもごめんね、リユーさんの代わりにお手手ニギニギイベントを起こさせないために君に近付けないんだ。

だからナイフをベル君に向けて全力投球!!

ベル君難なくキャッチ。

あれ? 私の全力シヨボすぎない。

ベル君たらそんなに大声で喜ぶとみんながびっくりするじゃない。ん? リリさんや私が登場してからずっとベル君に引っ付いていますけど……ああ、ベル君つたらいつの間にかリリさんの好感度稼ぎに成功してたんですね。

私がない数分でお互いに抱き合う関係まで持つてけるなんて最近のハーレム型主人公は進んでるんだな。

しかし、リリさんのあの目、私は鈍感系オリ主ではないから分かる、あれは私に怯えてますね(焦り)

しかしおかしい、私は彼女に特に何をしたでもないのに何故怯えられている？

私の容姿が原因？ いや、女神様もエイナさんもベル君も商店のおばちゃんたちも怖がらないし、それはないな。

私の魔法が原因？ いや、彼女に【畏れよ、我を】誤射してないし、ベル君が初めて見たとき怖いとは言わずスゴいと言って喜んでたし違うはず。

路地裏で出会ったから？ いや、私何にもしてないし。

被害を与えたのリュウさんだし、顔合わせただけで怯えるとかそれこそ意味不明だし。

結果、よくわからないけど何か誤解してる。

なんで？

それはさておき、このままではリリさんが私に怯えて明日は私たちのサポーターをしてくれないかもしれない。

それは不味い、こうなったら変な勘違いしてそうなりリリさんの下に行きまして……はい今日のサポーター代金（賄賂）

そうだよ守銭奴のリリをやる気にさせるには金しかねえ。

「は、え、あ、はい？」

はい？……じゃねーんだよ、私に怯えてないで受けとらんかい！

はい受け取ったこれで交渉成立明日も来てね。

うん何度も領いてくれたし、これは了承してくれたに違いない。

ふー、これで最低限のフォローは出来たし、今日はぐっすり眠れそうだね。

追伸 リリルカ・アーデさんは次の日も来てくれました！
ベル君と仲良く並んで歩いています。きつとフラグがきれいに立つ
ためだと思われす。

第二十二話 女神ヘステイア様である！

ある日の夕方、表通りを一柱ひとりの女神がヨロヨロと歩いていた。

「きよ、今日も乗りきった……ヘファイストスのやつめっ、借金返済ローンのためとはいえ、もう少し気をつかってくれたっていいじゃないか……」

そう、我らが「ヘステイア・ファミリア」の主神、女神ヘステイア様である。

彼女は眷属のベル・クラネルのため神友しんゆうであるヘファイストスに頼み込みナイフを製作してもらい、その代金を支払うために「ヘファイストス・ファミリア」で日夜アルバイトをしているのだ。

あと、カメ子の洋服の代金も借金している。

そんな女神様は疲れのためか、少しヘファイストスへの愚痴をこぼしながら帰宅していた。

「うう……連日の重労働でボクはもうクタクタだよ……ああベル君に早く会いたい、カメ子君の作ったゴハン食べたい、あとお風呂入りたい」
疲れてボーっとしてるヘステイアの頭の中には笑顔で出迎えてくれるベルと、ほっかほっかのゴハンを用意してくれているカメ子の姿がありありと浮かんでいた。

「すごい、すごいよっ！」

聞いたことのある声が不意に聞こえ其方に視線を向けると今会いたい人第一位のベルの姿があった（二位は惜しくもカメ子ちゃん）。

「おーい、ベルくー」

その姿を見た瞬間、女神ヘステイアは一時的に疲労が回復し思わず駆け寄っ………？

しかし愛しいベルの前にはフードを被った見知らぬ女の姿があった。

「60000ヴァリス………やああ——っ！ たった1日でこんなにお金がつ!! ベル様凄い——!!」

「夢じゃないよね！現実だよね!? これもカメ子さんとリリのおかげだよー!」

「…やっぱりサポーターは必要…はつきりわかる」

ベルと見知らぬ女は仲良く手を取り合いとても仲が良さそうであり、そんな二人を祝福するかのごとくカメ子は二人のはしやぎっぷりを見ながら何度もウンウンと頷いている。

「あ、そうだ、ご飯食べに行こうよ！僕、美味しい店知ってるんだ!」
「わっ！ ちよつとベル様っ!?!」

「…ああ、ひっばられるー!」

上機嫌なベルは見知らぬ女とカメ子連れて人混みに消えていった。

「べ……ベル……く……ん……ん……カ……メ子……くん……」

その様子をヘスティアはただ見ている事しかできなかった、目からは涙が溢れポトリ、ポトリと零れていく。

そして、その悲しみを振り切るかのように彼女もまた走り去っていく。

その夜とある酒場。

「聞いてくれよミアハ！ ベル君が…ベル君が浮気をしたんだ！ しかもカメ子君の目の前で!!」

夕方の鬱憤を晴らすがごとく飲みまくる女神ヘステイア様。

「浮気とは穏やかではないな、ベルがそのような事をする光景が想像できんし、あの真面目なカメ子がその様な事を見逃すとは思えん」

そして不幸にも巻き込まれたミアハ様である。

「まあ、ベルにはベルの付き合いもあるのだろうし、カメ子もその場に居たのなら黒と決めつけるのは早計だと感じるが…：…そもそも、恋人ですらないそなたが浮気云——」

「くそう!!」

ミアハの言葉なぞ聞いていられるかとばかりにコップの酒を一気に飲み干しアルコールパワーを充電したヘステイアの愚痴はさらに勢いを増すばかりである。

「そもそもなんなんだあの娘は!? ベル君はボクのものなんだぞう!」

「これこれ、ベルは誰のものでもないぞ」

「わかってるさ! 言ってみただけさ!」

「うむ、酔ってるな」

机を叩きながらの抗議はミアハ様には通じないらしく、のらりくると躲かれてしまっていた。

「まったく、ベルでこの様ならカメ子に恋人が出来たらどうなることやら」

ミアハのこの一言を聞きつけたヘステイアが机に突つ伏した状態から勢いよく飛び起きる。

「あの子に恋人だって!? ダメダメ認めないぞ! あの子と恋人になりたいなら最低でも3高で優しくて思いやりがあつて家族を第一に考えてカメ子君を悲しませないで毎日笑わせて酒もタバコもやらな

くて仕事も定時で終わらせて健康志向でイケメンで不幸な過去を飲み込める器を持って初めてスタートラインだからな!!」

「こ、これ!?声がでかいぞヘスティア!」

しかしヘスティアの眷属愛に火がついたらしくミアハの注意などお構いなしに言葉は止まらない。

「うわああああんっ!!ベル君ベル君ベルくーんっ! お願いだからボクの前からいなくならないでくれー!」

「だから声がでかいといっておる!」

「君が笑っていてくれればボクは下水道に住み着いたっていいぜ!?

ぶっちゃけカメラ君の目がないなら同じベッドで寝たいんだギユウギユウしたいんだ君の胸にぐりぐり頭を押し付けたいんだー!それくらい君のことが好きなんだ! 愛してるよベルくーん!」

さすがのミアハ様も神友しんゆうの愛の告白にドン引きである。

もちろん店の従業員も他の客もドン引きである。

当の本人は言いたいことは言い切ったとばかりに机に突っ伏し寝息をたて始める。

「当人がいなくてよかったな、勘定を頼む」

自らの手押し車に酔っぱらいを積み込み彼女のファミリアに歩いていると彼女が意識を取り戻したようだ。

「ういーつく、あれえミアハーしはらいはどーしたんだーい…ひつく」

「うむ、ちゃんと割り勘にしておいたぞ」

「そっかーわるいねーはらってもらっつてー」

「うむ、もうじきそなたの家につく、あまり暴れるではない」

手押し車の荷台でバタバタと手足を動かし暴れるヘスティアを乗

せて二人は帰路につくのであった。

.....

次の日の朝

「ぬあああああ……!!」

飲みすぎのしっぺ返しをもらにくらったヘステイアはベッドの上で悶え苦しんでいた。

「だ、大丈夫ですか神様？」

ベッドの横で心配そうにヘステイアを覗きこむベルに申し訳ない気持ちになるも心配される喜びを噛み締める。

「す、すまないベル君こんな見苦しいところを……どうやら飲みすぎたみたいだ」

「…酔いざましの食事、はいアーン」

カメ子の差し出したスプーンを言われるままに口を開き食べ始め。

「うー頭がー」と、ちゃっかりベル君に倒れこむヘステイア。

「…まだ体調悪い？ベル君支えてあげて」

「あ、はい。神様大丈夫ですか？」

その言葉通りヘステイアは食事が終わるまでベル君に支えられた状態でカメ子から食事を食べさせてもらうという幸福感に包まれた

状態ですごした。

「それで…あれかい、昨日はサポーター君と一緒にご飯を食べに行っていたのかい？」

「はい、ちよつとうれしいことがあって…」

「いいよなあ君たちは、どうせ昨日は美味しいもの食べてお楽しみだったんだろ、あーあボクも行きたかったなあ」

楽しそうに語るベルに少しムツとしたヘステイアはつい悪態をついてしまいプイツとそっぽを向いてしまった。

その様子を伺っていたカメ子やベルに対して何やらボソボソと耳打ちし始め、ベルの顔が朱色に染まりだした。

「じゃ、じゃあ……二人で…ちよつと贅沢なものを…食べに行きませんか？」

いきなりのベル君からのデートのお誘いに先程までの不機嫌さは吹き飛び、ヘステイアの脳内にお花畑が形成される。

しかし、脳内の冷静な部分がカメ子君をのけ者に行っていると警告をならす。急いで視線をベルからカメ子に向けると彼女はヘステイアに向けて親指をグツ！とつきだした。

つまりこのデートはカメ子君公認のものなのだ。

「神様が元気になったら今度にも…」

ベルは今度にしたいうのだが隣のカメ子は相変わらず親指をグツ！としている。つまりは……

「今日行こうッ!!」

ヘステイアの発言にベルは「え？」と固まり、カメ子はウンウンと頷いている。

「今日行くんだ！」

「か、神様体調は……」

「治った！」

カメ子の謎の後押しを受けたヘステイアは難しい事を考えるのを後回しにして、このビッグウェーブに乗ることにした。

「よしすぐに準備を——」

しようとしたが彼女は気付いた、自らの体から女神にあるまじき酒の香りが漂っているのを！

「べ、ベル君…18時だ」

「は、はい？」

「18時に南西のメインストリートアモールの広場に集合だ！」

そう言い残し、酒の臭いを落とすため神聖浴場に向かおうと走り出そうとしたら、自らのツイントールを何者かに掴まれ首がぐえ！となった。

「い、いきなり何をするんだ、首を痛めるかと思ったじゃないか」

「…ごめん、あと忘れ物…」

髪を掴んだ犯人であるカメ子は短く謝罪すると紙袋をヘステイアに差し出した。

何かと思いい袋を開けると真新しい洋服と靴が入っていた。

「カ、カメ子く…ん…これは？」

あまりの用意の良さに驚愕しカメ子の顔を見るが、そこにはいつもと変わらない可愛らしい顔しかなかった。

「…デート、ガンバレ…」

そう言い切りまたしても親指をグツ！とつき出す。

「うわああああんカメ子くーんー！」

いろいろな感情がごちゃ混ぜになり感極まったヘステイアは泣きながらカメ子に熱い抱擁をする。

対するカメ子の反応は…

「…ホントに酒クサ、え？　これホントに女神様の体臭？」

割と失礼な感想だがヘステイアには聞こえていなかった。

第二十三話

私の失言はシャレにならないです。

18時アモールの広場、女神さまとベル君は私が用意した衣服を身にまとい初々しいカップルのような会話をしながらお互い顔を赤らめている。

その様子を私は広場の植木の陰から見つめている。一応原作の流れに乗ったから久しぶりにソロでダンジョンに潜ろうと思いいりりルカさんを誘うべくしばらく探してみたが見つからなかった。

と、探し人が居なかったことで私のテンションが下がり、ダンジョンを諦め、二人の様子を覗き見るべく、スニーキングミッションを勝手に開始することにした。

こんな出歯亀じみた事は本来褒められたものではないが好奇心には勝てなかったよ……。

おっと、そうこうしてる間にベル君と女神さまは手を取り合って歩きはじめた、私は二人に気付かれないように広場の植木から移動を開始した。

もちろん頭に葉のついた木の枝を括りつけ、両手にも葉のついた木の棒を握りしめている伝統芸能スタイルです。

ちなみにダンまち世界には段ボールは存在していないようだ。

「あ、いたーっ!? ヘスティアがおったぞー!」

そんな声と共に大勢の美女たちがこちらに近づいてくる、どうやら原作通り女神さまの彼氏候補のベル君を興味本位で見に来たようだ。

原作通りならこの後女神へスティアさまがほかの女神さまに突き飛ばされ、ベル君がハーレム型主人公の特権である美女にもみくちやにされるイベントが発生することは明白である。

まあ、ほつといっても良いがちよつとだけ手助けしてあげよう、私がこの世界にいることにより女神さまもベル君成分を十分に補充出来ていないかもしれないし、二人の時間を確保する意味でも意味のない行動ではないはずだ。

ではベル君たちと女神軍団の間にジャンプっ!!

「か、カメ子くん(さん)!!?」

ふ(強者の余裕) さあ、女神軍団よ、ベル君と女神さまの仲を引き裂こうというなら、まずは私を倒していくがよい!!

ふ、自慢じゃないが私の悪名という名の風評被害は神様連中にも浸透している、そんな私がおせんぼしているのだ、ふふ温室育ちの女神さまは怖くて近づけまい、さあ、二人とも、この場は私に任せて先にすすめ……………む、むぶうううう!!

「やーん 間近で見ると結構かわいい!?!」「髪の毛サラサラ」「お顔もシミ一つない綺麗に手入れされてるわー」

「拘束具つけてるけどお肌つるつるだわー」

な、舐めてた。好奇心に飢えてる女神たちのバイタリティーを舐めて…………た。

いっつもほかの冒険者に怖がられて避けられてるから絶対いけると踏んだけど、まったく躊躇しなかったぞこの女神軍団、あつという間に身に着けていた木の棒は外され、フードを脱がされ、頭を撫でられ、ほっぺをグニグニされ、いろんな所をペタペタ触られる。

顔に押し付けられる二つのぽよんぷよんしたものから何とか抜け出しそのまま地面へと倒れこむ。

「し、しっかりするんだカメ子君キズは浅いはずだよ」

め、女神様……………私は……………最後まで……………役立たず……………でした。ガク
「カ、カメ子くん!!」

私を介抱してくれてる女神様をよそに原作通り女神軍団に蹂躪されているベル君、時折聞こえてくる声が不憫でならない。

「好奇心に餓えた神どもめく! カメ子君だけじゃ飽き足らずベル君まで……………ベル君はボクの眷属なのにつ! ボクのものなのに……………」

女神様が倒れこんだ私を抱きかかえながら恨み言を吐いてると、女神軍団の輪の中からベル君が飛び出してきた。

「ベル君! 無事か!?!」

「かみ……………さま……………僕、もう死んじやってもいいかもしれません……………」
アニメや漫画でも見たベル君のとろけ顔にイラつときた女神さま

は四つん這いのベル君の右脛に蹴りをいれる、ついでに私も便乗して左脛に蹴りをいれ微妙に原作の流れに乗った。

「痛ッすみませんでした……!!」

「よし、逃げるぞー!」

そう言うとき女神さまは右手でベル君、左手で私の手を握り走り出した。まあ、ちよつと原作と違うけど私を置いて行かずしつかりと手を握る女神さまにしきりに感心する。

……しかし、私はすぐに置いて行かれなかったことを後悔する。原作では逃げ回っているうちにすつかり夜も更けたと描写がある、現在18時20分、この後夜が更けるまで3時間近く街中を逃げ回る羽目になった。

「はくようやく振り切った、もうこれだから神ってやつは!?!欲望に忠実すぎるんだよ全く!」

全くその通りです、マジでしつこ過ぎましたね。逃げてる時の描写はカットされてますけど、実際は路地に逃げこんだり通路の荷物を倒して進行を妨害したり、店先のタルの中に身を潜めたりと、漫画的表現を使いまくった高難易度の鬼ごっこでしたね。

「逃げ回っていたらすつかり夜も更けちゃったし……せつかくカメ子

君がお膳立てしてくれたベル君とのデートだったのになあ」

まあ、私からすれば失敗することが前提だったデートでも結果を知らなかった女神さまにはそううつるよね。

「か、神様！ カメ子さん、見てください！」

はいはい、夜景ですね、キレイキレイ……おお、この世界にきて一年以上たつがちゃんと夜景を見るのは初めてだな。

元の世界と違ってネオンや電球などの強烈な光はないが、私の目の前には光り輝く街が見える、元の世界以下の文明の夜景なぞそこそこのモノだと下に思っていたが、これは確かにきれいでなんか安心できる優しい光にあふれていた。

「あの……カメ子さん、もう変に気を遣ってもらわなくても大丈夫ですから……」

はい？

「確かに神様に恩返しがしたいって思っていましたけど、僕は同じくらいカメ子さんにも恩返しがしたいんです」

はい???

「……神様、カメ子さん……いつかまた行きますよう、今度こそ絶対に。その時まで僕、もつとお金を貯められるよう頑張りますから。それで……美味しいものを食べて、美味しいものを飲んで……またここに来ましょう」

はい???

「今日見つけることのできたこの綺麗な夜景を……また三人で見に来ましょう！」

ちよつとベル君、あなた何か勘違いしてませんか？ 二人にデートに行けと言ったのはただ原作の流れを辿ってほしかっただけで別にベル君に気を使ったわけではないんですよ？

あと、ナチュラルに私にフラグを立てようとししないでください。こんな綺麗な夜景の前でまた見に行きましょうとかフラグすぎるでしょう。

もちろん恋愛フラグとかではなく死亡フラグっぽいのがいただけませんね。脚本家によつては将来『この夜景……カメ子さんともう一

度見たかったな……』的な感じになると思う私は汚れているのだろうか？

ポジティブに考えても街中から勘違いという名の風評被害にあつてる私がベル君が想像するような明るい未来を迎えてもいいのだろうか？

「いいに決まつてるじゃないか！ キミもボクの大切な眷属…いや、家族なんだから」

あ、つい口に出ちゃった、女神さまにお手手をぎゅっと握られ慈悲深い笑顔を向けられた……

「楽しみにしててくださいいカメ子さん」

反対のお手手をベル君にぎゅっと握られ、私たちはしばらくの間夜景を楽しみ、帰路につくのであった。

最後に一言いいたい。

どうしてこうなった？

「今日も順調でしたねカメ子様、ベル様。冒険者様として軌道に乗った、そう言えるかもしれませぬ」

昨日の失言にちよつと参っていたが、やはりダンジョンでの冒険は最高ですな。

迫りくるモンスター、仲間との連携、そして友情！ ……最後のはちよつと私には縁遠いが概ね順調である。

しかしリルカさん、私が探すと居ないのにベル君が探すとすぐ見つかるのはなぜでしょうか？

もしかして、私避けられてる？ いやまさか、今日だって探索中おしやべりしたし、私がダンジョンの壁から採掘した鉱石を不思議そうに眺めたりしてたし仲が悪いことはないと思うんですけど……

「それじゃありり、今日の報酬も山分けしよう」

そう言つてベル君はお金の詰まった袋をリルカさんに手渡している。

もちろんサポーターに支払う金額としては多すぎる額であるが私は特に何も言わない。

このベル君の金払いの良さも後々のリルカフラグの一要因だと考えると下手に反対できないからだ。まあ、山分けしてもモンスターを狩る効率も格段に上がったし、私が採取するアイテムも残さず持つて帰れるから実際はそんなに損害があるわけじゃないので、まあいいかと思つてる。

「……ありがたく頂戴しているリリが言えることではありませんが、ベル様は人が良すぎです。危なっかしくて見ていられないというか……つい世話を焼きすぎてしまうというか……」

ふふふ、流石はハーレム型主人公、無自覚でしょうが女誑し力は相変わらず英雄級ですな。これならリルカさんが原作から乖離してベル君から離れていくことはないでしょう。

あとは私が悪目立ちしないように気を付けて、昨日のような失言をしなければパーフェクトですな。

「やっぱり大きいねバベルは」

「……知っていますかベル様、バベルは20階までがテナントとして貸し出されていて……そこから上は神様たちが住まわれているんですよ」

お、リリルカさんのバベル講義が始まったということとはベル君はちゃんとフラグを回収できたとみて間違いないですね。

私ができることはこの場面ではないので大人しくリリルカさんのお話を聞きますか。

「……実は……リリは死ぬことに憧れていたことがありましたよ」

「……え？」

「一度神様のもとに還れば……今度生まれるリリは今のリリよりちよつとマシになっているのかなあ……なんて」

お、神様転生希望者かな？ でも止めといたほうがいいよ。

「……カメ子様？」

神様転生で力を手に入れても嬉しいのは最初だけだよ……私は……力があつても、誰も私を見てくれないし、私の力に怯えるし、誤解はするし、変な二つ名は付けられるし、仲間募集しても無視されるし、女神さまからの誤解は解けないし、表情筋は仕事しないし、みんな私の過去が悲惨なことだと思ってるし、ちよつと中二発言をするとすぐく意味深なことを言ってるって思われるし、恥ずかしいし。

どんなセリフかって？ 「恐怖というものには鮮度が……」とか「怯えろ、竦め、モビル……」とかですよ。

セリフの結果は私の『イカレ女』という風評被害につながりましたよ。

解せぬ。

「カ……カメ子さん!!」

どうしたのベル君そんな大声出してそしてその何とも言えない顔はどうしたんですか？

大丈夫？ 私は何も気にしてないから早くお家に帰りましょう。

リリルカさんもぼーつとしてないで帰りましょう。

第二十四話 誤解なき日々を目指して。

カーン、カーン、と今日も元気にダンジョンで採掘作業中。

現在地下七階層、今日はベル君にモンスターの処理を任せて私はのんびり鉱石の採掘に汗を流しています。

別にモンスターの処理が面倒くさい訳でも、連日の私の失言のせいでベル君との連携がグクシヤクしてる訳でもないです。

これは原作にはいない私のせいでベル君の単体戦闘能力が落ちているかもしれないという懸念があるため、ベル君には一人狩りという名の修業期間を設けているだけです。

まあ、すでにベル君のステイタスは数値の上では私より圧倒的に上なんですけど、彼の受難と言う名のイベントの数々では低ステイタスの状態では到底生き残れない戦闘もちよくちよくありましたし、このように保険を掛けてあげることが悪いことではないはずですよ。

まあ、ベル君に原作イベントをこなしてもらわないと救われない人もいるのでこれは仕方がないことなのです。

でも今日のベル君はちよつと様子がおかしいですね、なんかソワソワしてるというか、集中力が欠けているというか……ぶつちやけ、私の方をチラチラ見過ぎじゃないですか？

まあ、私は鈍感系オリ主ではないのでちゃんと理由は分かっています。

その理由とは……私のそばでモンスターの死体や私が採掘した鉱石を一か所に集めて回ってるリルルカさんのせいですね！

分かりますよベル君、確かにヒロイン候補の女の子が寂しそうな顔で「死に憧れてました」なんてセリフがヒロインの口から出たら、そこから心配しますよね、気になって視線がこちらに来ますよ。

ハーレム型主人公であるベル君は「気にしないでください」って言われたら全力で気にするのがデフォですもんね。

でもここは死の危険が付きまとう地下迷宮、そんな半端な集中力では足元すくわれちゃいますよ、だってその石柱の陰に角ウサギの姿

がチラツと見えましてし、恐らくベル君は気づいてないでしょうから
ちよつと痛い目に遭うかもね。

もちろん注意を促したり助けには入りません、だって今日はベル君
一人で戦う日だし、こんな感じの危険を経験しないと一人前になれな
いしね。

「ベル様っ！いけませんっ左です！」

お、私の隣でリリルカさんが角ウサギが攻撃に移るのが見えたよう
で慌ててベル君に注意を呼びかけます。

お金のために近づいてきたくせにすつかりベル君に絆されちやつ
て、まあ私としてはしつかり原作通りになっているから文句はないで
すけどね。

はつとするベル君、しかし回避行動に移るには遅い状況であり、足
を使つて何とか受け切った模様。

はは、めっちゃ焦ってるウケる（笑）

「カメ子様！ベル様が大変です！」

お、リリルカさんも焦った様子で私に話しかけてきました、どうや
らベル君を助けてほしいようです、しかし残念ながら私は鉱石を掘る
ので忙しいので無視しましょうね〜（鬼畜）

「聞いていますかカメ子様!?! ベル様がモンスターに襲われているん
ですよ！」

ふーん、そっか…。

ものすごく焦ってるようですが私は断固として助けません、つまり
…お前が助けるんだよ！

リリルカさんさあ、持つてるでしょ魔剣をさあ。昨日のイベントか
ら見てリリルカさんのベル君への好感度は原作同様にあるはずだか
ら、ここはベル君の危険を無視しても問題なし、仮にイベントが起こ
らずモンスターに襲われたとしても、敵は蟻とウサギの二匹のみ、一
息に殺されることはないはず、だから蟻かウサギのどちらかの攻撃が
ベル君を傷つけたときに「恐れよ、我を」すれば大丈夫なはず。

その後で手持ちのポジションで回復させて「まだまだ未熟だね」と
か言つてベル君の成長を促せばベル君はますます強くなるだろし、リ

リルカさんの好感度も多分上がるだろう。

つまりどちらに転ぼうが私には得しかないのだ。

「カメ子様！ 今はそんな事を言ってる場合ではありません、ベル様のピンチなのですよ！」

あれ、すぐにベル君を助けると思っただのに案外私に食ってかかるな。

なんで？ 私が助けることを期待してんの？ でもまあ大丈夫、（リルカさんが助けるから）死なないから。

「し、死なっ！」

しかしヒロインイベントだとしてもベル君も災難だよなあ、死角からニードルラビットに奇襲され、それを咄嗟の機転で防御したけど、蟻に着地狩りされ体勢が崩され二体のモンスターから追撃を受けそうになる、うん、低ステイタス進行では詰んでたな、やっててよかった苦悶式、原作ステイタス補完は成功のようですね。

お、私がマジでベル君が傷を負おうが構わないという鉄の意思を察したのかリルカさんは服の下に隠していた魔剣を取り出し、エンチャントされた魔法で蟻を焼き払いましたね。

その隙にベル君は何とか体勢を立て直し、向かってくるウサギの攻撃を躲し、カウンター気味の一撃でウサギを始末し、すぐさま頭が炎上している蟻の首を落として戦闘を終了させた。

戦闘が終わるとリルカさんは急いでベル君の下へ駆け出してきました。

さて、私はこの後の説教イベントに巻き込まれたくないから地面に落ちてる鉱石をカバンに詰めたり、さつきベル君の倒したモンスターから魔石をはぎ取ったりしながら二人の様子をのぞき見しますか。

うんうん、原作通りベル君はさつきの戦闘の緊張が解けたのかへなへなど地面へ座り込んだ。

その際しつかりと駆け寄ってきたリルカさんにしがみ付くという女誑し力を遺憾なく発揮するあたりベル君のハーレム型主人公力もしつかりと成長してるみたいだ。

リルカさんもベル君に何かクドクドとお説教してるし、ベル君も

顔面蒼白でさっきのモンスターの奇襲がいかによやく生命の危機であつたかを身に染みているみたいだね。

この死ぬかもしれないという感覚や経験はベル君にとつても必要なものだから無事にこなせてよかったよかった。

まあ、私はそんなお説教なんて関係なしにモンスターの死骸から魔石を取り出す作業を黙々としてますけどね。

リリルカさんがツンデレしてベル君が驚く、書籍でも、漫画でも、アニメでも見たことのある光景を目の前で堪能し終えた私は二人にそろそろ帰ろうと声を掛けます。

さて、残りは帰り道でベル君がリリルカさんが所属するファミリアについて聞けば今日のイベントは終了です。

うーん疲れた、今日は勘違いされるような失言もしなかったし、原作イベントも見れたし充実した一日でしたね。

ベル君も帰ることに賛同してくれて、私の採掘した鉱石が入っているカバンを何も言わずに背負ってくれた。

やだ、こんな気遣いが自然にできるなんてベル君つてカッコいい。

「え？ いや、そんなことないですよこれくらい」

おっと、思わず口に出てしまったようでベル君が照れていらつしやる、しかし今回は失言ではないのでセーフ、寧ろベル君との円滑なコミュニケーションが出来たし結果オーライだ。

「カメ子様、少しよろしいですか？」

んもくせつかくいい感じに終わると思ったのに、ベル君も何事かと足を止めこちらに来た。

「…あの、なぜさっきベル君を助けてくれなかったのでしょうか？ カメ子様、あの時モンスターに気が付いていましたよね」

リリルカさんの発言を聞いてベル君もハつとなり私の顔に視線を向ける。

いや真剣などこ悪いんだけど、何か問題ある？ リリルカさんが気づいてベル君に注意したし、ベル君は咄嗟だけどナイスな判断して無傷で原作通りだし…あれ？ やっぱりどう考えても問題ないじゃない

か。

「もー！聞いていますかカメラ子様！」

はいはい聞いてます聞いてますよ。さっきも言った通り問題ないと思っただから無視したんですよ、あの程度のモンスターからの攻撃ではすぐに死なないし、ポーションの数にも余裕があったし大事に至る方が稀ですよ。

うん？この言い方だと私って仲間の命に何の興味のない危ない人の発言ぽくない？ えつと、あの、その……ベル君ならあれくらい対処できるとタカを括って傍観してしまいました……ゴメンナサイ。

いろいろ言い訳を考えたが今日のところは素直に謝っとこ。

よくよく考えたら今まで私は失言しても自分の意見を撤回せず逃げてたからいらん誤解があったんだと思う、だから今回はいろいろな言わず素直に謝った。

「い、いいですよカメラ子さん、頭を上げてください。確かに少し思うことはありましたけど、カメラさんが僕の強さを信用してくれているって分かってよかったです」

おお！初めて失言の誤解が解けた、やっぱり間違ったら謝るのは必要なことだったんだ。

これなら次回からの失言も恥ずかしがらずに修正していけば私の評価も上方修正されてくるんじゃない？

「はあ、ベル様がそうおっしゃるならリリからはもう何も言いません。ですがカメラ子様……せっかく日の当たる場所にいるのですから、もつと大切にすべきです……」

おや、何かリリルカさんが寂しいような羨ましいような顔をしてますねえ、原作の彼女を思えば誤解とはいえ闇から抜け出し日の中にいる感じの私の立場はまぶしいものではないかな。

偶然か必然か、私とベル君が立ってる場所はダンジョンの光が差し、リリルカさんの場所は陰になってる。

大丈夫ですよりリリルカさん、もうすぐベル君が日の当たる場所に貴

女を連れ出してくれますからもう少し辛抱しててください。

「わわっ！ カメ子様何を!？」

私は彼女の手を掴みこちらに引っ張った、そのおかげで陰にいた彼女を日の当たる場所に引っ張れた。私はほとんど何もできませんけど今日は気分がいいのでこれくらいはしてあげます。

漫画的描写ですけどこれでリルルカさんも日の当たる場所に来れましたね。そう言うと彼女は驚いた顔をしたがすぐに何時もの作り笑いに戻った。

早くその笑顔が本物になるといいですね。

第二十五話 お話は続くよどこまでも。

【魔導書^{グリモア}】

簡単に説明すると読むだけでどんなに才能が欠落した無能でも魔法が覚えられるという奇跡のような本である。

もちろんその価値に見合った価格があり、一般冒険者にはとても手が出せない高価なものである。

しかし、^{豊穡の女主人}とある酒場においては少し事情が異なるらしい……

「なら、気晴らしに読書なんていかがでしょう？」

「読書……」

「本の世界に触れて胸が躍りだせば今の気分を一新できるかもしれないよ？」

良かった、原作通りの読書を勧めてくれましたね。一応シルさんとの縁を切らさないよう毎日お弁当をたかりに来たかいたがりましたね。

いや、この言い方は語弊があるな。

えくと、シルさんの恋路を応援してたかいたがありましたね、かな？

まあ、私も毎日お弁当作ってベル君に持たせてますけどね。

いや、誤解しないでください、ベル君も成長期の少年らしく結構食べるのでシルさんのお弁当1個では足りない時があるみたいなのですよ、だから私の分のお弁当を少し多めに作って持って行ってただけですので、そこんところよろしく。

それはさて置き、原作通り希少性が高く価値のある魔導書を我らの主人公のベル君は女の子を口説き落とすだけで手に入れるようです。

「実はこの本お客様の忘れ物なんですけど……」

ほう、忘れ物ですか？ まあ、とある女神様がベル君に読ますために用意したものだし、ある意味落とし主はベル君になるかなあ。

「えっ、だったらダメなんじゃ……」

だーかーらーとある女神様がベル君のために用意したのだから
実質ベル君の落とし物なの、まあ頭の中で言うだけで実際には口
に出さないカメ子ちゃんなのである。

「ちゃんと返して頂ければ問題ありません…」

でもこれ一回使ったら効果がなくなるタイプですよ、ベル君もシル
さんもそこそこ分かってるんだらうか？

「…減るものではないですし、これはきつと冒険者様の本ですからベ
ルさんのお役に立つことが載ってるかもしれないかも…」

原作通り分かってなかった（汗）

ヤバイですよ、こんな高価なもの使ったら私たちの稼ぎじゃ返せな
いよ、一応貯金も少しあるけど最近女神様のドレス買ったり、お洋服
買ったりしてたから残高が減ってるから弁償代が足りないかも知れ
ない、そうなれば本代を返すためどこからか借金しなきゃならなく
なって借金生活の始まりだよ。

あ、いや、借金生活なのは今更か。ベル君は気づいてないし女神様
は内緒にしているけど、ベル君のナイフ代のせいで我が家は火の車通
り越して火炎車の借金生活でした（ウケル）

うーん、どちらも結果的に私は払わなくても良いだろうけど精神的
に辛いですよこれ。

「…私にはこんなことしかできませんから、ベルさんどうか受け取っ
てもらえませんか？」

照れ顔で本を差し出すシルさん、ベル君も若干顔を赤くしながら受
け取りました。

そして実はベル君の隣に座って果実水を飲みながらその様子を
黙ってみている私。

原作通りの光景だが若干空気になりつつある私は、何かイライラし
たので果実水をストローで一気に飲み干し漫画やアニメでよく聞く
ジュゾゾオと音を上げて飲み干した。

「うわっ…びっくりした、どうかしたんですかカメ子さん？」

どうかしたって？…いつまでも続くキミたちの甘い空気を断ち
切ってあげたんですよ。

「あ、甘い空気って、もう、からかわないでくださいカメ子さん」
「そ、そうですね、別に僕はそんなつもりは…」

ふ（余裕の笑み） 顔を赤くしながら否定しても説得力ないですよ。
しかし昨日のダンジョンと言い今日のこの言い回しと言い、私コミュ
力アップしてない。

今までの勘違いされキャラとは一線を画してない？

「もう、カメ子さんったら、どこでそんな言葉を覚えたんですか」

おやシルさん、そんなこと聞いちゃいますか？ 流れに乗ってきて
いる私に聞いちゃいますか？ だったら答えてあげますよ「本のなか
で…」ドヤア！

という感じで中々和やかな雰囲気酒場から帰ってきた私たちは
さっそく読書を開始するのである。

ベル君はソファーに座りながら机に向かい本の表紙をじっと見つ
めている。

私はその隣にちよこんと座りベル君が魔導書を読んで倒れた時に
備えて待機している。

「受け取っちゃった…今さら悩んでもしょうがない…とりあえず読ん
でみよう…」

フムフム、なるほど、確かに共通語コイネーでも神聖文字ヒエログリフでもないですね、横

からチラツと見ても文字の意味が分かりませんね。

今更ですが私はこの世界の読み書きができます、どうやら私を転生させてくれた神様はそこんとこのバックアップは完璧らしく全く違和感なく日常生活を送れています。

そんな異世界チートをもつてしてもこの本の内容は分からない、やはり文字という体裁をとっているがこれは何かしらの魔術を発動させる公式図みたいなものなんだろうか？

その証拠に本を見ているベル君は何か汗かきながらふらついてるけど、横でのぞき見している私にはそんな体調不良は見られない。

そんなこんなしてる内にベル君は眠るように机に倒れこんだし私は自分が着ているマントを脱ぎベル君に被せた、これで万が一にも風邪などは引かないだろう。

本は最初は何の変化も見られなかったが、時間がたつにつれて文字みたいなのが消えていく。

ふーん、どうやら時間をかけてベル君に魔法をダウンロードしてるみたいだね。

さて新しいお話が始まるまで時間があるし、今のうちに家事を終わらせてベル君の装備の整備でもしますかな、どうせこの後魔法の威力が知りたくて一人でダンジョンに行っちゃうんだし、せめて装備だけでも万全にしといてあげますか。

「ただいま〜！ ベル君、カメ子君いい子にしてたかい？」

お、女神様のご帰宅されたみたいだ。しかもお夕食が出来たと同時に帰ってくるなんてタイミングが神がかってるなあ、いや、神様だったわ。

おかえりなさい女神様、お夕飯の出来てますよ、今からご用意いたしましょうか？

「おいおい忘れたのかい、今日はステイタスを更新するって言っただけろう？」

あくそうでしたね、こうしんびでしたねなにかあたらしいスキルがはっげんしてるかなあ（棒）

「ふふふ、新たに発現してるかどうかは更新してみないと分からないなあ…ところでベル君の姿が見えないけど何処にいるんだい」

あくベル君なら向こうで本を見ながら寝落ちしてますよ、女神様も帰ってきたしまだ寝てるなら起こさなきゃね。

「ベル君…ベル君っ！起きたまえ」

はく、やっぱりまだ寝てたよ、魔導書の内容はダウンロードし終わったかい？ この魔法はキミが憧れている人との縁をより深くするものだからしつかりしなさいよ。

「あ、……………か、神様…それにカメ子さん…」

はいはい私だよ、よく眠れたかいベル君？

「そうだよボクだ。こんなところで寝ちやって、まったく…マントを貸してくれたカメ子君にはちゃんとお礼を言うんだぞ」

「え？ あ！ マントありがとうございます」

いえいえ、どういたしまして。いつも使ってるやつだから汗臭くなかった？

「い、いえ！ 全然臭くないです！ むしろいい匂いでした…あ、いやなんでもないです！」

おつ、おう、私は難聴系オリ主ではないから最後までしつかり聞こえたが、まあベル君が不快でなかったらいいや。早速渡されたマントを着込んでフードを被れば、あつというまに「カースメーカー♀」の出来上がりつてね。

「二人とも話は済んだかい？ さあ、更新するよ！」

「あ、はい 今行きます」

ベッドをポフポフ叩きながら催促する女神様に服を脱ぎ始めるベル君、その隙に魔導書を確認したところ、見事に全ページ真っ白だったので無事に魔法をダウンロード出来たようだ。

「カメ子君から聞いたよ、知り合いから本を借りたそうじゃないか。後で僕にも見せてくれよ、あんな古めかしい本あまりお目にかかったことがないんだ」

すみません女神様、もう真っ白でメモ用紙か日記帳にするくらいしか利用価値がなくなってます。

何時も通り女神様とベル君はイチヤイチャしながらステイタス更新を始めた。

「…ま、魔法…魔法が発現した」

どうやら原作通りのようだ、となれば次は。

「え…ええええ!!」

やはりベル君は驚きを隠せずガバつと上半身を勢いよくのけぞらせ、腰あたりに座っていた女神様はその反動でバランスを崩しベッドの下に転がり落ちていく。

何てさせる訳にはいかないので完璧なヘッドスライディングを決め女神様のクッションになることに成功し女神様は無傷で私はおでこを強打したようでジンジンする。

「おおお！カメ子君ボクをかばってこんなっ！しつかりするんだ！」

ああ女神様、貴女が無事でよかった。ちよつと痛かったけど大丈夫ですよ。

「かつ神様、本当ですかっ!? 魔法ですよっ!? 僕魔法が使えるようになりました！」

「うん、大げさ…って言うには野暮だね、おめでとうベル君…でももうちよつと周りを気にしようか」

「あわわわ、すみません神様、カメ子さん、怪我はないですか!?!」

ないです。そんな事より、女神様から魔法について聞きなされ、そして好奇心を抑えきれずダンジョンに突撃しキミの憧れの人とのフラグを立ててきなさい。

私は女神様の話に一喜一憂するベル君を見ながら笑みを浮かべるのであった。

第二十六話 ピンチに陥っても私は見てるだけ。

ベル君が魔法を発現した夜、彼は女神様の「明日のダンジョンで試してみるといい」との助言を無視してダンジョンに突撃していきました。

ベル君は私たちが起きないように静かに教会の扉をしめダンジョンに向かって走り出した。

まあ教会の扉は私が定期的に油をさしてるから開閉の際に嫌な音が鳴るはずもないんですけどね。

しかしすぐに帰るつもりなのか装備は身に付けているが水も食料も回復アイテムも持たずに行くなんて：いくら主人公だといってもこれはヒドイ(汗)

私はボウケンシャーなので日帰りの冒険だろうとアイテムの準備は忘れないようにしている。ちよつとした気のゆるみがガバとなり思いがけない被害をこうむり、「あれ、最後にセーブしたのいつだった？」を引き起こしてしまいますからね。

だが上記のことはゲームだから時間を掛ければ挽回できるが、この世界はゲームではない、怪我をすれば痛いし、食べなければお腹がすくし、人に悪意を向けければ悪意をもたれる、そんな当たり前の世界であり、死ねば死ぬ世界でもある。

そんな世界なのに主人公君は何も持たず、ただ好奇心と英雄願望に突き動かされてその危険が付きまとうダンジョンに身一つで挑んでいく。

私も成り行きとは言え「ヘステイア・ファミリア」所属のボウケンシャーだ、短いながらもベル君には口が酸っぱくなるほどダンジョンの心得を教えてきたつもりだ。

まあ、今回ばかりは用意周到で出掛けられても困るんですけどね
(笑)

ふふふ、気持ちさがダンジョンにむいてるせいで教会の外でスタンバってた私の存在に気がつかなかったようですね。

そう！ 私は今回の原作再現を見るために、結構前から外でスタンバってたのですよ。

ワクワク顔のベル君の後ろを音もなくストーキングしながら私もダンジョンに向かいますか。

もちろん私はベル君と違ってどんな些細な用事でダンジョンに向かうときは万が一に備えて常備アイテムは持って来ることを心がけてますのでアイテムポーチは私の腰にしっかりとある。

これでベル君にもしもがあっても死なせることはないはずだ、それ以前に私には魔法があるから、よほど離れていない限り「恐れよ、我を」で援護してあげれば大丈夫だろうか。

おっと、そうこうしてる間にダンジョンにつきました。

さて、ベル君の憧れの人と鉢合わせないように付かず離れずで行きますかね。

やって来ましたダンジョン内、今回は魔法の練習と言うことでそんなに深くは潜らず地下一階付近でうろちよろしています。

私は物陰に隠れながらベル君の観察に勤しんでいると、前方からゴブリンが数匹群れで現れた。

ベル君は待ってましたとばかりに覚えてたの魔法「ファイアボルト」を放ちゴブリン一匹を火だるまにしてしまいました。

残ったゴブリンも仲間が焼却処分されてビビったのか誰もベル君に襲い掛かりません。

しかし勿体ない、この場に私が居ればビビったり恐怖を感じてるやつがいるなら【命ず・輩を喰らえ】とか

【命ず・自ら滅せよ】をノーコストで撃てただけどなあ

しかし敵がビビって襲ってこないからと言って、敵の目の前であんなに喜んじやって、世界樹なら死んでるよベル君(汗)でもこの光景を見てみると悲しくなる、ベル君ほんとに私の教えてきたダンジョンの心得覚えてる？ 油断に慢心、おまけに隙だらけ、ちよつと冒険者として迂闊過ぎない？

おっと、「ファイアボルト」が再び放たれ一撃でゴブリンを燃やした。

それに気を良くしたベル君はさらに三発目、四発目を放ち同じようにゴブリンを燃やしていき、五発目を放とうとしたとき、ベル君はいきなり膝から崩れるように倒れてしまった。

はい、典型的な精神^{マインドダウン}疲弊です。覚えてたての魔法がどれ程の魔法力を使うかも分からないのにバカスカ撃ち過ぎたせいで魔法力が空になり意識が保てなくなったようです。

まあ、私はそんなへマをしたことがないから、ベル君が今どんな気分なのかは分かってあげられないけど、きつと脱水症状の何倍もくらくらし意識が朦朧になるのかもしれない。あ、脱水症状も起こしたことなかったからその例えでも私分かんないや。

まあとにかく原作通りベル君倒れたし、ゴブリンまだ残ってるし、この後の展開はゴブスレで何度も見たことがあるから大体想像がつく。

シクシク、ベル君。貴方が「ヘステイア・ファミリア」に来てくれてとても楽しい日々を送れました。女神様はちよいダメ女神様から恋愛脳女神様になれたし、君のナイフ代で借金生活になったし、サポーターに相場の倍払うことになったし、よその女神様からも注目されるようになったし……あれ？ ころ筒条書きにしたら原作置いといて何とも言えない感情を抱いてしまった。

いや、将来的には「ヘステイア・ファミリア」にとってプラスになるんだからこの湧き上がる謎の感情には蓋をしておこう。

そうこうしてる間に残ったゴブリンが倒れたベル君に薄い本案件を仕掛けようとした瞬間、ゴブリンたちは後ろからの襲撃者によってすべて切り裂かれて消滅した。

ベル君を助けたのは勿論、彼の憧れの人であり淡い恋心を抱いている少女、アイズさん。あとこの後ファインプレーでベル君とアイズさんのフラグを立ててくれるエルフのリヴェリアさんですね。

後は問題なくアイズさんはベル君に膝枕をしてあげ、リヴェリアさんは先に帰って行きました。

まあ、問題があるとすればその帰り道に私が居て、彼女とバツチリ目が合ったことですかね（笑）

「お前は？……なぜここにいる」

わーお、怖いお顔で話しかけられちゃった。なぜって言われてもベル君を見るためですけど？

「…ならあの少年が精神疲弊マインドダウンで倒れるところも見ていたのか？」

あ、ちよつと眉間に皺が寄ってますね、私は鈍感系オリ主ではないためこの状況が非常にまずいということは理解している。ありたいに言えば今の私の状況は仲間を見捨ててその様を見るだけという最低野郎の烙印を押されても仕方がない状況である。

しかし馬鹿正直にあなた方がベル君を助けるのを知ってましたから放置しましたといえば、私がベル君を使って「ロキ・ファミリア」と縁を結ぼうと画策している腹黒系オリ主になってしまう。

「…わからない」

「わからない？ それはどういう意味だ」

「……私はどうすればよかったの…」

そう、ほんと何て言い訳したらいいかわかりません。

今回は確かにやり過ぎました、見逃しすぎでした。

この前のリルカさんのとの初遭遇でもリユーさんが来るのが遅れたように、今回もアイズさんたちが遅れて来る可能性があり本気でベル君に危険があったかも知れないのに原作確認とか息巻いて…ボ

ウケンシャーとして恥ずかしい。

【……でも……ベル君を救ってくれてありがとう……】

ほんとマジで感謝しかねえ、こんなダメな私の尻拭いをしてくれてありがとうございます。

「いや、礼を言われることではないさ。……あと要らぬお節介かもしれんが、あの少年を仲間、いや家族だと思うなら次は迷うな」

【……次は助ける……】

うん、今回さすがに反省した。前に自分で現実を混合するなっと思ったくせにこの醜態、私は彼女に再度頭を下げ真つすぐに出口に歩いていき、【ヘスティア・ファミリア】の自分用ベッドで朝まで眠り、昨日の醜態を思い出し少し悶絶した。

やる所存です。

ベル君に危害を加える者共よ覚悟しとけよ、私の転生特典はちよつとばかりにえげつないぞー！

私は覚悟完了したが肝心の、主人公の心はそう簡単には立ち直らないようだ。ベル・クラネル

「おーいベル君、昨日のあの本を見せて……うわっ!! カメ子君、ベル君はまだ落ち込んでるのかい、昨日からずっとじゃないか」

「……早く良くなってほしい……」

まあ、原因は分かりますけど、正直に話すと原因が女絡みなので女神様が嫉妬してしまわれるので、自分から元気になることを祈ろう。

「あうううう……すみません……本はそこに置いてますからどうぞ……あと、カメ子さんお尻をペチペチ叩くのは止めてください……」

「君もほんとに多感な子だよなあ……」

「……やっつと反応した……」

やっつと反応がありましたね、だってベル君何回話しかけても『あうあう』しか言わないし、そんなお尻を突き出すようなポーズ取ってるんだし叩くしかないでしょうが。

「ふうん、見れば見るほど変わった本だな……あ?」

お! 女神様が魔導書の存在にお気づきになられたぞ、さてベル君も女神様の様子の変化に気づき、落ち込みモードを終了させ、クツションの下から顔をだしたな、さて、ベル君と女神様の漫才が始まったので先日から用意してたものを用意しましょう。

まあ、こんな物なくても原作にはまっつっく影響しませんけど義理としては必要でしょう。

「と、とにかく、この本を貸してくれた店で事情を話してきます!」

「ベル君止せっ! 君は潔癖すぎるっ! 世界は神より気まぐれなんだぞー!」

「こんな時に名言生まないでください!?!」

おっと、間に合ったようですね、しかし話の途中で私がフェードアウトしていったのにこいつら気づいてないんかい。

「すみません神様! 僕急いで行ってきます! もうこうなったら包み

隠さず話して『ドゲザ』に賭けるしかないですよ！」

「…行かせない…」

「退いてくださいカメ子さん！　まさかカメ子さんまで無かった事にしようって言いませんよね!!」

「…持つて行って…」

はい、今私が自由にできる全財産だよ、出来れば女将さんから『そんなの持つて帰りな』って言われてね。

「ご、これって?!…すみませんお借りします！」

そう言っただけでベル君は私の全財産を持つて走り去って行った。

第二十七話 10階層の脅威とは何ですか？

悲報、ベル君に渡した全財産戻らず（涙）

あ、いや、ベル君の話では途中までは弁償はしなくていいよ的な流れでしたけど、お金の出所が私からと分かると女将のミアさんが『そうかい、あの子が用意したのかい…ならこれは預からせてもらおうよ。坊主、女にここまでのことをさせたんだ、しつかり甲斐性をみせてやりな』てきな流れだったそうさ。

いや、何となくお金は全額戻ってくるものとはばかり考えてたけど……私実質無一文になっちゃった（汗）

しかもベル君つたら【ミアハ・ファミリア】から精神疲弊を未然に防ぐため精神力回復薬まで買ってきちゃった。
回復薬二つセットで9000ヴァリスですって、ナーザさんつたら商売上手ですね。

ねえベル君、あそこのお店、回復薬の材料をダンジョンで拾ってきてあげたら値引きしてもらえるんだよ。私何時もそれでおまけしてもらってたのよ。

もしかして何時も如何にもチョロそうなベル君相手だからぼったのかな？ 【ミアハ・ファミリア】も財政難だから取れるところから取つたに過ぎないのかな。

うう、原作と違ってそういう準備全般は私の管轄で、ベル君に経験させなかったことが仇になるとは。

そんな踏んだり蹴つたりの中【ヘスティア・ファミリア】の空気は若干重くなって来ます。

「ベル君…そのサポーター君は本当に信用できるのかい？」

心配性な女神様は怪しげなりりルカさんの事を若干不信がつています。まあベル君に近づく女の子はもれなく疑いますけどね。

私は何故かベル君とベタベタしても怒られないし、逆にボクもベタベタするつと絡んで全く嫉妬されないんだよなあ

女神様に信頼されていると思えば自然と頬が緩むのは仕方がない

ことである。

「ごめんねこんなこと言って、でもボクは君が心配だから……あえて嫌な奴になるよ」

確かに今のリリルカさんはまだ完全にベル君に堕ちてないから信用はできませんよね。

「その娘は何か後ろめたい何かを隠し持つてるかもしれない…それは君もわかってるんじゃないかい？」

不謹慎だが、女神へステイア様がちやんと神様してるところ久しぶりに見た気がする。ベル君が来てから残念女神臭が漂ってたけど、今はちやんと眷属ことどもを心配する優しい神様みたいだ。

あーあ、心当たりがあるベル君は少し曇り顔で女神様を見ている。

「…だいじょうぶ…」

「カメ子さん？」

「…きつと…まちがいじゃない…」

きつと私の言葉なんてあんまり意味はないかもしれないが、ベル君の曇り顔はあまり見えていて気持ちいいものではないし、女神様が厳しい意見を言うなら私は甘い言葉を掛けてあげよう。

だって、ベル君の心はもう決まっているのだから。

てな感じで昨日の夜を過ごした私たちに翌朝衝撃の展開が待っていた!

「あの…ベル様、今日は10階層まで行ってみませんか?」

昨日の今日で女神様のフラグが回収された件について、いやゝ舌の根が乾かぬ内にとはこの事かというくらい展開が早いっすね。

「えっ…どうしていきなりそんな…?」

おーおー、あのベル君が戸惑っていらっしやる。さすがに昨日の今日でこれでは純朴なベル君といえど苦笑いか?

「カメ子様 リリが気づかないと思っていたのですか?」

「…なんの…こと…」

「カメ子様はどうに10階層を踏破され、ベル様の実力もそれに相応しい実力があるのでしょうか?」

ああ忘れてたけど確かに私は10階層まで踏破してたわ、最近ベル君のペースに合わせていたから一回行ったきりだけどよくそんな情報拾ってくるよね。

「…でも僕、この前7階層で死にかけたばかりだよ? そんな僕が10階層に行ってもカメ子さんの迷惑になると思うけど」

「ですがその失敗を経験したベル様ならもう慢心はありませんし、カメ子様もベル様に無関心ではいられません。あえて言えば痛い思いをしたベル様は冒険者として器を磨かれ、カメ子様は仲間との連携を見直されたはずです」

ほーん、リリルカさんって私のこと良く分かってるんだあ、確かにベル君のこと最近とても大事にしようと思ってたところだし。

「それにベル様は強力な『魔法』を手に入れました。今のベル様はカメ子様に引けはとりません」

今日は嫌に私をプッシュしますねえ、まあ、周りから見たら私ゝベル君の構図が当たり前みたいですけど、実際は私へベル君みたいな感じで、圧倒的に負けてるんだよなあ。

でもベル君は私を先輩冒険者としてよいしよしてくれていますから、そんな風に言われたらコロツと騙されそう。

「…実はリリは近日中に大金を用意しなければならぬのです」

おっと、渋つてたベル君もこんなこと言われたら引き返せないでしょうね、私に確認もせず10階層に行くことを快諾しました。

リリルカさんもベル君が断らなければ私も断らないとタカをくくつてますね。さつきからベル君ばかり目が行つてますよ。

あーあ、手切れ金代わりの両刃短剣バゼラードを受け取つてしまいましたか、まったく、女神様のナイフを盗んだらとんずらするくせに妙に義理堅いですね。

いや、ベル君への好意があるから丸腰でほっぱり出さず武器を与えて少しでもベル君の生存率を上げてくれたのでしよう。両刃短剣バゼラードも安いものではありませんしね。

「…おわった？」

「あ、はい。それじゃあ行こうか？」

「…はい」

こうして私たち三人は10階層へと降りていく、そこで何が待ち受けているかは分かり切っているが、ベル君が何とかしてくれるだろう。

しかし、想定以上の事が起こったら私は家族を守るために遠慮はないだろう…

10階層は今までの階層と様子ががらりと変わりほかの階層より自然が多く濃霧のせいで視界が悪い場所である、故に死角からの攻撃にはとても注意が必要な場所でもある。

世界樹の迷宮知識で10階層ごとに雰囲気が変わるのを知ってる私としてはさほど驚きはないし、ベル君も初めて来たにしては落ち着いて周りに注意を払っている。

まあ、10階層に来てすぐにズシン、ズシンと大型のモンスターの足音が聞こえてくれば嫌でも緊張するよね。

霧の中から現れたのは大型級モンスター『オーク』である。イメージ的に馬鹿で動きの鈍いモンスターだと思われるが意外と素早くダンジョンに生えてる天然武器ネイチャーウェポンを振り回すので攻撃力も馬鹿にできない、というか紙装甲の私は一撃食らえば即落ちる。

今回は一匹だけなので速攻で三人ともバラけ、ベル君はオークに突撃しオークの上段を素早く躲し脇腹に一太刀入れ、私は少し離れた距離から手枷につける鎖をジャラジャラならしオークの注意をこちらに向けるように動く、私の鳴らす音が癪に障ったのかオークは脇腹を切ったベル君から視線を外し私に注意を向けてしまった。

その隙をベル君は逃すはずなく背後からオークの頭にバゼラード両刃短剣を突き立てた。

流石に頭をつぶされたオークはそのまま地面へと倒れていった。

「やった?! よしっ止めをー!」

確実に死んでいるように見えるが、まだ微かにオークの指がピクついているのに気付いたベル君は確実に息の根を止めるためバゼラード両刃短剣をオークの頭めがけて振り下ろそうとした時、風を切るような音が聞こえたと思ったらベル君の腰パーツが撃ち抜かれナイフや回復薬が地面にばら蒔かれた。

「カメ子さんー誰から狙われています!」

おっとイベントの始まりかな? 最初のオークは既に瀕死だからほぼ安全は確保されてる。

さて、リリルカさん、私への対策はしてま……!?

【みぎやああ!!】

「カメ子さん!？」

油断しきつてたら顔に何か水ポイものをかけられ目に入った!

でも、滲みるわけでも、痛いわけでもないが……めつちやつスー
スーする!

クーリツシユタイプが目薬をしたみたいにスースーする!

前世から苦手な攻撃をくらい、マントの端で目をごしごし拭き少し
でも早くスースーから逃れるようとしてるとリリルカさんの声が聞
こえてきた。

「……めんなさいカメ子様……でも……これであの恐ろしい魔法でリリの
こと狙えませんね」

く、目のスースーがだいぶ落ち着いてきたが、まさかこんな手で私
の魔法を無効化してくるとは……でも、私対策としては温すぎじゃな
い?

私の魔法は見てる範囲に効果があるんじゃないじゃなくて、私が敵と思つた
相手に効果があるんですよ。

だから視界を潰すのは効果的じゃないんですよ。

「オ、オークが四体……!? カメ子さん動けますか!」

【…動ける……でも……まだ見えにくい……】

あ、ちよつとばかりピンチツぽいかな?アニメやゲームとは違い敵
はまつてはくれず、どんどん攻撃を繰り出してくる。

ベル君が派手に動いてくれるお陰で私への直接的な攻撃はな
いが棍棒持ちの奴は攻撃範囲が広いため巻き添えを喰わないように
立ち回る必要があるし、ベル君の動きの邪魔をしない位置取りもしな
くてはならないなど結構ピンチだ。

まあ普通の冒険者ならね。

だが私はボウケンシャーなのだ! 乱戦時の対策くらいあります
よ!

【ベル君……目を……!】

そうベル君に注意勧告してマントの下のポーチから閃光弾(一個8

000ヴァリス)をオークの集団に投げつけるとモンハンよろしくな光が辺りを包み、マトモにくらったオークは動きを止めたり無茶苦茶に棍棒を振り回し同士討ちなったりと大混乱だ。

そのすきにベル君と合流しちよつと安心した。

さて、あとはベル君にリリルカさんの説得を任せれば一件落着かな。

【…ベル君…追いかけてあげて…】

「え?でも…」

【…私は大丈夫…ベル君…あの娘を…助けてあげて…】

まあ、実際リリルカさんの不安や寂しさをほんとの意味で分かってあげられるのはベル君しかいませんし。

私? 私じゃ無理ですよ、ある意味私は救われたからこの街にいますから。

「でも、いくらカメ子さんでもこの数相手じゃ…!」

【恐れよ、我を】

行き渋ってるベル君の心配をよそに今日も私の魔法は絶好調である!

『ゲブオオオオオ!!』

オークの集団は目潰しの混乱から一転して汚ない悲鳴をあげながら狂喜乱舞をはじめ大混乱だ。

【…問題ない…行って…】

「はい! 後で迎えにきますからカメ子さんも無理しないでください!」

まったく、本当に可愛いなあベル君は…こんな惨状を見ても私を迎えに来るつもりですか。

普通は迎えに来る奴なんていませんよ。

ま、向こうも蟻の大群が相手ですしすぐに片付けて合流しますか。ではオークの皆様死んでください…

【命ず、輩を喰らえ】

第二十八話 一応の和解、そして。

いや〜リリルカイベントは強敵でしたね。

ベル君と別れた後、速攻でオークを始末した私はちよつと合流を遅らすため、わざわざオークの魔石を回収してからベル君を追いかけたんだけど……

いや〜ハーレム型主人公ってスゴいわ、大量の蟻さんの死体の中心でもしつかりとラブコメできるんですから。

まあ、今回のヒロインは絶対的なピンチを颯爽と助けてもらう系なのでしようがないが、私ならそんな殺伐とした場所でのラブコメは遠慮したいわ。

二人の邪魔をしたくなかった私は二人の抱擁が終わるまでひたすら蟻さんから魔石を回収していたら、また蟻さんが湧いてきたか。

まったく、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて地獄に落ちろ、と昔から言われてるし私は二人に気をつかって内緒で蟻さんを処理するため【恐れよ、我を】をしてあげたら…ダンジョンに蟻さんの金切り声がまあ響くこと、ベル君もリリルカさんもビクツとして甘い雰囲気は終了してしまった…。

私は空気が悪くなる前に騒ぎの元凶たちに【命ず、輩を喰らえ】して残った奴は【命ず、自ら滅せよ】してダンジョン内をまた静かにした。

しかし、空気は良くはならず悪いものとなった。

解せぬ。

残存戦力の掃討が終わり私もベル君たちに合流したらリリルカさんが急に顔が青くなりガタガタ震えながら涙目でベル君にしがみ付いている。

恐らく私に今までの事を復讐されると思って恐怖しているのだろう、そういえばリリルカさんは先程（10階層）私の魔法を恐ろしい

ものと評価してたな、となると自分もさっきの蟻さんたちみたいにやられると勘違いして震えているのだろう。

「あ、あの、カメ子さん、リリの事許してもらえないでしょうか？ その、問題はさつき二人で解決したというか…」

おいおいベル君、キミまで私のことを何だと思ってるんだい、そりやあ顔にスースーする水ぽいものを掛けられ情けない悲鳴を上げてしまったが私は怒ってないよ。

むしろ無事にイベントが終了したことに安堵しているんだぜ、だから私は……

「…なんのこと？」

「え？」

「…リルカさん新しい魔石…保管おねがい…」

そう、なんも無かったかのようにすつとぼけるのだ！ どうせ何言っても変な感じで勘違いされるくらいなら全て無かった事にして水に流してしましましょう、ちょうど水も被ったしね（笑）

「…どうしてですか？ 何で何事もなかったようにするのですか？ リリは悪いやつです…嘘ばかりついていたパルウムですよ？」

え〜（困惑）その件はさつきベル君とやったでしょう？ 何で私でもう一度やり直してるんですか？

え、じゃあ私もベル君みたいな歯の浮くような甘いセリフを吐かなかちやいけないの？ そんなの私のキャラじゃないよ、女の子を誑かすのはベル君の領分だよ。

そんな捨てられた子犬のような瞳でこつちを見ないでください、ベル君はなんで固唾を飲むような顔で私を見ているんですか？ あゝあ、変な誤解を避けるためにすつとぼけたのに結局私も何かいい感じのことを言わないといけないの？

「…闇の中の苦しさは…しってるから…」

うんうん、いいこと言ったぞ私。私もベル君と出会うまで一人で冒険してきたが「カースメーカーなりきりセット」のせいで肩身も狭いし、魔法はほかの冒険者から気味悪がられるし、イカレ女なる風評被害もうけた、まさに私の暗黒期だった。だから冷遇されてきたリル

カさんの気持ちはよくわかるぞ。

ん、二人とも私の言葉が胸に響きすぎて目が真ん丸になってますよ、さあ地上に帰りましょう。

その後地上に無事に帰りついたがリリルカさんは荷物を残し忽然と姿を消してしまった。

あまりにも突然だったためベル君は少し動揺していたがすぐに落ち着きを取り戻し『また会えますよね』と私に笑いかけた。

これから長い付き合いになる事は知っていたのでベル君には「…すぐに…」と短く返事を返すと彼は満足そうにうなづくのであった。

ベル君には黙ってるけど、この二日の収入はリリルカさんが居た頃より大きく収益を落としている。

別に私たちがサボってるわけでもモンスターの出が悪かったわけでもない、メタ的に言うときサポーターがいないせいでアイテムの最大所持数が下がった事で換金アイテムをそんなに持ち帰れなくなっただのだ。

簡単に言うとベル君+私で最大所持数を20としよう、一個100ヴァリスで売れるアイテムを限界まで持ち帰っても2000ヴァリスの儲けしかない、で、リリルカさんが加入した時は最大所持数が+100されるので10000ヴァリスも儲けが違う計算になる、いろいろちよろまかされていたがそんなのは些細なものである。

ただでさえ貯蓄に余裕がない「ヘステイア・ファミリア」にとってはこの問題は決して小さくない。

ああ、リリルカさん何処にいるの!! ……って、いたああああ!!

大きなリュック背負って壁に背を預け寂しそうに佇んでいた。

無表情がデフォな私でもこの時ばかりは口角がわずかに反応した…気がする。

「カメ子さん、僕ちよつと行ってきます!」

そう言うとベル君はサポーターである彼女に半人前の冒険者である自分を売り込み始める。

まあ、所謂初めて会った日のオマーージュである。

ベル君に心を許しきってるリリルカさんにとってはこの再現はかなりのロマンスではないだろうか？

まさに好感度MAXの相手に追い打ち、死体蹴り、オーバーキル等々である。

ま、そんな事はさて置き、これで私たちの収入は右肩上がりに増えることだろう、しかも今回からは金銭をちよろまかされたり、お使いで定価の倍以上ボラれることもなくなるので、実質の収益倍増フラグである。

さくて、女神様のためにも頑張ってお金をためるぞ〜!

…なんて意気込んでいた時が懐かしい…

今日は女神様とリルカさんの初対面の日でお洒落なオープンカフェのお店に来ている、原作から二人の空気が悪いのは知ってたし、どうせ私には関係ないことだしベル君だけが気まずいだけだと思っただけ…：なんか私がいるせいかな原作よりベル君が居心地悪そうにしている。

ぶっすううつと如何にも機嫌が悪いですよとリルカさんと目も合わせない女神様。

ズーン…つと如何にも気まずい様子で視線がしたにいつてるリルカさん。

ポーっとして二人の険悪な空気など気にせず我関せずとベル君が買ってきた果実水を飲んでる私。

ベル君はこの空気を払しよくするため二人の仲を取り持ち、尚且つ私を話の輪に加えるという高度なミッションを遂行しなければならぬのだ。

すまんなベル君、もうちよつとしたらお話が進むと思うからそれまで気まずい思いをしてくれたまえ。

「正直に言うとなサポーター君、ボクは君のことが嫌いだ。ベル君に付き纏ってほしくないと思ってる。」

おっと、ついに場が動き始めましたね、もつとも女神様の言葉はベ

ル君の望んだ展開とは違うようで、慌てて言葉を挟もうとするが女神様に手で制されてしまう。

「ベル君を好き放題たぶらかして、それが今では手の平を返したように取り入ろうとしてさ、カメ子君が悪い影響を受けそうだよ。」

「おお女神様ベル君だけではなく、ちゃんと私のことも考えててくださいね。」

でも大丈夫ですよ女神様、私の精神は女神様が思ってるより幼くも、軟でもないんですよ、リリルカさん程度で変な影響なんて受けませんよ。

ま、結局この会合は女神様がリリルカさんの本質を見るための場であり、大好きなベル君を取られないようにするためリリルカさんに釘をさすことが目的なのだ。

「それじゃあサポーター君、これからもよろしく頼むよ……ボクのベル君をね!!」

ほら、もうメツキが剥がれた。さつきまで【疑似神の審判】やら【満足するまで恩をかえせばいい】などカッコいいセリフを言っていた女神様はどこかに行ってしまった、ベル君の腕にしがみつきながら勝ち誇った笑みを浮かべている。

しかし、リリルカさんも負けていなかった。バアン!と叩きながらゆらりと椅子から立ち上がり……

「あッー。ありがとうございます……これで……これでこれからも一緒にいられますねリリにはお優しいベル様っ!」

うんしつてた（真顔） 二人はベル君の腕にぶによんぽによんしたモノを押し付けながらキヤーキヤー言い争いを始め、ベル君はデレデレしながら困った顔をしているが、決して二人を引きはがさなかった。

はー（溜息） お店の中で人の迷惑も考えずにこんな痴話げんかを始めるのはほんと勘弁してもらいたい、周りのお客さんからもしつかり目撃されているんですよ。

ハッキリ言ってくっそ恥ずかしい!

あまりにも恥ずかしかったから机の上のシユガーケースから角砂

糖を二つ取り出し恋愛脳女神様と実はベル君より年上サポーターのおでこに投げつけた。

「イッタイ！ カメ子君一体何のつもりだい！」

「いたた、カメ子様リリが何をしたというんですか？」

「…人前で…はずかしい…」

まったく、はしやぎすぎだよ、ベル君から二人が離れたからベル君の手を引いて二人から引き離し私がいいた席まで連れてきた。

「…ケンカするなら…わたしがもらう…」

そう言つてベル君にギューと抱き着くと女神様とリリルカさんはもう絶対に人の目があるとこころではさつきみみたいな醜態はさらさないと約束してくれた。

これにて一件落着つてね。